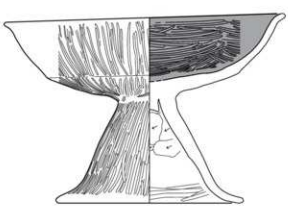
松本市文化財調査報告 №245

長野県松本市

AGATAMACHI

県　町　遺　跡

－第 21 次発掘調査報告書－



2022.3

松本市教育委員会

長野県松本市

AGATAMACHI

県　町　遺　跡

－第 21 次発掘調査報告書－

2022.3

松本市教育委員会

例 言

1　本書は令和２年５月９日～ 10 月 31 日と令和３年７月１日～８月６日に行われた松本市県一丁目ほかに所在する県町遺跡の第 21 次発掘調査の報告書である。
2　本調査は県道松本駅北小松線の改良事業に伴う緊急発掘調査で、松本建設事務所から松本市が委託をうけ、松本市教育委員会が整理作業・報告書作成とともに実施した。整理作業・報告書作成は令和２・３年度に実施した。
3　本調査の実施にあたり業務委託により（一財）長野県埋蔵文化財センターから発掘調査技術指導をうけた。
4　本書の執筆分担は次のとおり。
　Ⅰ・Ⅳ章 澤柳秀利、Ⅱ章・Ⅲ章３節３ 白鳥文彦、
　Ⅲ章 1･2 節 伊藤藏之介・直井雅尚、３節 4･5 吉澤せり子、その他 直井
5　本書の作成にあたっての作業分担は次のとおり。
　遺物洗浄・注記・接合復元：市川二三夫、内田和子、中澤温子、古幡大治朗、洞沢文江、三澤栄子
　遺物実測：〔土器〕竹内直美、竹平悦子、直井雅尚、宮本章江　〔石器〕白鳥文彦、直井知導
　　〔金属〕洞沢文江、古幡大治朗
　遺構図調整・デジトレ：荒井留美子　遺物デジトレ：直井知導、前沢里江　ＤＴＰ：直井知導、前沢里江
　写真：〔現場〕各調査担当　〔遺物〕宮嶋洋一　編集：直井雅尚　総括：澤柳秀利
　その他、廣田早和子の助力を得た。
6　本文、図・表中で用いた遺構の略称は次のとおり。
　竪穴建物：住（弥生～平安）・竪（中世）、土坑：土、ピット：Ｐ、溝跡：溝、焼土集中：焼、自然流路：流
7　土器・陶磁器実測図の掲載番号はすべて通番となっている。軟質須恵器・緑釉陶器・白磁は掲載番号末尾にそれぞれ「軟」、「緑」、「白」の文字を付して区別した。断面表現は次のとおり。
　白抜き：弥生土器・土師器・黒色土器、黒塗り：須恵器・軟質須恵器・白磁、灰色：灰釉陶器・緑釉陶器
8　図中で用いた方位記号、座標軸は真北を指している。
9　本書作成にあたり参考とした文献名は巻末 55 頁に一覧で掲載した。
10　本書で用いた古代の土器・陶磁器の時期区分、用語は文献４・６に拠った。
11　発掘調査と本書作成にあたって次の方々からご教示、御協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。
　鈴木敏則、田中一穂、馬場伸一郎、原 明芳、若林 卓
12　本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒 390-0823 長野県松本市中山 3738-1 ℡ 0263-86-4710）に収蔵されている。

目 次

例言・目次 …… 1
第Ⅰ章　調査の経緯 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境 …… 4　第２節　歴史的環境 …… 4　第３節　周辺の調査成果概要 … 7
第Ⅲ章　調査成果
　第１節　調査の概要
　　1　調査と整理の方法 … 8　2　地区別の概要 …… 8　3　基本層序 ……10
　　4　調査成果の概要 ……11
　第２節　遺構
　　1　竪穴建物 ……13　2　土坑 ……15　3　ピット・柱穴列 ……15
　　4　溝 ……15　5　焼土集中 ……16
　第３節　出土遺物
　　1　土器・陶磁器 ……23　2　土製品・瓦 ……26　3　石器・石製品 ……47
　　4　金属製品 ……50　5　鍛冶遺物 ……53　6　その他の遺物 ……53
第Ⅳ章　総括 …… 54
写真図版
報告書抄録

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査の経過

長野県松本建設事務所（以下「建設事務所」という）により、松本市県一丁目で（都）松本駅北小松線の改良事業が計画された。事業予定地の大半が周知の埋蔵文化財包蔵地である県町遺跡に該当していたため、松本市教育委員会（以下「市教委」という）と建設事務所は当該文化財の保護について協議を行い、遺跡が破壊される範囲について発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。発掘調査とそれに係る事務を市教委が行うこととし、建設事務所と松本市の間に令和２年４月10日付で発掘調査業務委託契約が締結された。また市教委が発掘調査を実施するにあたり技術支援をうけるため、（一財）長野県埋蔵文化財センターと業務委託契約を締結し、職員の派遣をうけることとなった。

現地での発掘作業は、令和２年５月９日～10月31日および令和３年７月１日～８月６日に実施した。発掘終了後、令和３年８月16日付で松本警察署に文化財発見通知、長野県教育委員会（以下「県教委」という）に発掘調査終了報告書を提出した。整理作業は令和２～３年度に行い、令和４年３月18日に発掘調査報告書（本書）を刊行した。本発掘調査に係る文書等の記録は以下のとおりである。

＜令和２年度＞

４月10日　建設事務所と松本市が埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約を締結
（業務名：令和２年度 防災・安全交付金（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務）

３月18日　建設事務所と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約の一部を変更する契約を締結

３月22日　「埋蔵文化財発掘調査完了報告書」を建設事務所に提出

＜令和３年度＞

６月　７日　建設事務所と松本市が埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約を締結
（業務名：令和３年度 防災・安全交付金（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務）

８月16日　「文化財発見通知」を松本警察署に提出

８月16日　「発掘調査終了報告書」を県教委に提出

２月16日　「出土文化財譲与申請書」を県教委に提出

第２節　調査体制

【令和２年度】

調査団長　赤羽郁夫（松本市教育長）

調査担当　三村竜一（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、澤柳秀利（主査）、百瀬将明（主任）、白鳥文彦（会計年度任用職員）

技術支援　若林 卓（長野県埋蔵文化財センター調査研究員）、田中一穂（同）

協 力 者　青木義和、芦沢雅量、荒木 博、上松寛由、内田和子、大滝清次、加藤朝夫、加藤 旻、久保田瑞恵、黒崎 奨、金子正夫、鈴木 高、田中重正、中澤温子、西原達雄、西村一敏、平林藍子、古幡大治朗、古屋美江、待井正和、三澤栄子、道浦久美子、宮本章江、百瀬二三子、柳さおり、山本紀之、矢満田伸子、和田五郎

事務局 文化財課　竹原 学（課長）、三村竜一、百瀬耕司（主査）、吉見寿美恵（会計年度任用職員）

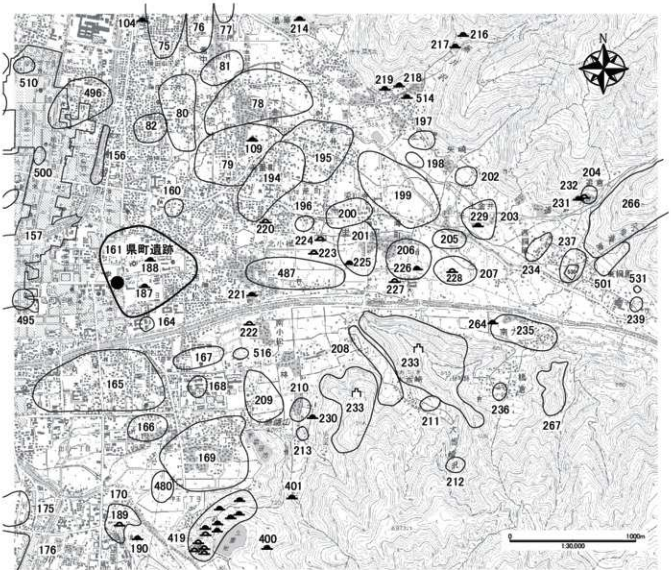
【令和３年度】

調査団長　伊佐治裕子（松本市教育長）

調査・整理担当　澤柳秀利（主査）、直井雅尚（会計年度任用職員）、伊藤蔵之介（同）

協 力 者　荒井留美子、市川二三夫、黒崎 奨、佐々木正子、猿楽あい子、田中重正、直井知導、平野宗彦、洞沢文江、前沢里江

事務局 文化財課　竹原 学、百瀬耕司（埋蔵文化財担当係長）、草間厚伸（主任）、吉見寿美恵（会計年度任用職員）



●：今回の調査地点、数字は松本市遺跡台帳記載の遺跡番号

遺跡

75 大輔原遺跡
76 大村立石遺跡
77 大村前田遺跡
78 惣社遺跡
79 宮北遺跡
80 横田遺跡
81 大村塚田遺跡
82 横田古屋敷遺跡
156 女鳥羽川遺跡
157 松本城下町跡
160 四ツ谷遺跡
●161 県町遺跡
164 埋橋遺跡
165 筑摩遺跡
166 三才遺跡
167 筑摩北川原遺跡
168 筑摩南川原遺跡
169 神田遺跡
170 平畑遺跡
175 出川遺跡
176 出川西遺跡
194 里山辺下原遺跡
195 新井遺跡
196 荒町遺跡
197 藤井山田遺跡
198 藤井遺跡
199 堀の内遺跡
200 兎川寺遺跡
201 針塚遺跡
202 上金井矢崎遺跡
203 上金井遺跡
204 追倉遺跡
205 里山辺鎌田遺跡
206 薄町遺跡
207 石上遺跡
208 林山腰遺跡
209 千鹿頭北遺跡
210 御符遺跡
211 大嵩崎遺跡
212 わぢ沢遺跡
213 林遺跡
233 林城址（大城・小城）
234 西桐原遺跡
235 入山辺南方遺跡
236 橋倉遺跡
237 東桐原遺跡
239 天神海道遺跡
266 桐原城址
267 水番城址
480 神田西遺跡
487 北小松遺跡
495 天神西遺跡
496 岡の宮遺跡
500 片端遺跡
501 海岸寺遺跡
510 堂町遺跡
516 小松下遺跡
530 桐原氏館址
531 天神上遺跡

古墳

104 国司塚古墳
109 惣社車塚古墳
187 県塚 1 号古墳
188 県塚 2 号古墳
189 平畑 1 号古墳
190 弘法山古墳
214 御母家 1 号古墳
216 山田入古墳
217 里山辺丸山古墳
218 藤井 1 号古墳
219 藤井 2 号古墳
220 荒町古墳
221 北河原屋敷古墳
222 中上古墳
223 大塚 1 号古墳
224 大塚 2 号古墳
225 針塚古墳
226 古宮古墳
227 里山辺猫塚古墳
228 石上古墳
229 上金井古墳
230 御符古墳
231 人穴 1 号古墳
232 人穴 2 号古墳
264 南方古墳
400 生妻 1 号古墳
401 生妻 2 号古墳
419 中山古墳群
514 藤井 3 号古墳

：現存古墳　：湮滅古墳

第 1 図　遺跡の位置と周辺遺跡

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

県町遺跡は松本市県、中央、埋橋、里山辺西小松に所在し、松本市街地の東方に位置する。東部の山地から流れる薄川によって形成された扇状地扇端寄りに立地し、北西に緩く傾斜しており、周辺の標高は 595 ～ 608m の間にある。薄川へは南に 400m、女鳥羽川へは北西に約 700m、東方２～３㎞に美ヶ原から続く筑摩山地があり、西方は奈良井川、梓川を越えて 15㎞ほどで飛騨山脈に至る。

本遺跡は、薄川の氾濫により急速に堆積してできた扇状地上にあるため、その影響を強くうけている。薄川は三峰山、扉峠付近に源を発して北西に流下し、入山辺地区を扇頂として西側に広がる扇状地を形成している。扇端は松本市街地にあり、南側は神田付近まで広がり、北側は南北に広がる女鳥羽川扇状地と交差している。薄川の流路は約 16㎞あり、松本市中条で田川と合流する。河床は急勾配で、出水率、河況係数共に大きく、有史以後もしばしば洪水を起こし、周辺地域には大量の土砂が堆積している。

本調査地点は東西に細長く（約 140m）、県町遺跡の西側外縁部に該当する。調査区内では、西側のＡ区は全般的に薄川の氾濫による砂礫層が堆積している。遺物は出土したが、遺跡範囲の最外縁部にあたるためか遺構は少ない。一方東側のＢ区は遺跡範囲の西部にあたり、氾濫の影響は少なく比較的濃密に遺構が存在している。Ｃ区はあがたの森交差点南西隅の狭隘な範囲だが、古墳時代の検出面の下に 1m 以上の砂礫層を確認している。

第２節　歴史的環境

本遺跡形成に関わる薄川の段丘及び扇状地上には、縄文時代から中世の遺跡が数多く分布しており、近年の発掘調査により次第にその様相が明らかになりつつある。本節では発掘調査の実施された遺跡を中心に県町遺跡の周辺遺跡を時代ごとに概観する。

旧石器時代：薄川扇状地周辺では、弘法山古墳東麓で尖頭器が採集されているのみである。

縄文時代：薄川の扇頂～扇央部にかけて集落跡が確認されているが、扇端部は遺物の出土のみに留まっている。左岸扇頂に位置する南方遺跡（早期～後期）、山麓の林山腰遺跡（前期～後期）、扇央の千鹿頭北遺跡（中期）、右岸扇央部では石上遺跡・里山辺鎌田遺跡（前期末葉～中期初頭）、堀の内遺跡（中期初頭）などで集落跡が確認されている。遺物が確認されている遺跡として、左岸扇端に神田遺跡（晩期）、右岸扇央の針塚遺跡（前期～後期）、上金井遺跡、扇端の女鳥羽川遺跡（後期～晩期）、丸の内遺跡（後期～晩期）などがある。

弥生時代：中期から扇端部に集落形成が始まり、後期になると扇央部に広がっていく様子が確認されている。左岸扇端には筑摩遺跡（中期）、神田遺跡（中期～後期）、方形周溝墓と住居址を確認した平畑遺跡（後期）、扇央の千鹿頭北遺跡（中期～後期）、筑摩北川原遺跡（中期～後期）、右岸扇端には大集落である本遺跡のほか、礫床木棺墓が確認された横田古屋敷遺跡（中期～後期）、扇央に堀の内遺跡（後期）、宮北遺跡（後期）、里山辺鎌田遺跡（後期後葉）などの集落跡が確認されている。右岸扇央に位置する針塚遺跡では、昭和 57 年の調査で前期末の再葬墓群が発見されている。

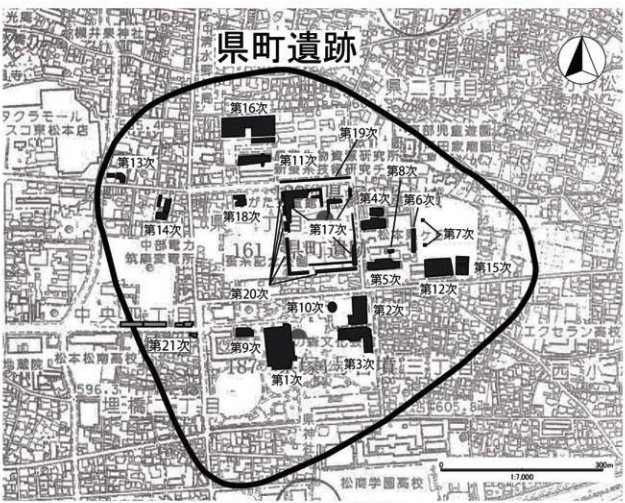
古墳時代：左岸では扇央に千鹿頭北遺跡（前期～後期）で集落跡が確認されているほか、小松下遺跡（後期）、筑摩北川原遺跡（中期～後期）がある。右岸扇央では、弥生時代後期から継続する堀の内遺跡（前期～後期）で住居址と前期の方形周溝墓を検出し、里山辺鎌田遺跡（中期）、薄町遺跡（後期）、里山辺下原遺跡（後期～末期）、惣社遺跡（前期～中期）、宮北遺跡（末期）、新井遺跡（前期～後期）、扇端の天神西遺跡（前期）などで集落跡や遺物を確認している。

古墳は河岸段丘上と扇状地両端の山麓部に分布している。前者では右岸の薄町から荒町にかけて積石塚古

墳が知られ、針塚古墳（中期）、古宮古墳（後期頃と推定）などを確認している。針塚古墳では竪穴式石室から舶載鏡の内行八花文鏡、鉄斧・鉄鏃等が出土している。石上古墳（後期）では土師器と須恵器を伴う周溝が検出されている。山麓部では、里山辺地区の藤井沢沿い上流右岸に積石塚古墳の里山辺丸山古墳、中流域に藤井１～３号古墳、入山辺地区の追倉沢沿いに入穴１・２号古墳などの後期古墳がある。このほか実態が明らかではないが、藤井沢沿い上流に山田入古墳がある。左岸には扇頂に南方古墳、扇央に中上古墳などの後期古墳があり、南方古墳では横穴式石室から金銅装の主頭太刀、銅鋺・承盤、鉄製壺鐙などの多量の遺物が出土した。山麓部には直刀、剣が出土した御符古墳（中期後半～後期初頭）、さらに南西の山腹または尾根の基部に生妻、棺護山の中山古墳群（中期）、その西側の中山丘陵北端には弘法山古墳（前期）がある。

奈良・平安時代：扇状地上に広範囲に遺跡が分布している。左岸には、林山腰遺跡、小松下遺跡、千鹿頭北遺跡、神田遺跡、平畑遺跡があり、集落跡を確認している。平畑遺跡では平成２年の調査で複数の住居址と墓址を検出している。右岸では、石上遺跡、薄町遺跡、堀の内遺跡、兎川寺遺跡、針塚遺跡、新井遺跡、里山辺下原遺跡の調査で集落跡が発見されている。下流域の本遺跡や宮北遺跡でも集落跡を確認している。

中世以降：右岸に海岸寺遺跡、里山辺下原遺跡、本遺跡があり、左岸では林山腰遺跡、三才遺跡がある。林山腰遺跡では平成 14 年の２次調査で礎石建物が発見されており、林城に関連する遺構と考えられている。これ以外では、堀の内遺跡、石上遺跡、薄町遺跡で火葬墓や土坑が確認され、青磁や中世陶器などの遺物も得られている。南方遺跡では平安末から中世にかけての住居址が発見され、宮北遺跡では平成 21・22 年の６次・７次調査において中世と思われる竪穴状遺構が検出された。薄川流域には林城址、桐原城址などの山城があり、周辺に平時の居館も存在したと思われるが、発掘事例が少なく様相は明らかになっていない。



第２図　調査地と周辺調査地点

調査次	調査年度	調査原因	調査面積	検出遺構	主な出土遺物	特記事項
1 次	1980(昭55)	あがたの森公園造成	591㎡	竪穴建物 3 軒(弥生 2、平安 1)、礫敷遺構 1 基	弥生土器、上師器、石器(磨製石鏃、磨製石斧、石包丁など)、金属製品(釘、鋲子)、布目瓦	弥生時代の焼失住居内から、石器が一括出土『松本市文化財調査報告№ 19』
2 次	1984(昭59)	あがたの森公園駐車場造成	1338㎡	竪穴建物 17 軒(弥生)、土坑 11 基、溝 3 条	弥生土器、石器(打製石鏃、磨製石鏃、石包丁など)、管玉、石製紡錘車、骨製鏃	弥生時代の焼失住居が 4 軒検出され、良好な一括遺物が出土『松本市文化財調査報告№ 82』
3 次	1985(昭60)	あがたの森公園造成	1372㎡	竪穴建物 24 軒(弥生 23、平安 1)、土坑 44 基、溝 6 条	弥生土器、上師器、石器(打製石鏃、磨製石鏃、石包丁など)、砥磨礫	弥生時代の遺構・遺物を多数確認『松本市文化財調査報告№ 82』
4 次	1986(昭61)	松本県ヶ丘高校内特別教室建設	853㎡	竪穴建物 13 軒(平安)、土坑 4 基、溝 4 条、集石 3 基	上師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁・白磁、石器(砥石、凹石)、遺方(石英閃緑岩)、金属製品(釘、刀子など)、羽口、土錘	緑釉陶器、青磁・白磁、遺方などが出土。平安時代の遺構・遺物が主体『松本市文化財調査報告№ 82』
5 次	1987(昭62)	松本県ヶ丘高校内本館建設	696㎡	竪穴建物 27 軒(弥生 2、古墳 4、平安 21)、土坑 4 基、溝 2 条、集石 4 基、ピット群 1 基	弥生土器、上師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、石器(打製石鏃、磨製石鏃、凹石など)、金属製品(釘、刀子など)、羽口	弥生～平安時代の遺構・遺物を確認。内面に朱墨の残った須恵器皿が出土『松本市文化財調査報告№ 82』
6 次	1988(昭63)	松本県ヶ丘高校内部室棟建設	84㎡	竪穴建物 2 軒(平安)、土坑 2 基	上師器	平安時代の遺構・遺物を確認『松本市文化財調査報告№ 82』
7 次	1986(昭61)	松本県ヶ丘高校内U字溝敷設	6㎡	竪穴建物 2 軒(平安)	上師器、須恵器	立会調査で平安時代の遺構・遺物を確認『松本市文化財調査報告№ 82』
8 次	1989(平1)	松本県ヶ丘高校内倉庫建設	48㎡	竪穴建物 2 軒(平安)、土坑 1 基	上師器、須恵器、灰釉陶器、凹石	平安時代前期の遺構・遺物を確認『松本市文化財調査報告№ 82』
9 次	1991(平3)	旧制松本高等学校記念館建設	330㎡	掘立柱建物址 1 軒(平安)、溝 2 条、集石 2 基、自然流路 2 条	上師器、須恵器	大型の掘立柱建物址(5 × 4 間)検出
10 次	1995(平7)	あがたの森公園内貯水槽設置	40㎡	土坑 5 基、ピット 7 基、溝 2 条、自然流路 1 条	弥生土器、須恵器	主に弥生時代の遺構・遺物を確認
11 次	1996(平8)	大蔵省関東財務局公務員宿舎建設	662.4㎡	竪穴建物 4 軒(奈良・平安)、建物址 1 軒(近代)、土坑 4 基	上師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、金属製品(鉄鏃、楔、海老錠、隆平永宝など)、上製品(羽口)、石器(凹石)	海老錠、風字硯、朱墨硯、皇朝十二銭(隆平永宝)、大量の鉄滓が出土『松本市文化財調査報告№ 128』
12 次	2001(平13)	松本県ヶ丘高校体育館建替え	1200㎡	竪穴建物 37 軒(弥生 1、奈良・平安 27、不明 8)、土坑 49 基、ピット 69 基、穴状遺構 2 基、溝 5 条、流路 4 条、集石 3 基	弥生土器、上師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁・白磁、常滑焼、陶磁、石器(磨製石鏃、砥石など)、水晶製遺方、金属製品(鉄鏃、紡錘車など)、銭貨(宋銭)	平安時代住居内から緑彩文陶、緑釉三足盤、水晶製遺方などが出土『松本市文化財調査報告№ 165』
13 次	2004(平16)	共同住宅建設	170.1㎡	土坑 6 基、ピット 89 基	上師器、須恵器、陶磁器、金属製品(釘)、石器(白)	全体的に近世～近代の掘乱をうけているが、古代の遺構・遺物を検出
14 次	2007(平19)	マンション建設工事	594.6㎡	竪穴建物 21 軒(奈良・平安)、竪穴状遺構 6 基、土坑 112 基(うち井戸 2 基)、ピット 153 基、溝状遺構 25 条、自然流路 2 条	弥生土器、上師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁・白磁、上師質土器、中世陶器、丸鞆(石製)、つき臼、曲物底板、金属製品、銭貨(成平元寶)	多量の緑釉陶器、緑彩文陶、墨書土器、朱墨硯、丸鞆などが出土『松本市文化財調査報告№ 200』
15 次	2010(平22)	松本県ヶ丘高等学校小体育館建設	702.7㎡	竪穴建物 2 軒(平安)、土坑 60 基(近世～現代、時期不明もあり)	上師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、金属製品(釘、紡錘車など)、銭貨(元祐通宝)、陶磁器(近世～現代)	全域洪水の堆積層に覆われていたが、平安前期の住居址から古代の土師器が多数出土『松本市文化財調査報告№ 213』
16 次	2010・2011(平 22・23)	幸町・東部統合保育園建設	4420㎡	竪穴建物 55 軒(弥生 5、平安 50)、掘立柱建物址 5 軒(弥生)、土器棺墓 1 基、火葬本棺墓 1 基、土坑 88 基、ピット 101 基、溝 30 条、集石 5 基	上師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、緑彩文陶、青磁・白磁、転用硯、上錘、石器(石鏃、石包丁、環状石斧、勾玉、管玉、丸鞆、指輪状石製品など)、金属製品(鉄鏃、刀子、遺方、銅鈴など)、骨、炭化物	勾玉、管玉、指輪状石製品、大量の緑釉陶器、緑彩文陶、越州窯青磁などが出土『第 16・17 次発掘調査概要報告書』
17 次	2012(平24)	人工芝運動場建設、市道拡幅事業	2259㎡	竪穴建物 40 軒(弥生～平安)、掘立柱建物址 3 軒(平安)、櫛床木棺墓 3 基(弥生)、土坑墓 2 基(弥生)、土坑 60 基(弥生～平安)、溝 5 条(平安)	弥生土器、上師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器(中世～近世)、黒曜石剥片、石製模造品(鏡、勾玉、磨製石斧)、白玉、金属製品、骨、炭化物	櫛床木棺墓から多量の焼骨、古墳時代中期(5 世紀)の住居址から初期須恵器が出土『第 16・17 次発掘調査概要報告書』
18 次	2013(平25)	あがた児童センター建設	308㎡	土坑 3 基(墓址の可能性)、ピット 2 基、溝 1 条、自然流路 4 条	上師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器、金属製品	平安時代の遺構・遺物を確認
19 次	2018(平30)	県第一雨水幹線雨水貯留施設設置	32㎡	なし	なし	掘乱をうけており、遺構・遺物は確認できず
20 次	2019・2020(令 1・2)	県第一雨水幹線新設事業	313.3㎡	竪穴建物 14 軒(弥生 2、古墳 7、古代 5)、土坑 56 基、ピット 12 基、溝状遺構 3 条	弥生土器、上師器、須恵器、灰釉陶器、管玉、石製模造品(鏡)	古墳時代住居址の床面から土師器が一括出土

第 1 表　周辺調査一覧

第３節　周辺の調査成果概要

県町遺跡は東西約 1㎞、南北約 0.7㎞の広大な面積を占めており、その遺跡範囲内では以前から開発事業が繰り返されてきた。古くは 1919（大正８）年の旧制松本高等学校（現・あがたの森公園）建設時に、緑釉陶器段皿、灰釉陶器皿が出土している。それ以降、1945（昭和 20）年から 1977（昭和 52）年までに、開発行為に伴う、または県ヶ丘高校風土研究会による調査が行われている。

1945（昭和 20）年に県ヶ丘高校校庭に防空壕を掘った際に、骨壺らしきものが出土している。1949（昭和 24）年６月には、蚕業試験場桑園（現・あがた運動公園多目的広場）内で、県ヶ丘高校風土研究会がトレンチ調査を実施し、土師器、須恵器、緑釉陶器などを検出している。1953（昭和 28）年 11 月の同校プール建設工事の際には、土師器、須恵器、灰釉陶器が、1955（昭和 30）年のグランド拡張工事・排水溝構築工事では、灰釉陶器、緑釉陶器が出土している。1958（昭和 33）年に場所は不明だが、同校の敷地内で土師器、須恵器片 100 余点が、1977（昭和 52）年の家庭科教室棟建設の際に土師器、須恵器、灰釉陶器が採集されている。また、時期は不明ながら、信州大学文理学部構内（現・あがたの森公園）から土師器、灰釉陶器、緑釉陶器が出土している。これらの県ヶ丘高校の敷地内並びにその周辺地域で実施された調査では、主に奈良・平安時代の遺物が出土しており、当地域に古代の遺跡が分布していることは広く知られることとなった。

1980（昭和 55）年にあがたの森公園造成に伴う緊急発掘調査が実施され、以降開発事業に伴う松本市教育委員会による調査は、今回調査までに 20 回を数える。これらについては、第２図に各調査地点の位置を、第１表に各調査の概要を示した。以上の調査成果によって当地域の各時代の様相は解明されつつある。

県町遺跡では、縄文時代の生活の痕跡は確認されず、弥生時代中期から大規模な集落が形成される。そして、古墳時代を経て、奈良・平安時代に最盛期を迎える。その後急速に衰退し、中世においてはわずかな生活の痕跡が残されているのみである。近世以降は発掘調査による出土事例はきわめて少ないが、埋橋村三社筆頭の縣宮社（現在は南の県３丁目４番に遷座）や、近世松本城主であった戸田家の廟所が造られた。

遺構は各時代の竪穴建物址が主体であるが、弥生時代では土器棺墓・礫床木棺墓などの墓址、平安時代には大型の掘立柱建物址（５×４間）などを確認している。中世の遺構では、複数の竪穴状遺構や土坑などが検出されている。遺物は各時代の土器類を中心に、弥生時代には焼失住居内からの石器の一括出土や、多数の勾玉・管玉などの玉類を検出している。古墳時代では、住居址の床面から初期須恵器や土師器の一括出土を確認している。さらに、奈良・平安時代には多数の緑釉陶器、青磁・白磁、風字硯・転用硯、巡方・丸鞆などの特殊遺物を検出しており、有力な集落の存在が推定される。中世の遺物では少数ながら、古瀬戸の卸皿、鎬蓮弁文の青磁椀などが出土している。

多数の遺構、遺物が出土している一方、いくつかの調査地点では、激しい洪水の跡が確認されている。本遺跡周辺の地形は、南東から北西に 1/60m 程傾斜している。そのため、本遺跡南側を東から西に流下する薄川で氾濫が起きた場合、大きな影響をうける。特に、13、14、15、17 次調査地点では大規模な洪水があり、弥生時代や平安時代の集落の一部を破壊したことがわかっている。

第Ⅲ章　調査成果

第１節　調査の概要

１　調査と整理の方法

調査の原因事業は県道松本駅北小松線の北側への拡幅とそれに伴うあがたの森交差点改良で、遺跡にかかる範囲は県道に沿った東西約 125m である。事業地東寄りで交差する市道 2064 号線の 3m 幅を除き、同市道の西側をＡ区、東側をＢ区とする調査区を設定した。ただし隣接する民間用地への通路を確保したので同市道の西隣 7m 幅には調査区は及んでいない。排土置き場の関係でＡ区は東・中・西の３小区、Ｂ区は東・西の２小区に分割し、小区ごとに調査を進めた（本文・図中では「Ａ区東」「Ｂ区西」「Ｂ西小区」などと略記）。また、あがたの森交差点拡幅に伴い南西角にＣ区を設定した。安全対策として、調査対象地をガードフェンスで囲い、また発掘区は県・市道境ラインから最低 2m、北側私有地境ラインから最低 1m の未掘部分を残して設定した。

現場作業は遺構検出面まで重機掘削、その後は人力で検出と掘り下げを行った。遺構番号は種類ごとに通番（竪穴建物は 301、土坑・ピット・溝はそれぞれ１から）を付した。測量は原点（X=25800、Y=-46700、世界測地、平面直角座標系第Ⅷ系）を基準に 1/20 縮尺の遣り方測量によった。遺物の取り上げは、遺構内からのものは①図化・№付与、②層位一括、③埋土一括を状況に応じて使い分け、包含層と検出面では層位や面ごとの一括を基本とし、出土状況によっては図化・№付与を行った。写真撮影は一眼レフデジタルカメラ（ニコン D5300）・コンパクトデジタルカメラ（リコー C aplio500 G wide）を使用して行い、一部 35㎜フィルムカメラ（キャノン FM10）も併用した。フィルムはカラーリバーサルフィルムを使用した。

報告書作成では、土器は遺構と周辺の検出面、包含層出土品を中心に実測、掲載した。石器は全点を計測して一覧表に掲載したが、図化は遺存が良好なものに限った。金属製品も同様で、さらに近世以降のものは提示していない。個別の遺構図掲載は 1/80 縮尺を基本とし、遺構内施設や小規模なものは 1/40 とした。調査区が狭小で、区内の遺構配置図と遺構図を兼ねたものもある。

２　地区別の概要

(1) Ａ区

東・中・西の小区に細分し、この順で調査した。

東小区は東西約 30m、南北約 7m の範囲で、Ⅳ層上面を第１検出面（以下「Ⅰ検」という。他の検出面も同様）、Ⅶ層をⅢ検（※Ａ区には古墳時代に相当するⅡ検がないため、本書作成にあたりⅢ検と改めた。Ｂ区西小区も同様）とした。Ⅲ検は FL 層（次項「基本層序」参照）に広く削られ、それ以前の遺構が消失していたため、調査範囲は小区の東端から 11m、西端から 4.5m に止めた。遺構はⅠ検の土坑１基（土 4）のみである。

中小区は東西約 20m、南北約 7m の範囲で、東小区の西端に接続し、同様に二つの検出面を設定した。Ⅲ検では東小区から続く FL 層が広く残れたため、調査範囲は西端から約 12m に止めた。Ⅰ検で平安の土坑１基（土 5）、Ⅲ検ではいずれも弥生中期後半に属する土坑１基（土 6）、ピット２基（P3・4）、溝１条（溝 4）を検出し、FL 層の流路南西岸を確認した。またⅠ検で円礫が詰まった長方形基調の土坑 13 基を検出したが、近世以降の遺構のため図や写真の掲載はしていない。

西小区は東西約 21m、南北約 7.5m の範囲で設定した。既設埋設管のため中小区と接続していない。他の小区と同様二つの検出面を設定した。Ⅰ検は撹乱がひどくⅣ層が小範囲に残る。遺構は中小区と同様の近世以降の土坑 13 基のみである。Ⅲ検は東西約 20m、南北約 5.5m の範囲を掘削したが全面が FL 層に覆われる。深掘りの結果、同層の最深部は調査面から 1m を超え、Ⅵ・Ⅶ層は大きく削られて遺構や遺物包含層は残存しないと判断した。

(2) B区

西・東の小区に分け、この順に調査した。さらに東小区は土置き場の関係で東(1)～(3)の細区に分けて進めた。

西小区は東西約 10m、南北約 3.8m の範囲を設定し、Ⅳ層上面をⅠ検とした。この面で検出した遺構は竪穴建物 1 棟（301 竪）、土坑 2 基（土 2・3）、ピット 2 基（P10・11）で、土坑は平安、竪穴建物は中世に属する。Ⅰ検の下位 30cmほどのⅦ層上面をⅢ検とした。狭隘で排土を反転しながら最終的に南北約 3m、東西約 4.3m（幅 0.7m のトレンチ状で東方に約 2.5m 拡張）の範囲を調査できた。竪穴建物 1 棟（302 住）とピット 3 基（P14 ～ 16）を検出した。302 住は弥生中期後半、P15 は 302 住を切るのでそれ以降、P14 は平安の遺物を伴う土層Ⅰ検での掘り逃しのもの、P16 は時期不明である。本区南西隅部で深掘りにより下層の状況を確認したが、黄褐色砂混シルト（Ⅶ層下部）の下は砂礫が 50 ～ 60cm厚で堆積、さらにその下部は黄褐色細砂層が 10 ～ 15cm、黄白色～暗褐色粘土層と続く。Ⅶ層以下は遺構・遺物とも検出されなかった。

東小区は東西約 8m、南北約 6.5m の範囲を設定し、前述のように南半分を東(1)、北半分を東(2)の細区として調査を進めた。東(3)細区は東(2)細区の東側に隣接する位置で、Ⅱ検のみ東西、南北共に約 2.8m の範囲を設定した。調査面は最終的に 3 面となる。Ⅳ層上面のⅠ検では竪穴建物 2 棟（303・304 住）、土坑 1 基（土 10）、ピット 4 基（P2・5 ～ 7）、焼土集中 1 基を検出した。いずれも平安時代に属する。Ⅱ検はⅠ検の下位 10cmほどにあり、竪穴建物 2 棟（308・309 住）、土坑 1 基（土 9）、ピット 3 基（P8・9・12：柱穴列 1）、溝 1 条（溝 5）を検出した。いずれも古墳時代の遺構である。溝 5 は一部を深掘りで破壊してしまい調査区壁面のみで確認した部分もあるが、最大幅 1.0m を測る弧状を呈し、内部や周辺から古墳時代中期の土器が出土した。古墳時代の調査面（Ⅱ検）は本小区とC区のみで確認されたことになる。Ⅲ検は東小区北半分のみに残り、Ⅰ検の下位 30cmほどにあるⅦ層中で竪穴建物 1 棟（306 住）、ピット 5 基（P13・17 ～ 20）を検出した。いずれも弥生時代中期後半の遺構である。本小区の南東部一帯のⅠ・Ⅱ検（Ⅰ検では 303 住と焼土集中以東、Ⅱ検では 308 住以南から溝 5 にかけての一帯）の検出面からは、遺構外でありながらまとまった形の土器が点々と出土するという特異な状況を呈したため、それぞれに№を付与して取り上げた（土器実測図等では「B区東№付」と表示）。概ねⅠ検からのものは平安、Ⅱ検は古墳時代に属す（本章 3 節 1(6) 参照）。また、北半Ⅰ検の掘削土中から銅製品が得られ、錆落としの結果銭貨「延喜通宝」と判明した。このため出土層位はⅤ層上面にあたるが、詳細な地点は不明である。

東小区の中央部北寄りでは土層（地盤）の不自然な乱れが確認された。この乱れは北北東から南南西方向に延びる不規則な線状に連なり、そこに接するⅡ検の 308・309 住とⅢ検の 306 住に影響を与えていた。306 住では埋土の黒色土がブロック状に落ち込み、間隙には砂や礫が現れて、埋土と床が大きく乱れていた。残存床面と乱れた部分の境界線は複雑に波打ち、断面でも埋土がずれて落ち込む状況が観察された。この土層の乱れについては現場段階での担当者間の検討により、地震による地割れに起因するものと推定した。この状況はⅠ検では認められないので、原因となった地震の発生はⅠ検形成（古代）以前、309 住埋没（古墳時代中期）以降と考えられる。

(3) C区

調査区が三角形を呈していたために、調査範囲をL字型で設定した。東西約 7m、南北約 2m の長方形の南東部に、東西約 2.5m、南北約 2m の拡張部を設けた。A・B区でⅠ検としたⅣ層上面は、本調査区においてはⅢ層によって所々抉られており、遺構は確認できなかった。また調査区の安全を確保したうえで確認出来た地表下 2m 範囲のうち、Ⅴ層以下は砂礫層である FL 層が 1m 以上堆積するのみであり、A・B区でⅢ検としたⅦ層の検出面及び遺構は確認できなかった。そのため本調査区で遺構を確認できたのはⅤ層上面のⅡ検のみである。なおⅤ層も上層であるⅢ層とⅣ層に所々抉られており、Ⅱ検からは竪穴建物 1 棟（305

住)、ピット２基（P21･22）を検出した。305 住は古墳時代中期（上層に平安時代の遺構がある可能性)、P21･22 は 305 住の覆土を掘り込むそれ以降の遺構である。※ P21、P22 は調査時はそれぞれ土 1、土 2 の名称であったが、本書作成にあたり変更した。

３　基本層序

今回調査地における土層は各地区でかなりの相違を呈したが、大枠としての基本層序を第２表のようにまとめた。ただし層厚はさまざまで、地区によっては存在しない土層もある（第２表右側欄)。各層の形成時期は大別するとⅠ～Ⅲ層が近現代～中世、Ⅳ・Ⅴ層が古代～古墳時代、Ⅵ・Ⅶ層が弥生時代中期、Ⅷ層以下は弥生中期以前で、本遺跡の重層性を典型的に示している。

Ⅱ層とⅢ層は砂や砂礫が主体で、不定な帯状・スポット状にⅣ層を抉っており、薄川の洪水による堆積と推測する。Ⅱｂ層から近世末の陶磁器が出土しており、それ以降の形成であろう。Ⅳ層は広い範囲に安定して分布し、Ⅱ・Ⅲ層との層界は明瞭で、一定期間、地表層を形成していたと推測できる。主に古代の遺物を包含し、平安時代の 303 住や土５、中世の 301 竪が掘り込むことから、それ以前の形成であろう。Ⅴ層はＡ区では大枠でシルト主体、Ｂ区では上部のシルトから下部のシルト混砂へと変化する。Ⅳ層との層界は不明瞭である。主に古墳時代から古代の遺物を包含し、古墳時代前･中期の遺構が掘り込まれていたことから、古墳時代前期からの形成と考える。Ⅵ層は部分的にしか存在しないが、シルト主体で混砂、褐灰から黄橙色を呈し、弥生時代中期の遺構を覆う。Ⅶ層は黒色シルトである。上層との層界は明瞭で、一定期間、地表層を形成していたと推測する。下層との層界は不明瞭である。弥生時代中期の遺物を包含し、同期の遺構が本層中から掘り込まれる。その頃の形成であろう。Ⅷ層は黄褐色～灰黄褐色シルトで、下部は漸移的に砂質が強まる。遺物の包含はなく、弥生時代中期の遺構が掘り込む。周辺調査地でも類似したシルト層が認められ、本調査地から北側に広く分布する可能性がある。Ⅸ層以下はＡ・Ｂ区とも部分的な深掘で確認した。暗褐色粘土質シルト、灰黄褐色砂、砂礫層と下方に続く。いずれも遺物の出土はない。

Ⅴ層とⅥ層の間には洪水性堆積の砂礫層（FL 層）が広い範囲でみられた。Ａ区では東南東から西北西へ

層名	代表的な色調・土質・混入物など（地区・地点で大きく異なる場合もある）	形成時期	存在地点概略			
			A	B東	B西	C
Ⅰ	表土。撹乱・造成土を含む。	現代	●	●	●	●
Ⅱa	灰黄褐(10YR4/2)砂、比較的細粒。シルト微混。小礫少混。しまり中。粘性弱。	近世後半以降	●	●	●	●
Ⅱb	灰黄褐(10YR4/2)～褐(10YR4/5)砂、比較的粗粒。Ⅳa 層ブロック・小礫混。しまり弱。粘性なし。	近世後半以降	●	●	●	●
Ⅲa	にぶい黄褐(10YR5/4)～灰黄褐(同 4/2)砂・砂礫・シルトの小範囲で乱雑な互層。Ⅳ層ブロック混。しまりなし。	近世後半以降	●			●
Ⅲb	灰黄褐(10YR4/2 ～ 5/2)砂混シルト。しまり中。粘性弱。層中、4 層境に薄い砂層。Ａ区東は残存状況不良。	近世以降	●			●
Ⅳa	黒褐色砂混シルト	古代	●	○	●	●
Ⅳb	褐色砂礫・シルト	古代		○	●	
Ⅴa	褐灰色～灰黄褐(10YR5/2)砂混・砂質シルト。部分的に黒褐粘質土(10YR3/2)。Ⅳ層との対応は不明瞭。	古墳～古代	●	●	●	●
Ⅴb	褐(10YR4/4)砂混粘質シルト～砂質土。暗褐(10YR3/3)ブロック混。しまり中～強。粘性弱～やや弱。酸化鉄濃集。	古墳			●	
FL	砂礫・砂・シルト互層の洪水性堆積。自然流路。	弥生中期～古墳	●		○	●
Ⅵ	褐灰(10YR5/1)～にぶい黄橙(10YR6/4)砂混シルト。しまりやや強。粘性やや弱。弥生中期遺構を覆う。	弥生中期			●	
Ⅶ	黒褐色シルト。弥生中期遺構を覆う。Ⅵ層との対応は不明瞭。	弥生中期	●	●	●	
Ⅷ	灰黄褐(10YR4/2)シルト。しまりやや弱。粘性やや弱。弥生中期遺構に切られる。下層は黄褐色シルト～砂～砂礫	弥生中期以前	●	●	●	
Ⅸ	Ⅷ層より下位層を一括	弥生中期以前	●	●	●	●

※柱状図は第５･６･９図に付したものを参照。　●確実に存在　○部分的に存在

第２表　基本層序

流路状に大きくⅦ・Ⅷ層を抉って堆積し（最深 1m）、弥生時代遺構面は消失していた。B 区東小区の南半、C 区の全域でもⅣ・Ⅴ層の下部はすぐに砂礫層に移行し、弥生時代の遺構面が失われていたため A 区と同様の FL 層と判断した。平面的な蛇行や枝状分岐が想定でき、若干の時間幅があるのかもしれない。B 区東と C 区では上部のⅤ層に古墳時代の遺構がみられるので、本層の形成は弥生時代中期から古墳時代前期の間と推定される。薄川の氾濫によるものであろう。

遺構は主にⅣ層上面（Ⅰ検：古代・中世）とⅦ層中（Ⅲ検：弥生時代）で検出した。B 区東小区と C 区のみにⅡ検（古墳時代）がある。Ⅳ層とⅦ層は安定期、Ⅲ層、FL 層とⅨ層以下は薄川の氾濫による変動期と見ることができ、特にⅣ層、FL 層、Ⅶ層は本遺跡南半部での鍵層となる可能性がある。

4　調査成果の概要

最終的な調査面積は 1,027.56㎡で、各区の検出面ごとの内訳は第 3 表上段のとおり。発見された遺構は竪穴建物 8 棟（301 ～ 309 住：307 住は欠番）、土坑 32 基、ピット 21 基、溝址 4 条、焼土集中 1 基、ピット列 1 基、鍛冶炉 1 基（303 住内施設）で、それぞれが弥生時代中期後半、古墳時代前・中期、古代（平安時代）、中世の所産と推定できる。これら遺構の調査区ごとの時期別概要は第 3 表下段のとおりである。

遺構内と検出面、包含層から多量の遺物が出土したが、ほとんどが遺構と同時期のもので、特に弥生時代、古墳時代、平安時代が多い。遺物の種別は土器類（陶磁器を含む）・土製品、石器・石製品、金属製品、鍛冶関連遺物がみられた。時期別の概要は第 3 表下段のとおりである。わずかに自然遺物（炭化物・骨類）も得られたが帰属する時期が明らかにできていない。

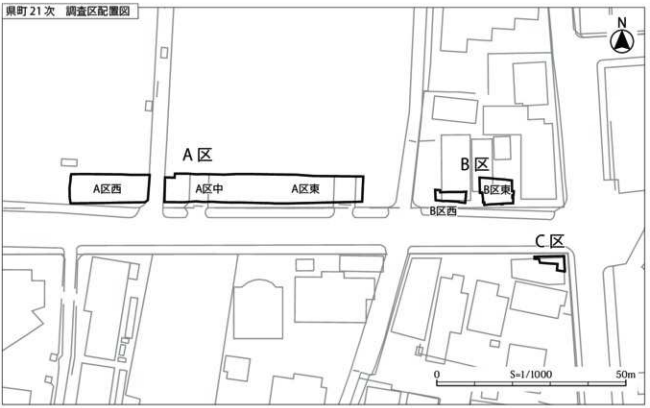
調査面積（単位：㎡）

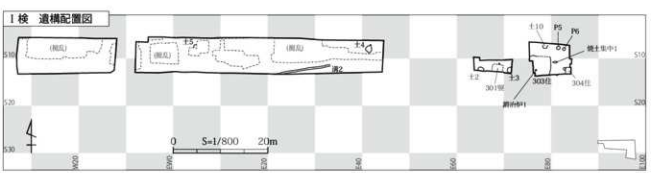
検出面＼地区	A 区				B 区			C 区	Ⅰ～Ⅲ検計	備　考
	西小区	中小区	東小区	A 区計	西小区	東小区	B 区計			
Ⅰ検	157.47	388.65		546.12	20.68	55.24	75.92		622.04	Ⅰ検の中・東小区は連結
Ⅱ検						60.21	60.21	17.61	77.82	
Ⅲ検	104.64	94.57	80.98	280.19	14.01	33.50	47.51		327.70	
小区計	262.11	564.20		826.31	34.69	148.95	183.64	17.61	1027.56	

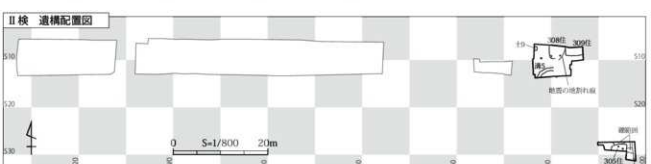
発見された遺構と出土遺物

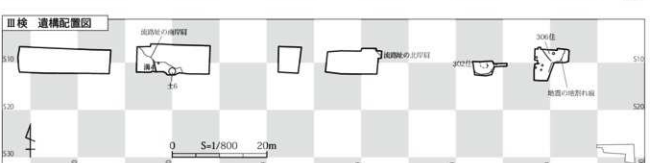
地区＼時期			近世以降	中　世	平　安	古　墳	弥　生
遺構	A 区	西小区	土坑13基				
		中小区	土坑13基		土坑 1 基（土 5）		土坑 1 基（土 6） ピット 2 基（P3・4） 溝 1 条(溝 4)
		東小区	溝1条（溝2）		土坑 1 基（土 4）		
	B 区	西小区	溝1条（溝1）	竪穴建物 1 （301 住）	土坑 2 基（土 2・3） ピット 3 基（P10・11・14）		竪穴建物 1 棟（302 住） ピット 2 基（P15・16）
		東小区			竪穴建物 2 棟(303・304 住) ※303 住内に鍛冶炉 土坑 1 基（土10） ピット 4 基（P2・5 ～ 7） 焼土集中 1 基	竪穴建物 2 棟（308・309 住） 土坑 1 基(土 9) ピット 3 基（P8・9・12） 溝 1 条(溝 5)	竪穴建物 1 棟（306 住） ピット 5 基（P13・17 ～ 20）
	C 区				ピット 2 基（P21・22） ※平安以降	竪穴建物 1 棟（305 住） ※上層に平安遺構がある可能性	
遺　物				土師質土器皿・陶磁器 銅製品 （銭貨：元祐通宝）	土器・陶磁器（土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁） 土製品（丸、紡錘） 石器（砥石） 鉄器（刀子、釘）、 銅製品（銭貨：延喜通寶） 鍛冶関連遺物（鉄滓類、鍛造剥片）	土器（土師器、須恵器） 土製品（ミニチュア・土錘） 石器（砥石？）	土器（弥生土器） 土製品（土製円盤） 石器（磨製石鏃）

第 3 表　県町遺跡第 21 次調査成果の概要









第３図　調査区配置図・遺構配置図

第２節　遺構

１　竪穴建物

(1) 第 301 号竪穴建物（第５・６図）

Ｂ西小区Ⅰ検（Ⅳ層上）で検出した。南側は調査区外へ続くため全形はわからないが、確認された範囲は南北 1.6m、東西 2.3m の長方形を呈す。南側の調査区壁面でわかる深さは 96cm を測り、壁は垂直に近く掘り込まれる。床面は平坦で明瞭な硬化はみられない。覆土は上下に大別され、上層は複数の土層が遺物や礫、炭化物を伴って流入したように堆積し、下層はしまりの弱い土質の単層で炭化物や遺物はほとんどなかった。ピットは５基（P_1 ～ P_5）確認され、床面に深さ３～ 12cm の浅い窪みを掘って径 15 ～ 25cm の扁平な礫を据えていた。窪みは礫を据えるための掘り方で、礫は礎石の可能性が高い。また北壁に沿って約 30 ～ 40 cm 幅で高さが床面から約 60cm に及ぶ範囲に、黄褐色土ブロックが水平に並ぶように混じった堅固な褐色土層があった。通常の埋没土ではなく上部が平坦になるように版築状の構築がなされたものと判断し棚状遺構と命名した。この棚状遺構は P_1 ～ P_5 を半ば覆っており、礫（礎石）上に柱が立てられた後に、柱に半分かかるように土を積み上げたものと推測する。構築土内からの出土遺物はない。本址は礎石立ちの半地下式建物であったと思われる。

遺物は土器・陶器、石器（砥石）、鉄製品（釘、鏃、不明品）、銭貨が出土している。土器・陶器は 4,386g、ほとんどが上層からで、古代のものが主体でわずかに弥生土器もまじる。17 点を実測図（第 10 図 22・23、第 18 図 345 ～ 359）、２点を拓影（第 21 図 496・497）で示したが、すべて上層への混入品と考える。銭貨は床面近くから元祐通宝（北宋：初鋳 1086 年、第 24 図 19）１枚が出土している。本址の時期は、深い掘り込みや礎石の存在、出土銭貨から中世と推定する。

(2) 第 302 号竪穴建物（第５・６図）

Ｂ西小区のⅢ検（Ⅶ層上面）で検出した。P14・15 に切られる。北側は調査区外へ続き全形は不明だが、確認できた範囲は南北 2.6m、東西 4.4m を測り、東西に長い楕円の平面形を呈すと推定する。壁高は検出面から約 5cm と浅いが、上部からの通し土層でみると 30cm 以上ある（第６図下段Ｂ－Ｂ面）。床面は中央部がやや高く、周辺部ほど下がっており、明瞭な硬化はない。ピットは 12 基（P_1 ～ P_9・P_{11}・P_{14}・P_{15}）確認された。うち P_2・P_7・P_{15} は径約 30cm、深さ 20 ～ 30cm と規模が大きく、長方形配列の柱穴の可能性もある。炉の検出はなかった。

遺物は弥生土器 4,456g と黒曜石などの剥片がある。覆土中が多く床面付近からは少ない。土器は７点を実測図（第 10 図１～７）、17 点を拓影（第 20 図 427 ～ 443）で示した。ほとんどが破片だが、P_{14} 内からは甕（５）がまとまって出土した。弥生時代中期後半の様相を示す。また、覆土中に少量ではあるが古墳時代前期の土器（第 13 図 87 ～ 89）がまとまって出土した地点があり、調査時に把握できなかった同期の遺構が本址覆土に切り込んでいた可能性がある。

(3) 第 303 号竪穴建物（第７・８図）

Ｂ東小区のⅠ検（Ⅳ～Ⅴ層中）で検出された。南側と西側は調査区外へ続き全形はわからない。確認した範囲では南北 4.2m、東西 4.3m を測り、方形基調の平面形を呈すと推測する。床面付近まで削り込んでしまったが、調査区壁面の土層でみると、壁は垂直に近い傾斜で高さ 30 ～ 40cm を測る。床面はかなり平坦で、西端部には貼り床がある。貼り床以外で床の硬化は感じられなかった。本址北壁際の２カ所に焼土と炭化物が集中する部分があり、それぞれをカマドの跡と想定したが、時間的な前後関係は把握できなかった。ピットは８基あり、規模は様々で柱穴の特定はできなかった。西端部の貼り床を剥がしたところ径 30cm、深さ 7cm ほどの範囲が強い熱をうけて硬化しており、被熱硬化層は深さ 20cm ほどまで達していた。その時点で周辺から羽口や鉄滓の出土はなかったが、形状から鍛冶炉の可能性を考えた。炉内と周囲の土を可能な

限り採取し、後日、水洗と選別をした結果、多数の鍛造剥片や微細な鉄滓類が得られた（本章３節５参照）ため、この遺構が鍛冶炉であったと判断した。本址には鍛冶炉を伴う時期と、その使用を止めて貼り床で覆った二つの時期が想定され、前述の２カ所のカマドもこれに連動する可能性がある。

遺物は土器・陶器と石器、鉄製品（釘、刀子）、銅製品（器種不明）、鉄滓類、鍛造剥片である。土器類は土師器、灰釉陶器を中心に 15,681g が出土し、79 点を実測図（第 13・14 図 90 ～ 168）で示した。量が多い上にやや時期幅があるが、中心となるのは 11 ～ 12 期（10 世紀後半）のもので、本址の廃絶もそこに求められるだろう。

(4) 第 304 号竪穴建物（第７図）

Ｂ東小区、Ｉ検の南東隅で検出された。南側と東側は調査区外へ続くため全形はわからないが、確認された範囲では南北 1.4m、東西 1.2m を測り方形基調の平面形を呈すと推測する。北西隅を P2 に切られている。壁高は 8cmだが調査区壁面の土層状況からみて本来は 20cmほどと推定する。床に硬化面はなく、ピットや周溝、カマドなどの施設も検出できなかった。

遺物は土器類が小破片で 344g 出土したのみで、ほとんどは周囲のⅣ・Ⅴ層から混入した古墳時代の土師器だった。古代に属するものとしては須恵器杯Ａ・鉢、灰釉陶器椀、土師器甕（甕Ｂ、その他の甕）、などがあり、１点を図示（第 15 図 184）できた。８～９世紀代の様相とみたい。

(5) 第 305 号竪穴建物（古・新）（第５図）

Ｃ区の中央に位置する。調査区の北から西へと延びる礫範囲を北辺で切るが、北西隅でその礫範囲と共に攪乱をうける。北辺は約 3m で、南側が調査区外へと続くため南北幅は不明である。南側の調査区壁面でわかる深さは 30 ～ 40cm を測る。北辺の西半分は礫範囲に沿う形でややゆがむ形を設定したが、前述のとおり礫範囲を切っている点、また礫の密度が住居北辺に沿う部分でやや薄くなっている点から、本来はゆがまずに、東西方向に沿った直線であった可能性が高い。カマドや火床面は確認できなかった。覆土は礫をわずかに含む砂質シルト土で、住居の掘り込みより高い位置で貼り床とみられる硬化面を検出したが、中央部に残存するのみで壁付近では検出できず、また調査区南壁の遺構断面でも検出できなかった。

遺物は土器が 2,135g 出土している。土師器の甕・壺・杯・甑など古墳時代中期に属するもの（下層出土：第 11 図 39 ～ 42）と、回転糸切り痕を持つ黒色土器の杯など８期（９世紀後半）に属するもの（上層出土：第 15 図 185 ～ 188）とがあり、後者は前者と比して出土位置が高いため、後世に紛れ込んだ可能性がある一方、今回住居の掘り込みとみなした面を底面とする古墳時代中期の住居と、前述した硬化面を床面とする古代の住居とが重複していた可能性を示すとも考えられる。

(6) 第 306 号竪穴建物（第９図）

Ｂ東小区のⅢ検で検出された。南・北側は調査区外へ続き、東側は地層変動の影響をうけて不明となっており全形はわからない。確認されたのは西壁（南西壁）とそれに続く南北 2.4m、東西 4.8m ほどの範囲で、北西から南東方向に長軸をとる小判形の平面形を呈すと推測する。壁はやや傾斜を有し、高さ約 10cmを測るが、調査区壁面でみると 30cm以上あったと推定する。床面は地山をそのまま用いた不明瞭なもので硬さはなかった。住居内の施設はピットが１基検出されたのみである。

遺物は土器と土製品、石器が覆土や床面付近から散発的に出土した。土器はすべて弥生土器で総量は 1,982g を量る。７点を実測図（第 10 図８～ 14）、25 点を拓影（第 20･21 図 444 ～ 468）で示した。壺・甕・鉢・甑などの器種がみれらる。弥生時代中期後半に属するものであろう。土製品は土器片から作られた土製円盤（第 22 図土１）である。石器は磨製石鏃と砥石で前者を図示した（第 23 図４）。

(7) 第 308 号竪穴建物（第７・８図）

Ｂ東小区Ⅱ検で検出された。北側は調査区外へ続き、東側は地層変動（Ⅲ章１節２参照）の影響で不明

となっている。確認されたのは南北 2.7m、東西 3.4m ほどの範囲で、西壁と南壁の一部が捉えられた。隅丸方形が基調の平面形と推測する。本址の存在は床面近くまで削り込んだ段階で初めて把握できたため壁のほとんどを削平しているが、調査区壁面などの観察から 25 ～ 40㎝の壁高があったと推定する。床面は平坦で、明確な硬化面や貼り床はなかった。住居内の施設は炉址とピット 1 基が検出された。炉址は、西壁から 150㎝、南壁から 250㎝の位置にあり、床面を約 40㎝径の円形に浅く掘り窪め、東側に最大長 33㎝、最大幅 6㎝の細長い河原石の炉縁石を設置している。炉底は被熱赤変（赤変部最大厚 5㎝）している。ピット（P_1）は本址南西コーナーから 1m ほど内側にあり、径 37 × 30㎝、深さ 57㎝を測る。規模からみて柱穴の可能性がある。上部には土師器甕（第 11 図 30）が転がり込んだように口縁部を下にして遺存していた。

遺物は、覆土下層や床面から土器と石器が出土した。土器は総量で 2,003g あり、すべて土師器で 6 点を図示した（第 11 図 25 ～ 30、ただし 25 は 309 住混入品と推定）。前記の甕のほか鉢、壺、高杯、蓋があり、全形を知り得るものは少ない。古墳時代前期に属すると考える。石器は砥石状のものである。

(8) 第 309 号竪穴建物（第 7 図）

B 東小区Ⅱ検、北東隅で検出された。南西の一部を調査したのみで、北側および東側は発掘区外となり全容は明らかでない。平面形は軸をほぼ南北・東西にとる方形基調と推定され、確認した南北長 1.7m、東西長 3.6m である。壁は急な傾斜で立ち上がり、高さ最大 45㎝を測る。確認部分では掘り方底を平坦に整えて床面としており、貼り床は認められない。ピット・炉跡等の施設は確認されなかった。

遺物は土器が総量で 2,595g 出土しているが、まとまった状況ではない。8 点を図示した（第 11 図 31 ～ 38）。すべて土師器で高杯、壺、甕、小型丸底土器がみられる。古墳時代中期に属すると考える。

2　土坑

7 基を確認した（第 5 表）。時期的には土 6 が弥生時代、土 9 が古墳時代、土 2 ～ 5・10 が平安時代に属する。他に A 区Ⅰ検で円礫（間隙は砂）が詰まった長方形や方形基調の 25 基（土 11 ～ 35）を確認したが、近世以降なのでここでは扱わない。特記すべきものとしては、多量の遺物が出土した土 3、完形の灰釉陶器の皿が単体で出土した土 5（土器図は第 16 図 237）がある。

土 3（第 5 図）は東側が区域外にかかり全形は不明だが、南北 1.1m、東西 1.3m ほどの隅丸方形から楕円形の平面形を呈するものと推定する。深さは 50㎝で覆土に炭化物を含み、底面は平坦ではない。13,665g の土器が出土し 45 点を図示（第 15・16 図 189 ～ 233）した。径 1m 程度の土坑からの出土量としてはきわめて多い。これらは 10 ～ 11 期（10 世紀中頃～後半）くらいに位置付けられ、本址の埋没もそのころと考える。緑釉陶器が 6 点（215g）含まれており、隣接する 301 竪の上層混入品も含めると本址とその一帯から出土した緑釉陶器は 10 点 320g で、今回調査での緑釉陶器総重量 457g の 7 割を占める。その大半は被熱により釉薬が溶融、発泡した状態であった。土器の多量出土と変質した緑釉陶器の存在は、本址とその一帯が何らかの特殊な場所であった可能性を示す。

土 5（第 4 図）は遺構の北東部しか残存せず全形の推定は難しい。灰釉陶器の段皿が割れずに出土したため平安期の木棺墓の可能性を考えたが、埋土の状況には、それと断定するのに躊躇されるものがある。

3　ピット・柱穴列

独立したピットは 21 基を確認した（第 5 表）。いずれも遺物の出土が貧弱で時期を確定できるものは少ないが、基本的に所在する検出面の時期に伴うものと考えたい。B 東小区Ⅱ検の P8・9・12（第 7 図）は列状の配置と共通する埋土からピット列（柱穴列）として捉えている。

4　溝

溝 4・5 の 2 条がある。溝 1・2 は A 区Ⅰ検とその上層にあり近世以降なので扱わない。溝 3 は欠番である。

溝 4（第 4 図）は A 区に位置し FL 層に北半を破壊される。幅 0.2m、深さ 7 ～ 10㎝、確認できた長さは

2.6m。わずかに出土した土器片での時期判別は不能だが、Ⅲ検にあるため弥生時代中期のものと考える。

溝５（第７図）はＢ東小区で確認された。最大幅 1.0m、深さ 30㎝を測る円弧状の溝で、断面形は丸底と平底の部分がある。一部を深掘りで破壊してしまい調査区壁面のみでの確認もあるが、想定できる範囲は東西 5.7m、南北 1.9m、円弧の直径を推定すると 6m ほどであろう。内部や周辺から古墳時代中期の土器がまとまった形で多数出土し（第 11・12 図 43 ～ 58）、本址の時期もそこに求められよう。円弧状の平面形から古墳周溝の可能性も考えたが、推定直径が小さく深さも貧弱、遺物の中に甕や甑が含まれることなどから、現状では溝（溝状遺構）とのみ捉えておく。

５　焼土集中（第７図）

Ｂ東小区のⅠ検（Ⅳ～Ⅴ層中）で検出された。303 住の東壁外 0.4m に位置する。86 × 32cmの東西に長い範囲に焼土が広がっていた。焼土の厚さは中央の最深部で 4cmほどである。明らかな被熱層はなかった。単独の火所、あるいは削平された住居の炉・カマド痕跡であろう。本址に直接伴う遺物はないが、周囲の検出面から多数の土器がかなりまとまった状態で出土し、12 点を図示できた（第 16 図 245 ～ 256）。これらは８期前後の様相で、本址の時期もその範囲に収まると考える。

遺構名	地区	検出面	平面形	主軸方向	規　模	炉形態・位置	時　期	備　考
301壁	Ｂ西	Ⅰ	（方形）	N-6-E	〈160〉×230×96	不明	中世	○
302住	Ｂ西	Ⅲ	楕円形	N-74-W	〈256〉×〈440〉×32	不明	弥生中期後半	P14・15に切られる
303住	Ｂ東	Ⅰ	（方形）	N-3-E	〈416〉×〈432〉×35	カマド、北壁中央	11～12期	
304住	Ｂ東	Ⅰ	（方形）	N-1-W	〈140〉×〈120〉×〈8〉	不明	7～9期	P2に切られる
305住	Ｃ	Ⅱ	（方形）	N-93-E	〈148〉×322×35	不明	古墳中期(土師期)	P21・22に切られる
306住	Ｂ東	Ⅲ	（楕円形）	N-39-W	〈240〉×〈480〉×36	不明	弥生中期後半	○
307住								欠番
308住	Ｂ東	Ⅱ	（隅丸方形）	N-88-W	〈272〉×〈344〉×19	礫石地床炉、中央南寄り	古墳前期	309住に切られる
309住	Ｂ東	Ⅱ	（方形）	N-3-W	〈168〉×〈360〉×45	不明	古墳中期	

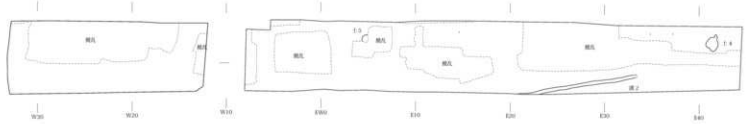
第４表　竪穴建物一覧

遺構名	掲載図	地区	検出面	平面形	規　模	遺物量	時　期	備　考
±1	—	—	—	—	—	—	—	欠番
±2	5	Ｂ西	Ⅰ	楕円形	〈80〉×120×30	±144g	平安	南側一部は区域外
±3	5	Ｂ西	Ⅰ	（楕円形）	112×〈88〉×50	±13,665g、石3点	平安	東側区域外、実測土器1相～233・石器2・8
±4	4	Ａ	Ⅰ	不整円形	152×132×88	±608g		
±5	4	Ａ	Ⅰ	（隅丸方形）	〈50〉×〈88〉×30	±400g	平安	欠番
±6	4	Ａ	Ⅲ	円形	152×144×30	±421g	弥生中期	欠番
±7	—	—	—	—	—	—	—	欠番
±8	—	—	—	—	—	—	—	欠番
±9	7	Ｂ東	Ⅱ	（方形）	84×〈64〉×33	±51g、石1点	古墳中期	西側は区域外、実測石器12
±10	7	Ｂ東	Ⅰ	（隅丸方形）	〈72〉×100×9	なし	平安	北側は区域外
±11～35	—	Ａ	Ⅰ	隅丸方形	長80～180、幅20～40	±11,051g、石1点	近世以降	遺物はすべて混入品、±22実測石器13
P1	—	—	—	—	—	—	—	欠番
P2	7	Ｂ東	Ⅰ	円形	55×48×15	±80g	（平安）	304住を切る
P3	4	Ａ	Ⅲ	円形	30×30×28	±86g	（弥生中期）	拡張472・473
P4	4	Ａ	Ⅲ	不整円形	〈20〉×36×30	なし	（弥生中期）	±6を切る
P5	7	Ｂ東	Ⅰ	円形	71×74×36	±333g	（平安）	実測土器238・239
P6	7	Ｂ東	Ⅰ	円形	58×58×16	±336g	（平安）	実測土器241～244
P7	7	Ｂ東	Ⅰ	円形	22×20×8	なし	（平安）	
P8	7	Ｂ東	Ⅱ	円形	29×34×36	なし	（古墳）	
P9	7	Ｂ東	Ⅱ	円形	39×37×25	±62g	（古墳）	308住に切られる
P10	5	Ｂ西	Ⅰ	不整円形	23×25×16	なし	（平安）	
P11	5	Ｂ西	Ⅰ	（円形）	〈12〉×27×14	なし	（平安）	
P12	7	Ｂ東	Ⅱ	円形	22×20×3	なし	（古墳）	308住に切られる
P13	9	Ｂ東	Ⅲ	円形	28×26×23	±64g	（弥生中期）	
P14	5	Ｂ西	Ⅲ	（楕円形）	22×〈21〉×10	±51g	平安	302住を切る、Ⅰ検撹り残し、実測土器240
P15	5・6	Ｂ西	Ⅲ	（円形）	〈25〉×〈38〉×25	±5g	（弥生中期）	302住を切る
P16	5・6	Ｂ西	Ⅲ	（円形）	〈17〉×21×38	なし	（弥生中期）	
P17	9	Ｂ東	Ⅲ	円形	30×26×13	なし	（弥生中期）	
P18	9	Ｂ東	Ⅲ	円形	31×32×15	なし	（弥生中期）	
P19	9	Ｂ東	Ⅲ	（円形）	〈23〉×28×9	なし	（弥生中期）	
P20	9	Ｂ東	Ⅲ	円形	34×36×14	±17g	（弥生中期）	
P21	5	Ｃ	Ⅱ	円形	30×26×13	なし	（平安）	305住を切る
P22	5	Ｃ	Ⅱ	円形	24×22×12	±10g	（平安）	305住を切る

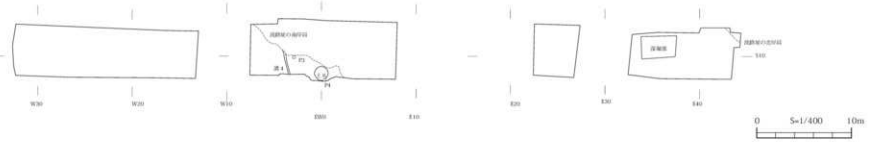
（）は推定・推定値、〈〉は残存値、規模は南北長×東西長×深さ(cm)

第５表　土坑・ピット一覧

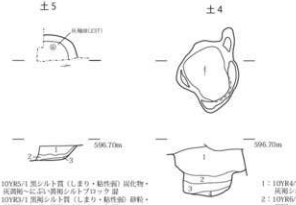
A区Ⅰ検　全体図



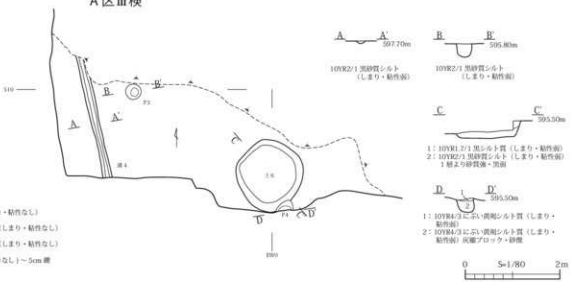
A区Ⅲ検　全体図



A区Ⅰ検

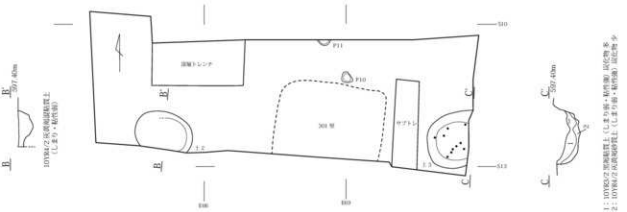


A区Ⅲ検

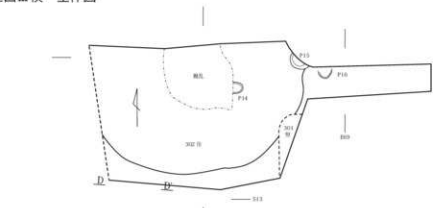


第4図　A区全体図・遺構図

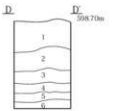
B区西Ⅰ検　全体図



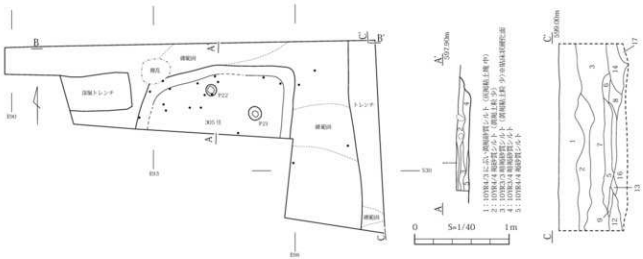
B区西Ⅲ検　全体図

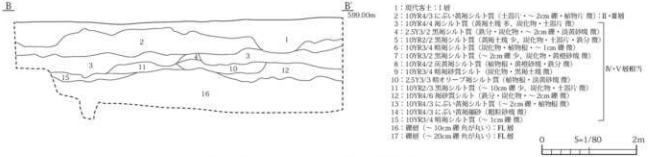


B区西柱状図



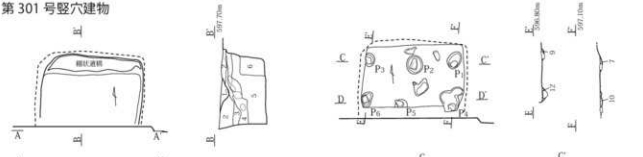
C区全体図





第５図　Ｂ区西Ⅰ・Ⅲ検、Ｃ区全体図

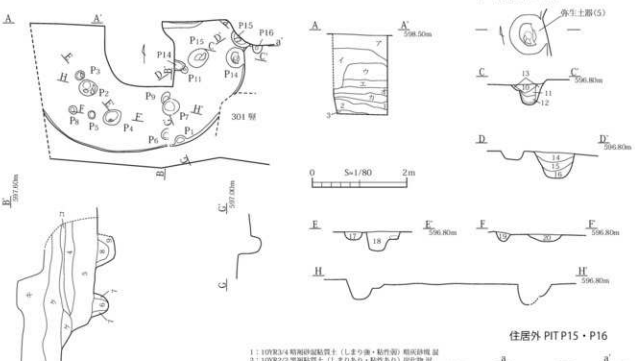
第 301 号竪穴建物



1：10YR5/6 黒褐砂質土（しまり強・粘性強）褐地土塊 混
2：10YR3/3 暗褐土（しまり強・粘性強）固化物 混
3：10YR3/4 暗褐土（しまり・粘性あり）固化物 多、褐砂質土ブロック 混
4：10YR2/3 黒褐固化物混入粘（しまり弱・粘性強）固化物・黒褐砂ブロック 少
5：10YR3/4 暗褐粘質土（しまり弱・粘性強）円礫 少、黒褐砂ブロック 混
6：線状遺構埋土（しまり・粘性あり）褐砂質ブロック・明黄褐砂質土ブロックが交互に混入
7：10YR4/1 褐灰砂混粘質土（しまり弱・粘性強）黄褐砂ブロック 混
8：10YR5/3 にぶい黄褐砂混粘質土（しまり強・粘性強）黄褐砂ブロック 混
9：10YR4/1 褐灰砂質土（しまりあり・粘性強）
10：10YR5/2 灰黄褐砂混粘質土（しまり弱・粘性強）
11：10YR3/2 黒褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）
12：10YR3/2 黒褐砂混粘質土（しまり強・粘性あり）

0　S=1/80　2m

第 302 号竪穴建物

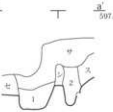


ア：表土・盛土
イ：撹乱
ウ：10YR4/5 褐砂質（しまり強・粘性弱）～1cm 礫 混
エ：10YR3/3 暗褐砂混シルト質（しまり強・粘性弱）固化物・褐砂質土塊 混
オ：10YR4/3 にぶい黄褐粘土混シルト質（しまり強・粘性弱）褐灰粘土粒 混
カ：10YR5/2 灰黄褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）灰黄褐砂混粘質土塊 混
キ：10YR3/4 暗褐砂質土（しまり強・粘性弱）黄褐砂質土塊 少
ク：10YR4/2 灰黄褐粘土混シルト質（しまり強・粘性弱）褐灰粘土粒 混
ケ：10YR4/2 灰黄褐粘土混シルト質（しまり強・粘性弱）2 層より灰色が強い
コ：10YR4/2 灰黄褐粘土混シルト質（しまり強・粘性弱）固化物 多
サ：5YR5/3 にぶい黄褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）
シ：10YR4/2 灰黄褐砂混粘質土（しまり・粘性あり）
ス：10YR2/2 黒褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）固化物粒 混
セ：10YR3/1 黒褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）

基本層序対応 アイ：1 層、ウ・エ：2 層、オ～ト：3a 層、カ・クケ・ケ・コ・サ・ス：5B・5D 層、シ：5B層

1：10YR3/4 暗褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）暗灰砂塊 混
2：10YR2/2 黒褐粘質土（しまりあり・粘性あり）固化物 混
3：10YR2/2 黒褐粘質土（しまりあり・粘性あり）固化物・黄褐砂塊 混
4：10YR4/4 褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）黄褐～灰褐塊 混
5：10YR3/2 黒褐粘質土（しまり強・粘性弱）固化物 混
6：10YR3/2 黒褐砂混粘質土（しまり弱・粘性あり）固化物 少
7：10YR5/6 黄褐砂質土（しまり強・粘性弱）
8：10YR3/4 暗褐砂混粘質土（しまり弱・粘性あり）固化物 少
9：10YR4/1 褐灰砂質土（しまりあり・粘性弱）粗砂 混
10：10YR4/1 褐灰砂質土～10YR3/2 黒褐砂質土（しまりあり・粘性弱）
11：10YR6/6 明黄褐砂質土（しまり・粘性弱）
12：2.5YR4/6 にぶい赤砂粒（しまり強・粘性弱）黄分無粒砂 混
13：10YR6/2 灰黄褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）
14：10YR4/1 褐灰砂混シルト質（しまりあり・粘性弱）
15：10YR4/4 褐砂質土（しまり強・粘性弱）
16：10YR3/2 黒褐砂質土（しまり強・粘性弱）
17：10YR5/4 褐灰砂混粘質土（しまりあり・粘性弱）少礫・固化物粒 少
18：10YR3/2 黒褐砂混粘質土（しまりあり・粘性弱）固化物粒 少
19：10YR4/1 褐灰砂混シルト質（しまり・粘性弱）固化物粒・砂 少
20：10YR2/3 黒褐（しまり強・粘性弱）固化物粒 少

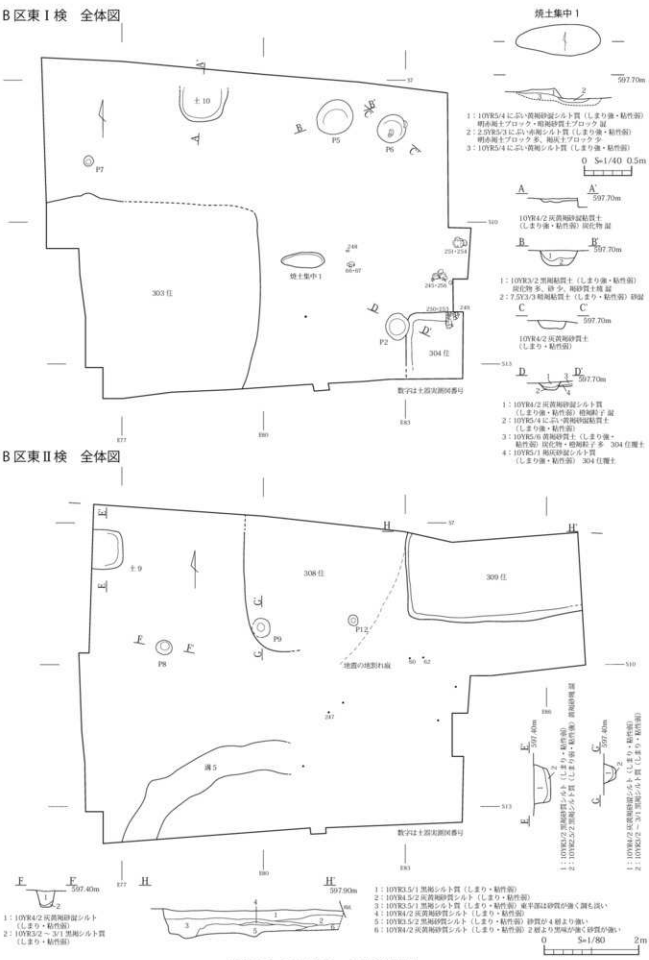
住居外 PIT P15・P16



1：10YR2/2 黒褐砂質土（しまり強・粘性あり）
2：10YR4/3 にぶい黄褐砂混粘質土（しまり強・粘性弱）

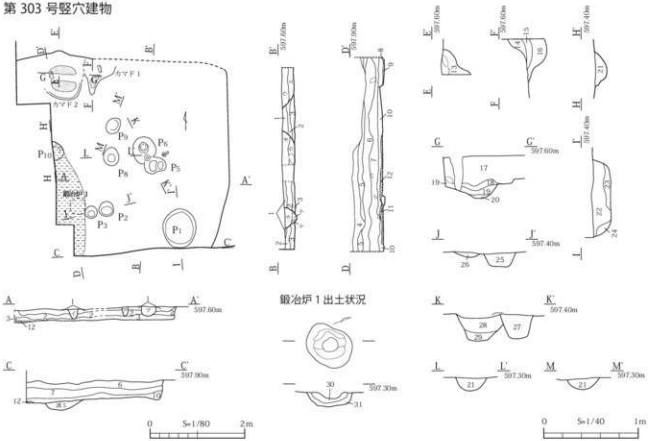
0　S=1/40　1m

第 6 図　B区西遺構図



第７図　B区東Ⅰ・Ⅱ検全体図

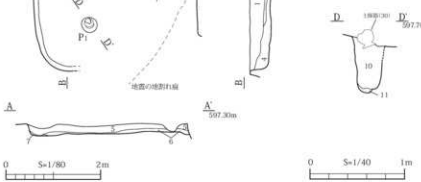
第 303 号竪穴建物



1：10YR4/1 褐灰砂質シルト（しまり強・粘性弱）炭化物少
2：10YR3/2 黒褐シルト質（しまり強・粘性弱）炭化物多
3：10YR4/2 褐砂質土（しまり強・粘性弱）に示い黄褐・灰黄褐砂質土ブロック混
4：10YR5/6 黄褐砂質シルト質（しまり強・粘性弱）少量少
5：10YR5/6 黄褐砂質シルト質（しまり強・粘性弱）少量混
6：10YR4/4 褐砂質粘質土（しまり弱・粘性強）
7：10YR3/2 黒褐粘質土（しまり強・粘性弱）
8：10YR4/5 にぶい黄褐粘質土（しまり・粘性強）黄褐土・焼土ブロック・焼土粒 混
9：5YR5/6 明赤褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）焼土塊粒状
10：10YR4/6 褐砂質土（しまり強・粘性弱）に示い黄褐砂質土ブロック 混
11：10YR3/3 暗褐砂質土（しまり強・粘性弱）炭黄褐土粒 混
12：10YR5/6 黄褐砂質土と10YR5/1 褐灰砂質土の互層（しまり強・粘性弱）貼り床
13：10YR3/1 黒褐砂質土（しまり強・粘性弱）炭化物 混カマド F 2 埋戻部
14：10YR4/3 にぶい黄褐粘質土（しまり強・粘性あり）炭化物・焼土粒 混
15：10YR4/3 にぶい黄褐粘質土（しまり強・粘性強）炭化物・焼土ブロック多
16：10YR3/3 暗褐粘質土（しまり・粘性強）炭化物・焼土ブロック 混
17：10YR4/5 にぶい黄褐砂質土（しまり・粘性強）黄褐土・焼土ブロック・焼土粒 混
18：5YR5/8 明赤褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）焼土塊粒状
19：10YR3/3 暗褐粘質土（しまり強・粘性弱）2 層の焼土 混
20：10YR3/2 黒褐粘質土（しまり強・粘性弱）
21：10YR2/3 黒褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）に示い黄褐砂質土ブロック 混
22：10YR4/1 褐灰砂質土（しまり強・粘性弱）炭化物・オリーブ褐土ブロック 混
23：2.5Y4/2 暗灰黄褐粘質土（しまり強・粘性弱）オリーブ褐土ブロック多
24：2.5Y5/3 黄褐粘質土（しまり強・粘性弱）
25：10YR4/1 褐灰砂質粘質土（しまり・粘性弱）炭化物・明黄褐砂質ブロック 混
26：10YR4/2 灰黄褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）炭化物・明黄褐質土ブロック 混
27：10YR3/2 黒褐粘質土（しまり強・粘性弱）
28：10YR3/3 暗褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）黄褐粘質土ブロック 混
29：10YR2/2 黒褐砂質土（しまり強・粘性弱）炭粒 混
30：10YR3/2 黒褐砂質土（しまり強・粘性弱）炭化物多
31：10YR4/1 褐灰砂質土（しまり強・粘性弱）鍛冶炉埋設の地山か

303 住外遺構
ア：10YR5/2 灰黄褐砂質土（しまり強・粘性弱）黄褐砂質ブロック 混
イ：10YR4/1 褐灰砂質土（しまり強・粘性弱）
ウ：10YR4/2 灰黄褐砂質土（しまり強・粘性弱）炭化物 多
エ：10YR3/4 暗褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）
オ：10YR4/3 にぶい黄褐砂質土（しまり強・粘性弱）明赤褐土ブロック・炭化物 少
カ：10YR3/2 黒褐砂質土（しまり強・粘性弱）炭粒 混
キ：10YR3/2 黒褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）炭化物 混
ク：10YR4/3 にぶい黄褐粘質土（しまり強・粘性強）褐土ブロック・炭化物 混
ケ：10YR4/4 褐シルト質（しまり強・粘性弱）

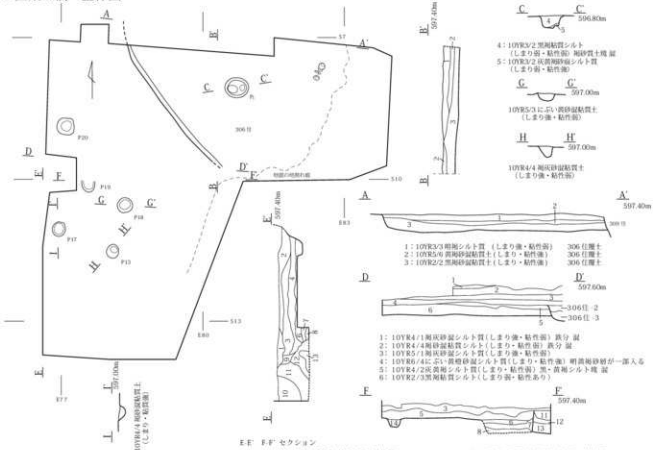
第 308 号竪穴建物



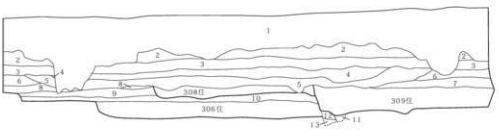
1：10YR4/1 褐灰砂質土（しまり・粘性弱）
2：10YR5/3 にぶい黄褐砂質粘質土（しまり強・粘性弱）
3：10YR3/2 黒褐粘質土（しまり・粘性弱）
4：10YR4/3 にぶい黄褐砂質土（しまり強・粘性弱）
5：10YR5/2 灰褐砂質土（しまり強・粘性強）黄ブロック少
6：10YR3/2 黒褐粘質シルト（しまり・粘性強）炭化物 混
7：10YR6/4 にぶい黄褐砂質シルト質（しまり・粘性強）
8：10YR3/2 黒褐シルト質（しまりなし・粘性弱）明赤褐・焼土ブロック 混
9：10YR4/2 灰黄褐シルト質（しまり・粘性弱）
10：10YR3.5/2 黒褐砂質シルト（しまり・粘性弱）
11：10YR3/2 黒褐シルト質（しまり・粘性弱）

第 8 図　B 区東Ⅰ・Ⅱ検遺構図

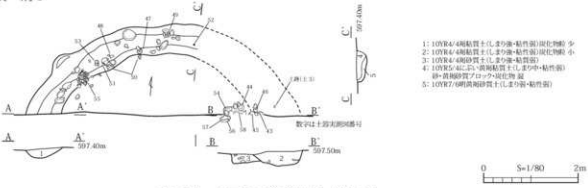
B区東Ⅲ検　全体図



B区東北壁セクション図（トンボⅡ検全体図：第7図下段）



B区東Ⅱ検　溝5



第９図　Ｂ区東Ⅲ検全体図・遺構図

第３節　出土遺物

１　土器・陶磁器

(1) 概要と提示の方針

遺構内と包含層、検出面から多量に出土した。重量で示すとＡ区は遺構内から 13.34kg、包含層・検出面など遺構以外からが 126.99kg、Ｂ区が遺構内 59.48kg、遺構外 40.79kg、Ｃ区が遺構内 2.15kg、遺構外 2.27kg、今回調査の総量は 245.02kgに及ぶ。主に弥生土器と古墳時代の土師器・須恵器、古代(主に平安時代)の土器・陶磁器で構成され、わずかに中世のものが伴う。概ねⅠ検から古代、Ⅱ検から古墳時代、Ⅲ検から弥生時代に属するものが出土した。

遺構出土品は可能な限り実測図を掲載し、遺構外出土であっても緑釉陶器や墨書土器などの希少品、出土地点・層位の時期や特徴の解明に役立つものは図示に努めた。作成技法、付着物で特記の必要がある場合には、図中に糸（回転糸切り）、朱（朱墨付着）等の文字を付した。掲載した実測図は総数 426 点、拓影 76 点で、時期別は実測図が弥生時代 24 点、古墳時代 65 点、古代 336 点、中世１点、拓影はすべて弥生時代である。

(2) 時期別の土器・陶磁器概観

ア　弥生時代の土器（第 10 図１～24、第 20・21 図 427 ～ 502）

該期の遺構である 302･306 住、土６とⅢ検を中心に出土した。主な器種に壺形土器(以下「形土器」は略す)、甕、台付甕、高杯、鉢、甑がある。壺、甕には紋様のあるものが多く、高杯、鉢の内外器面には赤彩が行われている。紋様は太い沈線（箆描紋）による横線・区画・囲み・山形・鋸歯・刺突と、細い沈線を数本束ねたもの（櫛描紋）による波状・簾状・条痕・刺突、さらに箆描紋の地紋や単独で施紋される縄紋がある。壺の紋様に箆描紋が多用され、甕の胴部は櫛描紋の縦や横の羽状条痕と波状紋に限られる特徴がある。時期は紋様構成から中期後半に属するものと考える。ただし 487 の口唇に刻みがある口縁部、488・493 の条痕が全面に残る胴部は中期中葉以前に遡る可能性がある。

イ　古墳時代の土器（第 11 ～ 13 図 25 ～ 89）

土師器と少量の須恵器がある。Ｂ東小区Ⅱ検とＣ区の遺構内、その周辺の検出面、包含層からが主体で、他はⅠ検の遺構覆土や包含層に混じる小片であった。前・中・後各期のものがあり、量的には中期が多い。

前期の土器はすべて土師器で 308 住と各区の包含層から少量が出土した。器種は壺、甕、台付甕、鉢、蓋、小型器台がみられる。特記するものとして、口縁端部に広い面を持ち棒状浮文が付される加飾壺（68、Ａ区 FL 層出土）、内湾気味に開く口縁の端部が肥厚し胴部内面にはケズリが行われる甕（69、Ａ区Ⅳ層出土）、図示できなかったがＳ字甕（Ｂ東小区Ⅱ検）などがある。

中期の土器はすべて土師器で、古墳時代の土器の中核をなす。305 住（下層）、309 住、溝５とその周辺から主体的に出土した。特に溝５出土品は遺存状態が良く、器種が揃っている。器種は壺、甕、杯、高杯、小型丸底土器、甑がある。杯や高杯、甑の中には内面が均質に黒色を呈するものがあり、意図的な黒色処理が行われていると考える（38・40・42・44・49 など）。

後期の土器はＢ東小区のⅡ検で、少量がまとまって出土した。須恵器蓋杯（65）、高杯（85）、フラスコ瓶（67）、平瓶（66）である。鈴木敏則氏からフラスコ瓶と平瓶 は湖西窯産とのご教示をいただいている。

ウ　古代の土器・陶磁器（第 13 ～ 20 図 90 ～ 336・338 ～ 426）

本調査出土土器の主体をなすもので、Ⅰ検の遺構内と検出面、包含層から多量に出土した。特に 301 竪、303 住、土３からが多い。種別は土師器、須恵器、軟質須恵器、黒色土器Ａ・Ｂ、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁がある。器種・器形は食膳具に杯・椀・皿・鉢・盤・蓋、煮炊き具に甕・小型甕・羽釜・足釜・甑、貯蔵具に壺・瓶・甕、それ以外のものとして円筒土器（筒形土器）があり、さらに杯、皿、盤、甕などは細分できる（器種・器形の個別名称は文献４の器種名に従う）。希少な器種としては黒色土器Ｂの耳皿（162）、灰

釉陶器の耳皿（358）・三足盤（319）・高台に透かしのある鉢（262）・四足壺（164）・手付瓶がある。

エ 中世の土器・陶磁器

中世に属するものとして青磁、青白磁、土師質土器皿がA区Ⅲ・Ⅳ層から出土している。いずれも小片だが土師質土器皿は図示できた（第18図337）。手捏ね成形で胎土が精選されており13世紀に位置付けられると考える。青磁は碗片、青白磁は合子片であろう。

(3) 緑釉陶器、白磁

緑釉陶器は39点、重量で455.0gが出土した。このうち遺構に伴うのは13点で他は検出面・包含層からの出土である。全点を一覧表（第6表）とカラー写真（写真図版12）で掲載し、6点（221・222・226・227・236・359）を実測図で提示した。B西小区の土3とその周辺からの出土が多い。ここからの出土品には被熱により表面の釉薬が溶融、発泡したような傷んだ状態のものが多い。また222には破損部に沿って粘土の盛り上がりのようなものが続いている。何らかの補修痕であろうか。

白磁は小破片2点がA区の包含層から出土しておりカラー写真（写真図版12）で掲載した。うち1点を実測図で示している（261）。口縁が小さな玉縁状になっておりⅡ類の椀であろう。

(4) 墨書・線刻土器

明らかに墨書があると認められた土器は5点で、墨書の内訳は、黒色土器椀（207）の底面、須恵器杯A（91）の底面、灰釉陶器椀（153）の底面、黒色土器杯（247）の体部外面、土師器盤B（385）の体部外面である。墨書の判読ができたものはない。第18図344の土師器椀の内面には、焼成後に先の鋭い工具で刻まれた線刻がある。直角に交差する平行な線を不揃いで3本ずつ描いている。

(5) 転用硯・朱墨付着品

墨痕が明瞭にわかるものはないが、灰釉陶器の椀・皿の中に見込み部が研磨されているものが5点ほどあり、転用硯だった可能性がある。灰釉陶器の259の高台内側の底面、260の見込み部には朱墨が付着している。

(6) 特記すべき土器群

ア 溝5出土土器（第11・12図43～58・59～63）

土師器の杯（43～46）、高杯（47～51）、小型丸底土器（52・53）、壺（54）、甕（55・56）、甑（57・58）がまとまって出土した。これらは遺存状態が良い上に器種が揃っている点から意図的で集中した廃棄や据え置きなどがなされたものと推定したい。帰属時期は、杯類の形態が体部は丸く、口縁端部がそのまま収まるかわずかな屈曲を持ち、高杯は杯部有稜のもので、さらに小型丸底土器が少数伴うことなどから古墳時代中期、5世紀中頃に位置付けられると考える。溝5に隣接する検出面や包含層からも同時期のものが類似する良好な状態で出土しており（59～63）、これらも合わせて捉えるべきであろう。

イ 303住出土土器（第13～15図90～183、遺構外接合品も含む）

土師器杯A（98～114・169～171）・椀（118～126・173～176）・盤B（139～144・178・179）・皿（137・138・177）、黒色土器A杯（115～117・172）・椀（127～133）・皿（136）、黒色土器B椀（134・135）・耳皿（162）、灰釉陶器椀（145～154）・皿（155～161・180）、須恵器と軟質須恵器の杯A（91～97）、煮炊き具の土師器甕（168）・小型甕（167）・羽釜（183）など多様な器種が出土した。このうち須恵器・軟質須恵器の杯類、土師器の甕類は量的に少数で破片資料に限られる。土師器皿は柱状の高台を持つものが3点あり珍しい（137・138・177）。灰釉陶器の椀・皿は半数以上に回転糸切痕が残る。土師器杯の口径をみると10～11cm台（平均10.8cm）と12cm以上の2群にわかれる。これらの状況からみて本址土器群は須恵器・軟質須恵器の杯類、口径12cm以上の土師器杯、土師器の甕類からなる7～8期のものと、その他の口径10～11cm台の土師器杯に代表される11～12期のものに二分されると

考える。本址の廃絶時期を示すのは量的にも優勢な後者であり、前者は東側に隣接する焼土集中とその周辺の検出面出土品と時期的に類似しており、その一部が本址埋没時に入り込んだものと理解したい。

ウ 301竪出土土器（第18・21図）

微量の弥生土器を伴って古代の土器が多量に出土したが、ほとんどが上層出土品である（弥生土器22・23・496・497、古代345～359）。遺構の項でも触れたとおり、本址は床面付近から出土した銭貨（元祐通宝）や特徴的な構造から中世の遺構と考えられるため、土器群は本址の時期を示すものではなく、埋没する段階で周囲の包含層中（主にⅣ層）から流入したものと考える。むしろ本遺跡に形成されている古代の遺物包含層の様相を端的に示すものといえよう。

エ 土3出土土器（第15・16図189～236、遺構外接合品も含む）

13kgを超える量が出土し48点を図示した。器種は土師器杯（191～199・234）・椀（202～204）、黒色土器A杯（200・201）・椀（205～210）、灰釉陶器椀（211～220・235）・段皿（223～225）が主体となっている。緑釉陶器も7点（215g）あり5点を図化（221・222・226・227・236）した。土師器杯の口径が10cm台後半から11cm台に収まり（平均11.2cm）、灰釉陶器に身の深い椀や段皿が伴っているので編年的には10～11期くらいに位置付くと考える。緑釉陶器の大半は被熱により表面の釉薬が融けて発泡、剥離したような状態であった。

オ 焼土集中とその周辺出土土器（第16図245～253・254～256）

焼土集中（B東小区Ⅰ検）から直接出土した土器はないが、その東側一帯の検出面から単なる包含層混入品とは思えない良好な遺存状態を示す古代の土器が点々と出土し、調査時に№を付して取り上げた。12点を図示できている（245～256）。内訳は黒色土器A杯（247・248）、土師器杯（245・246）・椀（249・250）、盤A（252）、甕B（253）、小型甕状の鉢（251）などである。編年上の位置は、個々の器種でみると土師器杯Aは口径が13cm以上あるので8期、甕Bも形態の特徴から8期で、他の器種もその時期に伴って問題ないものなので、総体として8期前後にまとまると把握できる。したがって本土器群は一体的に残された可能性があり、焼土集中とその東側一帯に何らかの遺構や廃棄行為が存在したのかもしれない。

カ A区検出面・包含層出土土器（第17・18図257～337）

A区の古代に属する遺構は2基の土坑だけだが、遺物包含層のⅡ～Ⅴ層（主にⅣ層）やその検出面からは古代の土器陶磁器が多量（113.6kg）に出土した。これらに一括性や同時性などの意味を認めるのは困難だが、本遺跡における遺物包含層の形成時期や性格を解明する一助になると考え、残存度の良いものや希少な器種、特徴的な個体を選別して図化した。種別・器種の内訳は土師器杯・椀・皿・盤B・甕B・小型甕・羽釜、黒色土器A杯・椀・鉢、黒色土器B椀、軟質須恵器杯、須恵器杯A・杯B・蓋、灰釉陶器椀・皿・段皿・長頸壺、土師質土器皿など多岐にわたる。灰釉陶器の三足盤、土師器足釜、白磁椀などの希少品もみられた。時期は古い順にみると須恵器杯B・蓋Bが6～7期、土師器甕Bと軟質須恵器杯が7～8期、土師器の杯・椀や灰釉陶器椀・皿は8期以降、土師器羽釜が11期以降、黒色土器B椀が12期以降、土師器皿が14期、土師質土器皿が13世紀などとなり、これも多様である。厳密な比較はできないが、量的には須恵器杯・蓋類が少なく土師器の杯・椀、灰釉陶器の椀・皿が多い点は本格的な形成が8期以降を示唆するものであり、14期の遺物がその終期を示すと考える。土師質土器の皿（337）は中世に属する301竪などと関連して残されたものであろう。

キ B区検出面・包含層出土土器（第18～20図338～344・360～418）

遺物包含層のⅣ・Ⅴ層（主にⅣ層）からも古代の土器陶磁器が多量（32.2kg）に出土している。出土状態が特異で調査時に№を付して取り上げることができたものは「オ 焼土集中とその周辺出土土器」で分離したが、その他の土器66点を図示した。A区と同様で一括性、同時性などの意味は少ないが、本遺跡の遺

物包含層形成を解明する一助になると考える。土師器杯・椀・皿・盤B・甕B・小型甕・甑、黒色土器A杯・椀・皿、軟質須恵器杯、須恵器杯A・蓋、灰釉陶器椀・段皿がある。時期的には土師器杯Aの口径が10～13cm台とバラツキがあり、他の器種構成も加味すると6期から13期までの幅がある。この中で8期前後のものは「焼土集中とその周辺」からの出土品と時期的には近似するが、出土状態での区別ができないのでこちらに一括しておく。

2　土製品・瓦（第22図）

土製円盤、ミニチュア土器、土錘、硯が出土している。土製円盤（土1）は弥生時代中期の306住から出土したもので、厚さ0.6cmの甕片を打ち欠きと研磨で3.1×3.0cmの不整円形に加工している。ミニチュア土器（土2）は古墳時代中期の309住からの出土で、手捏ね成形により口径4.2cm、器高2.1cm、厚さ0.7～1.0cmの平底気味の浅い杯形に作っている。土錘（土3）は溝5から完形で出土したもので、長さ4.0cm、幅2.3cmのやや中央部が括れた不整な円筒形を呈し、縦方向に直径は0.5cmの孔が貫通する。溝5からの他の出土品と同じ古墳時代中期のものであろう。土4はB区西小区のⅣ層から出土したもので、平坦な板状で全面にミガキと黒色処理がなされている。端部はそのまま直に切り落とし、そこに交差する縁には直に立ち上がる小さな高まりが作られている。また裏面には大きな突起が付されている。これらの形状から土製の風字硯の一部であると推定した。

瓦は中小破片が12点（861.9g）出土し、8点の拓影を提示できた。いずれも平瓦の端部や体部で、すべての凹面に布目、凸面には平行か縄目のタタキ痕が残る。詳細は第9表に譲る。

No.	実測No.	地区	地点	器種	残存状況	重量(g)	胎土	釉調・色調	その他・備考	注記
1		A	土15	椀	体部小片	1.8	暗灰硬	淡緑		013
2		A	Ⅱ層	椀	口縁1.8cm	2.5	赤灰硬	濃緑		057
3		A	Ⅱ層	椀椀	体部小片	2.1	暗灰硬	淡緑～草色		067
4		A	Ⅱ層	椀	体部小片	1.7	灰白やや軟	濃緑むら有		081
5		A	Ⅱ層	椀・皿	口縁1.9cm	2.4	白粒やや硬	淡緑		083
6		A	Ⅲ層	椀・皿	底部1/9	17.7	灰白軟	淡緑貫入		089
7		A	Ⅲ層	椀・皿	体部小片	1.7	灰白軟	草色		100
8		A	Ⅲ層	椀	口縁2.3cm	2.0	暗灰硬	草色		106
9		A	Ⅳ層	甑類？	胴部小片	3.9	灰白軟	草色。内面無釉		115
10		A	Ⅳ層	椀・皿	体部小片	1.1	灰白軟	草色。釉剥落		120
11		A	Ⅳ層	段皿	体部1/10	5.8	灰白軟	濃緑むら有		131
12		A	Ⅳ層	椀	体部小片	3.1	暗青灰硬	沼濃緑		131
13		A	Ⅳ層	輪花椀	口縁2.6cm	6.1	暗灰硬	淡緑		136
14		A	Ⅳ層	椀椀	体部小片	2.5	灰白軟	草色		141
15		A	Ⅳ層	椀・皿？	体部小片	2.1	灰白軟	釉剥落、色不明		145
16		A	Ⅳ層	椀	口縁2.3cm	4.5	灰白やや軟	草色		154
17		A	Ⅳ層	椀・皿	体部小片	1.7	灰白軟	釉剥落、色不明		158
18		A	Ⅳ層	椀	口縁2.0cm	2.4	白粒やや硬	淡緑		182
19		A	Ⅰ層	段皿	底部1/7	16.0	暗青灰硬	沼濃緑	高台欠損	226
20		B西	301竪	皿	口縁1/6	6.4	青灰硬	（沼緑～黄褐）	被熱で釉が溶け変色、歪み大	248
21	第16図159	B西	301竪	椀	底部1/3	33.1	暗灰硬	（沼緑～赤褐）	被熱で釉が溶け変色	248
22		B西	301竪	皿	口縁1/8	6.1	灰白やや硬	濃緑むら有	被熱で釉が一部変色	251
23	第16図222	B西	土3	椀	底部完	172.3	暗青灰硬	濃緑	底部高台内調整。※注	334
24	第16図226	B西	土3	段皿	口縁1/8	10.2	薄青灰硬	濃緑		335
25		B西	土3	椀	口縁2.8cm	3.0	青灰硬	濃緑	057と同一個体か？	348
26		B西	土3	椀	口縁2.2cm	3.4	灰白やや硬	（黒緑）	被熱で釉が溶け変色	348
27	第16図227	B西	土3	皿	口縁1/6	9.5	暗灰白硬	（沼濃緑）	被熱で釉が溶け変色	351
28	第16図221	B西	土3	椀	口縁2/5	16.7	暗青灰硬	濃緑	2片接合、350は被熱で釉が溶け変色	350・351
29	第16図236	B西	土3・301竪	皿	底部3/4	59.6	灰白やや硬	（黒緑）	2片接合、被熱で釉が溶け変色	246・349
30		B東	303住Pit	椀皿	口縁2.9cm	1.9	青灰硬	沼濃緑		276
31		B東	303住	椀	口縁1.0cm	1.0	灰白やや硬	緑		287
32		B東	303住	甑類？	胴部小片	8.0	暗灰白硬	淡緑	内面にも僅かに釉	287
33		B東	Ⅳ層	椀・皿	体部小片	1.6	青灰硬	濃緑		425
34		B東	Ⅳ層	椀	口縁1/12	16.1	薄青灰硬	沼濃緑		428
35		B東	Ⅳ層	椀	口縁1.8cm	10.9	青灰硬	濃緑		430
36		B東	Ⅳ層	椀・皿	体部小片	1.0	暗青灰硬	濃緑		440
37		B東	Ⅴ層	皿	口縁1.1cm	2.1	灰白硬	緑		446
38		B東	Ⅰ層	椀	口縁2.2cm	2.1	薄青灰硬	濃緑むら有		464
39		B東	Ⅰ層	椀・皿	底部小片	8.9	青灰硬	濃緑	底部高台内釉薄い（調整？）	464

※注：割れ目に沿った粘土と釉の付着あり

第6表　緑釉陶器一覧

No.	地区	地点	種別	器種器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁	底部	成形・調整・紋様など	時期	その他・備考	注記
1	隠N	302住	弥	壺				欠	欠	箆横沈線,縄	弥生中期	頸部4/4残	264
2	隠N	302住	弥	壺		9.6		欠	1/2	ミガキ,工具ナデ	弥生中期		254
3	隠N	302住	弥	甕		8.9		欠	1/6	ハケメ,工具ナデ	弥生中期		262
4	隠N	302住	弥	甕	12.4			1/6	欠	口縁部,頸櫛刺,櫛櫛縦羽,内面ハミ	弥生中期		264
5	隠N	302住	弥	甕	33.6	12.0	31.75	1/24	完	口縁部,口縁櫛波,頸櫛縦羽,内面ハミ	弥生中期		258・258・259・263
6	隠N	302住	弥	高杯				1/18	欠	ミ,内面赤彩	弥生中期	破片実測	263
7	隠N	302住	弥	甕		6.6		欠	1/3	外面工具ナデ,内面ミ,1孔	弥生中期	彼成前穿孔	262
8	隠N	306住	弥	壺	14.8			1/10	欠	口縁部,頸櫛縦羽,内面ハ・ミ	弥生中期		310
9	隠N	306住	弥	台付甕		8.6		欠	1/8	脚内面ミ,外面ミ摩滅	弥生中期		310
10	隠N	306住	弥	壺	14.6			1/8	欠	外面櫛刺・斜条縦,内面縦のミ	弥生中期		310
11	隠N	306住	弥	壺		5.8		欠	9/10	外面櫛斜条縦,内面縦のミ	弥生中期		310
12	隠N	306住	弥	鉢	13.8	6.0	10.0	1/2	完	内外面ミ・赤彩,2孔	弥生中期		304～306
13	隠N	306住	弥	鉢		6.8			1/4	内外面ミ,内面赤彩	弥生中期		315
14	隠N	306住	弥	甕		6.2		欠	1/4	内外面ミ,底面1孔	弥生中期	彼成前穿孔	308
15	A	±6	弥	壺	17.6	6.6	21.5	1/3	1/3	口縁部ケア,櫛横羽,縦ミ	弥生中期		005・173
16	A	Ⅶ側	弥	壺		9.8		欠	1/3	外面ミ,内面チデ	弥生中期		210
17	A	Ⅵ側	弥	壺		8.4		欠	1/6	内外面ミ,底面ナデ	弥生中期		205・207
18	A	Ⅳ・Ⅴ側	弥	高杯				欠	欠	杯部内外面・脚部外面ミ・赤彩	弥生中期		189
19	A	Ⅲ側	弥	高杯?		3.2		欠	完	内外面チデ摩滅,赤彩不明	弥生中期		088
20	A	Ⅵ側	弥	鉢	13.0			1/8	欠	内外面ミ・赤彩,2孔	弥生中期		207
21	隠N	Ⅳ側	弥	台付甕		5.4		欠	1/4	内外面ミ摩滅	弥生中期		438
22	隠N	301住	弥	壺		11.2		欠	完	外面ハ後ミ,内面ナデ	弥生中期	混入品	250・251
23	隠N	301住	弥	高杯				欠	欠	ミ摩滅	弥生中期	混入品	248
24	隠N	±3	弥	高杯	36.2			1/12	欠	内外面ミ,内面赤彩	弥生中期	混入品	350
25	隠N	308住	土	杯	17.6			1/8	欠	内面ミ・黒色処理	古墳中期	309住から混入?	323
26	隠N	308住	土	鉢	17.2			1/8	欠	外面工摩滅,内面工具ナデ	古墳前期		323
27	隠N	308住	土	小型壺	11.6	3.6	9.5	1/4	完	外面・口縁内面ミ,底部ミけ底	古墳前期		325・475
28	隠N	308住	土	蓋	11.4		7.3	1/2		ナデ,工具ナデ	古墳前期	頂部径4.1cm	322
29	隠N	308住(P)	土	甕	12.4			3/8	欠	ヨコナデ,工具ナデ	古墳前期		323・363・461
30	隠N	308住(P)	土	甕	15.8			完	欠	ヨコナデ,工具ナデ	古墳前期		319
31	隠N	309住	土	高杯				欠	欠	外面ミ,内面工具ナデ	古墳中期	脚上部2/3残	330
32	隠N	309住	土	高杯				欠	欠	外面ミ,内面工具ナデ	古墳中期	脚上部完	330
33	隠N	309住	土	高杯				欠	欠	外面ミ,内面工具ナデ	古墳中期	脚上部3/4	327・409
34	隠N	309住	土	壺	15.2			1/3	欠	ミ(口縁内面横,頸内横)	古墳中期		331
35	隠N	309住	土	甕	18.6			1/5	欠	ヨコナデ,ナデ,工具ナデ	古墳中期		331
36	隠N	309住	土	甕	19.0			1/8	欠	ヨコナデ,工具ナデ	古墳中期		327
37	隠N	309住	土	壺		7.0		欠	完	外面ハ,内面工具ナデ	古墳中期		332
38	隠N	309住	土	甕	11.0	4.0	7.1	1/40	完	外面ケ・ナデ,内面工具ナデ,底部1孔	古墳中期	彼成前穿孔	331
39	C	305住	土	杯	13.3	3.3	6.1	1/3	1/2	ヨコナデ,ケ,ハ,ミ	古墳中期		445・460・462・466
40	C	305住	土	杯	16.1	6.6	6.9	1/6	1/2	ヨコナデ,ナデ,工具ナデ,ケ	古墳中期		445・462・468・535
41	C	305住	土	壺				欠	欠	ミ摩滅,工具ナデ	古墳中期	頸部1/8残	※1
42	C	305住	土	甕	14.2	4.8	7.3	1/20	1/4	ヨコナデ,工具ナデ,内面縦なミ・黒色処理	古墳中期		480・510
43	隠N	南5	土	杯	13.1	—	5.1	完	完	ヨコナデ,ケズリ後ミ	古墳中期		379
44	隠N	南5	土	杯	14.8	—	4.5	完	完	ヨコナデ,ハケメ後ミ	古墳中期		375
45	隠N	南5	土	杯	15.0	—	5.0	3/4	完	外面ケズリ・ナデ,内面ナデ・まばらなミ	古墳中期		378・473
46	隠N	南5	土	杯	14.2	—	8.5	5/8	完	ヨコナデ,ケズリ後ミ	古墳中期		380
47	隠N	南5	土	高杯				欠	欠	外面ミ,内面工具ナデ	古墳中期	脚上部全周	368
48	隠N	南5	土	高杯				欠	欠	外面ミ,内面工具ナデ	古墳中期	脚上部1/3	369
49	隠N	南5・	土	高杯	18.6	12.4	12.2	2/3	完	ミ,脚内面ケズリ・工具ナデ	古墳中期		367・471
50	隠N	南5	土	高杯	17.45	13.7	15.5	1/2	完	ミ,脚内面工具ナデ	古墳中期		368・369
51	隠N	南5	土	高杯				欠	欠	外面チ(明瞭なミなし),内面工具ナデ	古墳中期	脚上部全周	369
52	隠N	南5・	土	坩	9.0	—	7.8	3/4	完	外面ハ・ケズリ・ミ,内面工具ナデ	古墳中期		381・392
53	隠N	南5	土	小型丸底	8.5	—	8.5	3/8	完	外面ナデ,内面工具ナデ・ナデ	古墳中期		370
54	隠N	南5	土	壺				欠	欠	外面ミ,内面工具ナデ・ミ	古墳中期	脚1/2	373
55	隠N	南5・	土	甕	19.4	—	27.5	1/2	完	ヨコナデ,ハ	古墳中期	内外面にススス	371・372・374・381
56	隠N	南5・	土	甕	18.6			2/3	欠	ヨコナデ,工具ナデ	古墳中期		373・374・473
57	隠N	南5・	土	甕		8.8		欠	2/3	内外面ミ,把手一対	古墳中期		375・374・430・473
58	隠N	南5	土	甕	20.5	7.4	21.6	5/6	完	ハ後工具ナデ,下端ケズリ	古墳中期	成形雑で歪み著しい	377
59	隠N	Ni0・	土	高杯		17.8		欠	1/40	ミ,脚内面工具ナデ・ナデ	古墳中期		267・392
60	隠N	Ni2	土	高杯		13.6		欠	完	外面工具ナデ・ヨコナデ	古墳中期		400
61	隠N	Ni24	土	高杯		13.6		欠	5/16	ミ,ヨコナデ	古墳中期		395
62	隠N	Ni1・	土	小型壺	7.3			3/4	欠	ケズリ後ナデ,工具ナデ	古墳中期		399・456
63	隠N	Ni23・南5・	土	壺	15.8	6.8	32.2	2/3	5/6	口縁・胴部外面ミ,胴部内面ハ	古墳中期		※2
64	隠N	Ni24	土	鉢	12.5			1/4	欠	ヨコナデ,ナデ,工具ナデ	古墳中期	内外面にススス	395
65	隠N	Ni25	頭	蓋杯		4.2		欠	完	ロクロナデ,回転ケ	古墳後期	底面にヘラ記号	396
66	隠N	Ni6	頭	平瓶	6.8			3/8	欠	ロクロナデ	古墳後期		388
67	隠N	Ni6・	頭	フラスコ瓶		—		欠	完	ロクロナデ,回転ケ,円板貼り付け	古墳後期		388・422
68	A	V側	土	壺	20.2			1/8	欠	ミ,棒状浮文4本貼り付け	古墳前期	混路(孔.堀)出土品	197
69	A	Ⅳ側	土	壺	11.6			1/10	欠	ヨコナデ,胴部内面ケ,外面摩滅	古墳前期		157
70	隠N	Ⅳ側	土	杯	13.2			1/6	欠	外面ナデ・ケ,内面ミ	古墳中期		418
71	隠N	Ⅳ側	土	小型器台				欠	欠	外面ミ,内面工具ナデ,3孔	古墳前期		418

[種別・器形]弥:弥生土器 土:土師器 須:須恵器 [寸法・器形]口径 ※1:484・487 ※2:489・502・521 ※2:268・362・364・397・398・422・459・473
[成形・調整・紋様・器形]縦:縦紋 横:横紋 櫛:櫛紋 刺:刺紋 [残存度]口縁:口縁部 底:底部 [成形・調整・紋様・器形]ケ:ケズリ ハ:ハケメ ミ:ヘラミガキ

第7表 土器一覧(1/6)

No.	地区	地点	種別	器種器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁	底部	成形・調整・紋様など	時期	その他・備考	注記
72	阪气	IV別	土	壺	15.4			1/4	欠	外面ハ・ミ,内面ミ摩滅	古墳前期		418
73	阪气	IV別	土	甕				欠	欠	外面ハ,内面ハ・工具ナデ	古墳前期		418
74	阪	II横IV別	土	杯	12.0			1/8	欠	ヨコナデ,ミ,ケズリ	古墳中期		422
75	阪	II横IV別	土	杯	13.1			1/4	欠	ヨコナデ,ミ,ケズリ	古墳中期		440
76	阪	IV別・	土	高杯		12.6		欠	3/8	外面ミ,内面ナデ・指オサエ	古墳中期		405・425
77	阪	II横V別	土	杯	12.6			1/6	欠	ハ,ミ	古墳中期		461
78	阪	I 横	土	壺	19.2			1/16	欠	ヨコナデ,ハ	古墳中期		469
79	阪	V別・	土	壺	15.8			1/4	欠	ヨコナデ,ミ摩滅	古墳中期		200・444
80	阪	V別	土	壺?	15.2			1/8	欠	ヨコナデ,ナデ,工具ナデ	古墳中期	内面にスス	456
81	阪	II横V別	土	甕		6.0		欠	11/12	ナデ,工具ナデ	古墳中期		455
82	阪	II横V別土面	土	甕	17.6			1/8	欠	ヨコナデ,工具ナデ(一部ミガ状)	古墳中期		446
83	阪	II横IV・V別	土	台付甕				欠	欠	工具ナデ,ハ	古墳前期	台上部1/3残	441
84	阪	VIII・II横V別	土	甑		2.7		欠	1/2	ナデ,工具ナデ,内面黒色処理	古墳中期	外面にスス	457・475
85	阪	II横V別	須	高杯		7.4		欠	1/8	ロク,回ケ,脚内絞り痕	古墳後期		455
86	C	I 横	土	杯	14.2			1/4	欠	ヨコナデ,ミ摩滅,内面黒色処理	古墳中期		514・517
87	阪气	302住	土	甕	15.0			1/2	欠	ヨコナデ,ハ,工具ナデ	古墳前期	302住(弥生)を切る遺構かヲ	262
88	阪气	302住	土	装飾器台				欠	欠	ミ摩滅	古墳前期	302住(弥生)を切る遺構かヲ	262
89	阪气	302住	土	小型器台				欠	欠	ミガ工具ナデ	古墳前期	302住(弥生)を切る遺構かヲ	262
90	阪	303住	須	杯B		8.4		欠	1/5	ロク,糸,ツケ高台	平安		292
91	阪	303住	須	杯A		6.6		欠	1/2	ロク,糸	平安	底面墨書	291
92	阪	303住	須	杯A		6.8		欠	1/4	ロク,糸	平安		290
93	阪	303住	軟	杯A		5.0		欠	2/3	ロク,糸	平安		284
94	阪	303住	軟	杯A		5.6		欠	1/4	ロク,糸	平安		267
95	阪	303住	軟	杯A	13.6			1/8	欠	ロク	平安		298
96	阪	303住	軟	杯A		4.6		欠	1/5	ロク,糸	平安		290
97	阪	303住	軟	杯A		6.0		欠	1/4	ロク,糸	平安		291
98	阪	303住	土	杯A	11.6	5.2	2.35	3/4	完	ロク,糸	平安	内外面にスス	296・298
99	阪	303住	土	杯A	11.0	4.0	3.1	1/16	1/2	ロク,糸	平安		288・430
100	阪	303住	土	杯A	10.4	5.2	2.8	5/8	完	ロク,糸	平安		265
101	阪	303住	土	杯A	10.3	5.6	2.55	5/8	完	ロク,糸	平安		285・287
102	阪	303住	土	杯A	10.0	4.4	2.8	3/8	7/8	ロク,糸	平安		295
103	阪	303住	土	杯A	12.8	6.6	3.8	1/16	2/3	ロク,糸	平安		290
104	阪	303住	土	杯A	11.6	5.2	2.8	1/6	1/5	ロク,糸	平安	内外面にスス	285
105	阪	303住	土	杯A	11.2	5.4	2.9	1/5	1/6	ロク,糸	平安		284・289
106	阪	303住	土	杯A	9.8	4.2	2.9	5/8	2/3	ロク,糸	平安		290・293
107	阪	303住	土	杯A	11.2			1/4	欠	ロク	平安		293
108	阪	303住	土	杯A	13.5			1/6	欠	ロク	平安		267
109	阪	303住	土	杯A	13.4			1/4	欠	ロク	平安		283・290
110	阪	303住	土	杯A		5.2		欠	7/8	ロク,糸	平安	内外面にスス	278・287
111	阪	303住	土	杯A		5.6		欠	1/5	ロク,糸	平安		293・296
112	阪	303住	土	杯A		4.8		欠	3/4	ロク,糸	平安		296・297
113	阪	303住	土	杯A		4.2		欠	1/3	ロク,糸	平安		291
114	阪	303住	土	杯A		5.0	6.0	欠	完	ロク,糸	平安		267
115	阪	303住	黒	杯A	19.6	9.0	3.7	1/8	1/8	ロク,内面ミ,糸後工具ナデ	平安	黒ヌケ	267・294
116	阪	303住	黒	杯A	13.4	4.4		1/10	1/4	ロク,内面ミ,糸	平安		267
117	阪	303住	黒	杯A		6.8	6.4	欠	1/6	ロク,内面ミ,糸	平安		290
118	阪	303住	土	椀	13.8	8.8		5/8	1/4	ロク,糸,ツケ高台	平安		287
119	阪	303住	土	椀	11.8			1/2	欠	ロク	平安		295・296・298
120	阪	303住	土	椀		7.4		欠	完	ロク,糸,ツケ高台	平安		290・293・297
121	阪	303住	土	椀		7.0		欠	完	ロク,糸・回ケ,ツケ高台	平安		288
122	阪	303住	土	椀		7.6		欠	1/3	ロク,糸後ナデ,ツケ高台	平安		298
123	阪	303住	土	椀		6.2		欠	1/3	ロク,糸,ツケ高台	平安		292
124	阪	303住	土	椀		7.0		欠	3/8	ロク,糸,ツケ高台	平安		297
125	阪	303住	土	椀				欠	欠	ロク,糸,ツケ高台	平安		296
126	阪	303住	土	椀		5.4	5.5	欠	7/8	ロク,ツケ高台	平安		290
127	阪	303住	黒	椀	14.0	7.6		1/8	完	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		265・284
128	阪	303住	黒	椀	10.2			1/8	欠	ロク,内面ミ	平安		285・295
129	阪	303住	黒	椀		7.4		欠	完	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		285・296
130	阪	303住	黒	椀		7.0		欠	1/4	ロク,内面ミ,回ケ,ツケ高台	平安		295
131	阪	303住	黒	椀		7.6		欠	1/4	ロク,内面ミ,回ケ,ツケ高台	平安		295
132	阪	303住	黒	椀		6.2		欠	完	ロク,内面暗紋,糸,ツケ高台	平安		270
133	阪	303住	黒	椀		7.6		欠	1/8	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		285
134	阪	303住	黒B	椀	15.0		5.7	1/16	欠	ロク,内外面ミ,内面暗紋	平安		290・291
135	阪	303住	黒B	椀	13.6	6.8		1/8	1/2	ロク,内外面ミ,ツケ高台	平安		287
136	阪	303住	黒	皿	13.0		2.8	1/12	欠	ロク,内面ミ	平安		298
137	阪	303住	土	皿	11.7	5.0	2.75	7/8	3/4	ロク,糸	平安	柱状の高台	271・272
138	阪	303住	土	皿	11.2	4.1		1/3	完	ロク,糸	平安	柱状の高台	290・293・296
139	阪	303住	土	盤BII	10.6			1/8	欠	ロク,糸	平安		297
140	阪	303住	土	盤BII	10.2			1/4	欠	ロク,糸後ナデ	平安		289・291・295
141	阪	303住	土	盤BII	11.0			1/8	欠	ロク	平安		294
142	阪	303住	土	盤BII	9.6			1/5	欠	ロク	平安		290

(種別略記) 土:土師器 須:須恵器 黒:黒色土器A 黒B:黒色土器B 軟:軟質須恵器
(成形・調整・紋様略記) ロク:ロクロナデ 糸:回転糸切り 回ケ:回転ヘラケズリ ハ:ハケメ タ:タタキ ミ:ヘラミガキ

第7表 土器一覧(2/6)

No.	地区	地点	種別	器種器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁	底部	成形・調整・紋様など	時期	その他・備考	注記
143	豊郷	303伊	土	盤B1	15.6			1/5	欠	ロク	平安		297
144	豊郷	303伊	土	盤A		10.2		欠	1/8	ロク	平安		290
145	豊郷	303伊	灰	椀	12.2			1/4	欠	ロク,漬け掛け	平安		291・297
146	豊郷	303伊	灰	椀	15.6			1/8	欠	ロク,漬け掛け	平安		290
147	豊郷	303伊	灰	椀	15.6			1/24	欠	ロク,漬け掛け	平安		295
148	豊郷	303伊	灰	椀	15.0			1/16	欠	ロク,漬け掛け	平安		279
149	豊郷	303伊	灰	椀		7.6		欠	1/2	ロク,糸,ツケ高台	平安		290
150	豊郷	303伊	灰	椀		6.4		欠	1/3	ロク,ツケ高台	平安		293
151	豊郷	303伊	灰	椀		5.8		欠	完	ロク,糸,ツケ高台	平安		296
152	豊郷	303伊	灰	椀		8.0		欠	1/6	ロク,糸,ツケ高台	平安		292
153	豊郷	303伊	灰	椀		8.0		欠	1/2	ロク,糸,ツケ高台	平安	底面墨書	290
154	豊郷	303伊	灰	椀		8.2		欠	1/4	ロク,糸,ツケ高台	平安	見込み部研磨	284
155	豊郷	303伊	灰	皿	13.2			1/6	欠	ロク,漬け掛け	平安		287
156	豊郷	303伊	灰	皿	10.75	6.2	2.35	完	完	ロク,回ケ,ツケ高台,漬け掛け	平安		266
157	豊郷	303伊	灰	皿	12.6	7.2	2.05	3/8	3/8	ロク,糸,ツケ高台,漬け掛け	平安		285
158	豊郷	303伊	灰	皿	11.8			1/8	欠	ロク,漬け掛け	平安		293
159	豊郷	303伊	灰	皿		6.2		欠	1/4	ロク,回ケ,ツケ高台	平安	見込み部研磨	284
160	豊郷	303伊	灰	皿		6.8		欠	1/4	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		293
161	豊郷	303伊	灰	硯蓋	13.0			1/12	欠	ロク	平安		298
162	豊郷	303伊	黒B	耳皿		5.7		1/12	完	ロク,内外面ミ,糸,ツケ高台	平安		287
163	豊郷	303伊	須	長頸壺				欠	欠	ロク	平安		293
164	豊郷	303伊	灰	四足壺						ロク,陰溝貼り付け	平安	破片実測	287
165	豊郷	303伊	灰	長頸壺	9.2			1/8	欠	ロク	平安		290
166	豊郷	303伊	黒B	鍋						ヨコナデ,内面カキメ(ハ)	平安	破片実測	292
167	豊郷	303伊	土	小型鍋		10.8		欠	1/3	ロク,糸	平安		283・296
168	豊郷	303伊	土	鍋		8.6		欠	1/2	外面工具ナデ・ケズリ,内面ナデ,底面押圧平坦化	平安		291・295
169	豊郷	303伊+	土	杯A	10.6	5.2	2.4	1/8	完	ロク,糸	平安		287・429・464
170	豊郷	303伊+	土	杯A		6.0		欠	1/4	ロク,糸	平安		284・429・430
171	豊郷	303伊+	土	杯A		5.6		欠	1/2	ロク,糸	平安		278・429
172	豊郷	303伊+	黒	杯A	13.4	5.6	4.0	1/16	1/4	ロク,内面ミ,糸	平安		267・427・429
173	豊郷	303伊+	土	椀	14.2	7.8	5.2	1/4	1/2	ロク,糸,ツケ高台	平安		284・425・427
174	豊郷	303伊+	土	椀		8.4		欠	1/10	ロク,糸,ツケ高台	平安		291・294・429
175	豊郷	303伊+	土	椀		6.6		欠	1/4	ロク,糸,ツケ高台	平安		294・428
176	豊郷	303伊+	土	椀				欠	欠	ロク,糸?,ツケ高台	平安		296・396
177	豊郷	303伊+	土	皿	11.0	5.8	2.5	1/4	完	ロク,糸	平安	柱状の高台	287・293・427
178	豊郷	303伊+	土	盤B2	9.8			1/8	欠	ロク,糸,ツケ高台	平安		288・430
179	豊郷	303伊+	土	盤B2	10.2			3/8	欠	ロク	平安		389・390・427・430
180	豊郷	303伊+	灰	段皿	11.8	6.6	2.4	3/8	完	ロク,糸,ツケ高台,漬け掛け	平安		291・296・464
181	豊郷	303伊+	土	盤A	30.6			1/10	欠	ロク,口縁面取り	平安		297・440
182	豊郷	303伊+	須	長頸壺		4.6		欠	完	ロク,胴体面回ケ,糸,ツケ高台	平安		391・394・430・431
183	豊郷	303伊+	土	羽釜	19.4			1/15	欠	ハ,ナデ	平安	鍔は非全周,外面にススあり	※1
184	豊郷	304伊	須	鉢	16.9			1/16	欠	ロク,口縁部外面に沈線	平安		300
185	C	305伊	軟	杯A		5.0		欠	完	ロク,糸	平安		495
186	C	305伊	黒	杯A		6.2		欠	完	ロク,内面ミ,糸	平安		483
187	C	305伊+	黒	杯A	14.7	6.4	5.0	1/5	完	ロク,内面ミ,糸	平安		485・507・511
188	C	305伊+	黒	杯A		6.6		欠	5/6	ロク,内面ミ,糸	平安		496・522
189	BN	土3	須	壺蓋	15.2	−		1/20	−	ロク	平安		347
190	BN	土3	軟	杯A	11.0	4.8	3.8	1/4	5/6	ロク,糸	平安		350
191	BN	土3	土	杯A	11.2	5.8	3.4	完	完	ロク,糸	平安	外面にタール	341
192	BN	土3	土	杯A	10.9	5.2	2.8	完	完	ロク,糸	平安		341
193	BN	土3	土	杯A	11.1	5.0	3.2	1/2	完	ロク,糸	平安		347・349
194	BN	土3	土	杯A	11.1	5.4	3.35	2/3	完	ロク,糸	平安		344
195	BN	土3	土	杯A	11.0	5.0	3.2	1/4	完	ロク,糸	平安		347・352
196	BN	土3	土	杯A	11.4	5.4	3.5	1/4	1/2	ロク,糸	平安		349
197	BN	土3	土	杯A	11.6	6.4	2.8	1/4	1/3	ロク,糸	平安		350
198	BN	土3	土	杯A	11.2	5.2	3.1	1/4	1/2	ロク,糸	平安		350
199	BN	土3	土	杯A	10.8	5.6	3.0	1/8	1/3	ロク,糸	平安		352
200	BN	土3	黒	杯A		4.8		欠	完	ロク,内面暗紋,糸	平安		347
201	BN	土3	黒	杯A	11.6	5.0	3.3	1/10	1/4	ロク,内面ミ,糸	平安		347・350
202	BN	土3	土	椀	17.4			1/4	欠	ロク	平安		347
203	BN	土3	土	椀	13.6	7.0	5.1	1/8	2/3	ロク,糸,ツケ高台	平安		339・340・349・350
204	BN	土3	土	椀	13.7			5/8	欠	ロク,糸,ツケ高台	平安		340・341・350
205	BN	土3	黒	椀		8.0		欠	1/4	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安	内面付着物	353
206	BN	土3	黒	椀	15.8			1/5	欠	ロク,内面暗紋	平安		352
207	BN	土3	黒	椀		7.0		欠	1/8	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安	底面墨書	347
208	BN	土3	黒	椀	12.4			1/6	欠	ロク,内面ミ	平安		347
209	BN	土3	黒	椀	14.4			1/4	欠	ロク,内面ミ	平安		352・353
210	BN	土3	黒	椀		7.3		欠	1/2	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		352・414
211	BN	土3	黒	椀	15.2	7.6	4.7	3/8	1/3	ロク,回ケ,ツケ高台,漬け掛け	平安		338
212	BN	土3	灰	椀		8.6		欠	1/6	ロク,回ケ,ツケ高台,漬け掛け	平安		350
213	BN	土3	灰	椀		8.4		欠	1/5	ロク,糸,ツケ高台,漬け掛け	平安	外面ススあり	348

[種別略記] 土:土師器 須:須恵器 黒:黒色土器A 黒B:黒色土器B 軟:軟質須恵器 灰:灰釉陶器 [注記欄の※印] ※1:289・290・293 ～ 295・452
[器形・調整・紋様略記] ロク:ロクロナデ 糸:回転糸切り 回ケ:回転ヘラケズリ ハ:ハケメ タ:タタキ ミ:ヘラミガキ

第7表 土器一覧(3/6)

No.	地区	地点	種別	器種器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁	底部	成形・調整・紋様など	時期	その他・備考	注記
214	B内	土3	灰	椀	15.6			1/8	欠	ロク、回ケ、口縁内面沈線、漬け掛け	平安		341
215	B内	土3	灰	椀	18.0			1/8	欠	ロケ、回ケ、口縁内面沈線、漬け掛け	平安		349
216	B内	土3	灰	椀	17.4			1/8	欠	ロク、漬け掛け、輪花(単位不明)	平安	漆の付着物	349
217	B内	土3	灰	椀		6.4		欠	5/6	ロケ、糸、ツケ高台、漬け掛け	平安	内外面スス	345・347
218	B内	土3	灰	椀		7.8		欠	1/2	ロク、回ケ、ツケ高台	平安	見込み部研磨	345
219	B内	土3	灰	椀		7.8		欠	3/8	ロケ、回ケ、ツケ高台	平安		353
220	B内	土3	灰	椀	15.6	8.0	4.7	1/8	3/8	ロケ、糸、ツケ高台、漬け掛け	平安	見込み部スス	350・352
221	B内	土3	緑	椀	10.4			3/8	欠	ロク、回ケ、内外面ミ	平安	釉溶解	350・351
222	B内	土3	緑	椀		8.7		欠	完	ロク、底面露胎・糸、トチン痕	平安	補修痕のような粘土付着	334
223	B内	土3	灰	段皿	14.5	7.6	2.6	1/4	完	ロク、回ケ、ツケ高台、漬け掛け	平安		347・350・351
224	B内	土3	灰	段皿	13.2	6.4	2.1	1/6	1/10	ロケ、ツケ高台、漬け掛け	平安		350
225	B内	土3	灰	段皿	13.2			1/12	欠	ロク、漬け掛け	平安		348
226	B内	土3	緑	段皿	13.3			1/8	欠	ロク、内面ミ	平安	一部釉溶解	335
227	B内	土3	緑	皿	11.4			1/6	欠	ロク	平安	釉溶解で調整不明	351
228	B内	土3	土	盤B1	13.2			1/4	欠	ロク	平安		352・353
229	B内	土3	土	小型甕		8.6		欠	1/7	ロク、糸	平安		353・415
230	B内	土3	土	小型甕	13.4			1/8	欠	ロク、口縁内面・胴部一部カキメ	平安		342・350・352
231	B内	土3	灰	長頸壺		8.8		欠	5/8	ロク、回ケ、ツケ高台	平安		347・351
232	B内	土3	灰	広口瓶		13.0		欠	3/8	ロク、回ケ、ツケ高台、底面施釉	平安		339・347・350
233	B内	土3	須	甕						ロケ、波状紋・列点刺突	平安	破片実測	339
234	B内	土3・	土	杯A	10.6	5.6	3.5	1/2	1/3	ロク、糸	平安		347・349・414
235	B内	土3・	灰	椀	17.2			1/4	欠	ロク、回ケ、漬け掛け	平安		245・347・349
236	B内	土3・	緑	皿	13.6	7.4	2.5	1/20	3/4	ロク、糸?	平安	釉溶解で調整不明	246349
237	A	土5	灰	段皿	11.8	6.6	2.2	完	完	ロク、糸、ツケ高台、漬け掛け	平安		004
238	B東	P5	土	皿		7.2		欠	2/3	ロク、糸	平安		358
239	B東	P5	灰	椀	13.6			1/6	欠	ロク、漬け掛け、口縁内面に沈線	平安		358
240	B内	P14	黒	椀		7.5		欠	1/10	ロク、内面ミ、糸、ツケ高台	平安		365
241	B東	P6	土	杯A	9.6	5.0	2.8	2/5	完	ロク、糸	平安		361・362
242	B東	P6・	土	杯A	10.4	4.6	2.35	完	完	ロク、糸	平安		360・362・446
243	B東	P6	灰	皿		6.8		欠	1/6	ロク、回ケ、ツケ高台、刷毛塗り	平安		362
244	B東	P6・	土	盤A		14.0		欠	1/2	ロク、高台下面に沈線状窪み	平安		359・446
245	B東	No.2	土	杯A	13.5	5.5	3.85	1/3	完	ロク、糸	平安		384
246	B東	No.2	土	杯A	14.5	6.5	4.7	3/4	完	ロク、糸	平安		384
247	B東	No.5	黒	杯A	12.6	4.7	3.55	1/4	1/3	ロク、内面ミ、糸	平安	体部外面墨書	387
248	B東	No.4	黒	杯A	14.8	5.0	4.3	1/4	1/4	ロク、内面ミ、糸	平安		386
249	B東	No.7	土	椀	14.75	7.1	4.8	完	完	ロク、糸、ツケ高台	平安		389
250	B東	No.3	土	椀	14.3			1/6	欠	ロク	平安		385
251	B東	No.1	土	鉢	18.9	8.2	10.1	1/2	完	ロク、糸後ハケメ状擦痕	平安		383
252	B東	No.2・	土	盤A	27.2			1/4	欠	ロク、体部下半ナデ	平安		384・432・441
253	B東	No.3	土	甕B	23.0	9.9	28.0	1/6	1/3	口縁ヨコナデ・カキメ、胴ハ・縦長のナデ・下端ケズリ	平安		385
254	B東	No.3・	土	杯A	13.2	5.2	4.3	1/4	1/3	ロク、糸	平安		383・447
255	B東	No.8・	黒	杯A	12.0			1/3	欠	ロク、内面ミ	平安		389・425
256	B東	No.2・	黒	杯A		6.8		欠	3/4	ロク、内面ミ、糸	平安		384・432
257	A	土19	灰	小椀	8.3	4.3	3.0	1/10	1/3	ロク、ツケ高台、漬け掛け	平安	輪花単位不明	018
258	A	土16	灰	小椀		5.0		欠	完	ロク、底面ナデ、ツケ高台	平安		219
259	A	土16	灰	椀		8.2		欠	1/4	ロク、回ケ、ツケ高台	平安	高台内側に朱	225
260	A	土11	灰	段皿		6.0		欠	完	ロク、糸、ツケ高台	平安	見込み部に朱	007
261	A	Ⅱ層	白	椀	14.4			1/12	欠	ロク、回ケ?	平安		057
262	A	土11	灰	盤A?				欠	欠	ロク、ツケ高台、漬け掛け	平安	高台に透かし	007
263	A	土18	土	足釜				欠	欠	ナデ、工具ナデ	平安	脚完	017
264	A	IV層	須	蓋B	14.8			1/14	欠	ロク	奈一平		115
265	A	IV層	須	杯B	9.8			1/7	欠	ロク	平安		160
266	A	IV層	須	杯B		10.8		欠	1/8	ロク、回ケ、ツケ高台	平安		150
267	A	IV層	須	杯B		8.6		欠	1/3	ロク、回ケ、ツケ高台	平安		161
268	A	IV層	須	杯B		7.8		欠	2/7	ロク、回ケ、ツケ高台	平安		125
269	A	IV層	須	杯A		5.8		欠	1/3	ロク、糸	平安		143
270	A	IV層	軟	杯A		6.3		欠	1/2	ロク、糸	平安		123
271	A	IV層	軟	杯A	12.8			1/7	欠	ロク	平安		129
272	A	IV層	土	杯A	14.5	5.6	3.6	1/3	2/3	ロク、糸	平安		176
273	A	IV層	土	杯A	9.4	4.5	2.4	1/4	完	ロク、糸	平安		161
274	A	IV層	土	杯A	11.0	6.1	2.7	3/4	5/6	ロク、糸	平安		156・177
275	A	IV層	土	杯A	10.1	5.1	2.1	1/6	完	ロク、糸	平安		158
276	A	IV層	土	杯A	11.2	5.3	2.4	1/3	2/3	ロク、糸	平安		177
277	A	IV層	土	杯A	9.3			1/3	欠	ロク	平安		156・160
278	A	IV層	土	杯A		4.7		欠	完	ロク、糸	平安		158
279	A	IV層	土	杯A	9.2	4.4	2.1	1/4	1/4	ロク、糸	平安	内面スス	119
280	A	IV層	土	杯A	9.6	5.3	1.7	1/8	1/3	ロク、糸	平安		176
281	A	IV層	黒	杯A	13.8	5.9	4.5	3/5	完	ロク、内面ミ、糸	平安		179
282	A	IV層	黒	杯A	16.1	6.6	5.8	1/6	3/5	ロク、内面ミ、糸	平安		125
283	A	IV層	黒	杯A	12.7	5.7	4.2	15/16	5/6	ロク、内面ミ、糸	平安		180
284	A	IV層	黒	杯A		5.6		欠	15/16	ロク、内面ミ、糸	平安		152・162

(種別略記) 土:土師器 須:須恵器 黒:黒色土器A 軟:軟質須恵器 灰:灰釉陶器 緑:緑釉陶器 白:白磁
(成形・調整・紋様略記) ロク:ロクロナデ 糸:回転糸切り 回ケ:回転ヘラケズリ ハ:ハケメ タ:タタキ ミ:ヘラミガキ

第7表 土器一覧(4/6)

No.	地区	地点	種別	器種器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁	底部	成形・調整・紋様など	時期	その他・備考	注記
285	A	IV/別	黒	杯A		5.8		欠	3/4	ロク,内面ミ,糸	平安		188
286	A	IV/別	土	椀		5.1		欠	1/2	ロク,底面ナデ,ツケ高台	平安		170
287	A	IV/別	土	椀		4.5		欠	1/3	ロク,底面ナデ,ツケ高台	平安		181
288	A	IV/別	土	椀		5.0		欠	1/4	ロク,糸,ツケ高台	平安		118
289	A	IV/別	土	椀		7.1		欠	完	ロク,糸,ツケ高台	平安	内面スス	176
290	A	IV/別	黒	椀		5.8		欠	完	ロク,内面暗紋,糸,ツケ高台	平安		165
291	A	IV/別	黒	椀		7.8		欠	3/4	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		169
292	A	IV/別	黒	椀	15.1			1/8	欠	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		158
293	A	IV/別	黒	小椀		4.0		欠	完	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		116
294	A	IV/別	黒	椀		5.3		欠	完	ロク,見込み部以外の内面ミ,糸	平安		181
295	A	IV/別	黒B	椀		6.6		欠	1/2	ロク,底面以外ミ,糸	平安		178
296	A	IV/別	黒B	椀				欠	欠	ロク,内外面ミ,糸,ツケ高台	平安	高台接合部1/3残	170
297	A	IV/別	灰	椀		8.7		欠	1/2	ロク,糸,ツケ高台	平安		168
298	A	IV/別	灰	椀	16.4	8.1	7.1	1/4	1/2	ロク,糸,ツケ高台,漬け掛け	平安		172
299	A	IV/別	灰	椀		8.2		欠	1/2	ロク,回ケ,ツケ高台,漬け掛け	平安		166
300	A	IV/別	灰	椀		7.0		欠	1/2	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		118
301	A	IV/別	灰	椀		7.8		欠	完	ロク,回ケ,ツケ高台,漬け掛け	平安		167
302	A	IV/別	灰	椀		7.2		欠	1/3	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		121
303	A	IV/別	灰	椀		7.8		欠	1/3	ロク,糸,ツケ高台	平安	見込み部研磨	153
304	A	IV/別	灰	椀		7.5		欠	2/5	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		133
305	A	IV/別	灰	椀		6.9		欠	完	ロク,糸,ツケ高台	平安		139
306	A	IV・V層	灰	椀		6.6		欠	2/5	ロク,糸,ツケ高台	平安		194
307	A	IV/別	灰	椀		8.4		欠	1/2	ロク,糸,ツケ高台	平安		134
308	A	IV/別	灰	椀		7.0		欠	1/3	ロク,糸,部分的手持ちケズリ,ツケ高台	平安	見込み部研磨	137
309	A	IV/別	灰	椀		7.4		欠	1/4	ロク,ツケ高台	平安		137
310	A	IV/別	灰	椀		7.6		欠	1/2	ロク,回ケ,糸,ツケ高台,ハケヌリ?	平安		143
311	A	IV/別	土	鍋	10.2	4.4	1.2	1/2	1/2	ロク,糸	平安		157・159
312	A	IV/別	土	鍋	9.0	4.0	1.5	完	完	ロク,糸	平安		176
313	A	IV/別	土	鍋	9.1	4.1	1.6	1/3	完	ロク,糸	平安		119・168
314	A	IV/別	土	鍋		3.6		欠	完	ロク,糸	平安		182
315	A	IV/別	灰	段鍋	13.6	6.3	2.9	1/6	1/3	ロク,回ケ,底中央に糸,ツケ高台,漬け掛け	平安		179
316	A	IV/別	灰	鍋		8.4		欠	3/7	ロク,底面回ケ後ロク,ツケ高台	平安		176
317	A	IV/別	灰	鍋		8.6		欠	1/4	ロク,回ケ,ツケ高台,内面全面釉	平安	K-14	118
318	A	IV/別	灰	段鍋	17.8			1/9	欠	ロク,回ケ,内面全面釉	平安		125
319	A	IV/別	灰	三足釜	20.6	—		1/20	1/8	ロク,回ケ・手持ちケ,脚貼付け,内面全面釉	平安		159
320	A	IV/別	灰	鍋		9.4		欠	1/6	ロク,ケズリ,ツケ高台,内面全面釉	平安	K-14	116
321	A	IV・V層	灰	硯鍋	10.4			1/6	欠	ロク	平安		193
322	A	IV/別	灰	鍋		6.4		欠	1/4	ロク,糸,ツケ高台	平安		114
323	A	IV・V層	土	盤B		9.1		欠	1/2	ロク,底面ナデ,ツケ高台	平安		192
324	A	IV/別	土	盤B		7.8		欠	1/6	ロク,ツケ高台	平安		164
325	A	IV/別	黒	鉢		11.4		欠	2/5	ロク,内面ミ摩滅,糸	平安		124・139
326	A	IV/別	土	小型甕	21.6			1/7	欠	ロク	平安		143
327	A	IV/別	土	小型甕	12.8			1/4	欠	ロク	平安		166
328	A	IV/別	土	小型甕		7.7		欠	1/4	ロク,カキメ,糸	平安		202
329	A	IV/別	土	甕B		8.9		欠	1/3	ハ,工具ナデ,底面弱いハ・ナデ	平安		166
330	A	IV/別	土	甕B		8.2		欠	1/6	ハ,工具ナデ,底面押圧平坦化	平安		182
331	A	IV・V層	土	甕B	21.8			1/4	欠	ヨコナデ,ハ,カキメ,縦の長いナデ	平安		160・191・192
332	A	IV/別	土	羽釜	19.9			1/5	欠	ナデ,工具ナデ,鍔貼り付け	平安	非ロクロ?	166・169
333	A	IV/別	土	甑		15.8		欠	1/7	カキメ,工具ナデ	平安		118
334	A	IV/別	灰	長頸壺		7.8		欠	1/3	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		164
335	A	IV/別	須	長頸壺		8.3		欠	3/4	ロク,糸,ツケ高台	平安		150
336	A	IV/別	須	長頸壺	10.2			1/6	欠	ロク	平安		146
337	A	IV/別	土質	鍋	8.2	6.8	1.3	1/4	1/4	手捏ね成形	中世	胎土は橙～灰白色	149
338	隠内	IV/別	土	杯A	12.0	5.4	4.5	1/12	完	ロク,糸	平安		347・414
339	隠内	IV/別	土	杯A	10.0	4.8	2.1	1/3	1/3	ロク,糸	平安		415
340	隠内	IV/別	土	椀		7.2		欠	1/3	ロク,手持ちケズリ,ツケ高台	平安		418
341	隠内	IV/別	黒	椀		7.0		欠	2/3	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		418
342	隠内	IV/別	灰	椀		7.9		欠	2/5	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		417
343	隠内	IV/別	灰	鍋	12.1	5.9	2.4	1/6	1/3	ロク,糸,ツケ高台,漬け掛け	平安		417
344	隠内	II層	土	椀		7.0		欠	完	ロク,糸,ツケ高台	平安	見込み部線刻	412
345	隠内	301/別	須	蓋				欠	欠	ロク,つまみ貼り付け	平安	つまみ径2.9cm	249
346	隠内	301/別	須	杯B		8.8		欠	1/6	ロク,糸,ツケ高台	平安		251
347	隠内	301/別	土	杯A	10.0	5.0	3.05	1/8	1/3	ロク,糸	平安		248・249
348	隠内	301/別	土	杯A	10.8	5.1	3.4	1/2	1/3	ロク,糸	平安	内面スス	246
349	隠内	301/別	土	杯A	12.35	8.6	2.9	1/4	1/3	ロク,糸	平安		248
350	隠内	301/別	黒	杯A		5.7		欠	1/3	ロク,内面ミ,糸	平安		248
351	隠内	301/別	土	椀		5.4		欠	1/3	ロク,糸,ツケ高台	平安		245
352	隠内	301/別	土	椀		7.2		欠	2/5	ロク,糸,ツケ高台	平安		245
353	隠内	301/別	黒	椀		5.8		欠	完	ロク,内面暗紋,糸,ツケ高台	平安		246
354	隠内	301/別	黒	椀		6.1		欠	完	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		251
355	隠内	301/別	灰	椀		7.8		欠	2/5	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		248

(種別略記) 土:土師器 須:須恵器 黒:黒色土器A 黒B:黒色土器B 軟:軟質須恵器 板:灰釉陶器 土質:土師質土器
(成形・調整・紋様略記) ロク:ロクロナデ 糸:糸切り 回ケ:回転ヘラケズリ ハ:ハケメ タ:タタキ ミ:ヘラミガキ

第7表 土器一覧(5/6)

No.	地区	地点	種別	器種器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁	底部	成形・調整・紋様など	時期	その他・備考	注記
356	脇内	30区	灰	椀		8.8		欠	1/4	ロク,底面回ケ後ナデ,ツケ高台	平安		247
357	脇内	30区	灰	皿	12.6	6.0	2.6	1/16	2/5	ロク,底面ナデ,ツケ高台,流け掛け	平安		243
358	脇内	30区	灰	耳皿	(9.2)	5.4	2.5	1/4	1/4	ロク,回ケ,ツケ高台	平安	内面全面釉	251
359	脇内	30区	緑	椀か皿		6.7		欠	1/3	ロク,底面ケズリ?	平安	釉溶解で調整不明	248
360	脇	1 種IV/III	灰	皿	13.4			1/8	欠	ロク,回ケ,ツケ高台,流け掛け	平安		430
361	脇	1 種IV/III	須	長頸壺		3.9		欠	3.9	ロク,回ケ	平安		428
362	脇	1 種IV/III	須	高盤?	22.6			1/14	欠	ロク,回ケ	奈良?		425
363	脇	1 種IV/III	軟	杯A	10.8			1/8	欠	ロク	平安	歪み大口圧不確実	422
364	脇	1 種IV/III	軟	杯A	13.8			1/8	欠	ロク	平安		422
365	脇	1 種V/III	土	杯A	10.4	5.2	2.8	1/4	完	ロク,糸	平安		456
366	脇	1 種IV/III	土	杯A	12.8	5.6	3.0	5/8	5/8	ロク,糸	平安		424
367	脇	1 種IV/III	土	杯A	14.0	6.6	3.6	1/16	7/8	ロク,糸	平安		427
368	脇	1 種IV/III	土	杯A	12.8	6.2	3.5	1/16	完	ロク,糸	平安	外面にスス	424
369	脇	1 種IV/III	土	杯A	12.4	6.4	4.0	3/16	5/16	ロク,糸	平安	外面にスス	424
370	脇	1 種IV/III	土	杯A	13.6	7.4	3.3	5/16	5/16	ロク,糸	平安		424
371	脇	1 種IV/III	黒	杯A	14.0	6.2	3.6	1/4	5/8	ロク,糸	平安		424
372	脇	1 種IV/III	土	杯A	13.6	8.8	3.5	1/8	1/10	ロク,糸	平安	内外面にスス	425
373	脇	1 種IV/III	土	杯A	12.5	6.6	3.2	3/8	3/8	ロク,糸	平安		424
374	脇	1 種IV/III	土	杯A	11.6			1/8	欠	ロク	平安		430
375	脇	1 種IV/III	土	杯A	12.8			1/8	欠	ロク	平安		427
376	脇	1 種IV/III	土	杯A	12.8			1/4	欠	ロク	平安		424
377	脇	1 種V/III	土	杯A	11.8			1/4	欠	ロク	平安		445
378	脇	1 種IV/III	土	杯A		6.8		欠	3/8	ロク,糸	平安		425・430
379	脇	1 種IV/III	土	杯A		7.0		欠	3/8	ロク,糸	平安		424・429
380	脇	1 種IV/III	黒	杯A		6.8		欠	3/8	ロク,内面ミ,糸	平安		424
381	脇	1 種IV/III	土	椀	14.8	7.4	4.7	1/12	完	ロク,糸,ツケ高台	平安	内外面にスス	424
382	脇	1 種IV/III	土	椀	14.3	6.5	4.5	1/8	完	ロク,糸,ツケ高台	平安	内面にスス	424
383	脇	1 種IV/III	土	椀	15.1			5/16	欠	ロク	平安		424
384	脇	1 種IV・V/III	黒	椀	14.0			1/8	欠	ロク,内面ミ	平安		429・445
385	脇	1 種V/III	土	皿	14.0			1/16	欠	ロク	平安	体部外面墨書	453
386	脇	1 種IV/III	土	皿		5.7		欠	5/8	ロク,糸	平安		424
387	脇	1 種IV・V/III	黒	皿	14.0	6.2	3.35	1/8	7/8	ロク,内面ミ,糸	平安		422・444
388	脇	1 種IV・V/III	黒	皿	14.0			1/8	欠	ロク,内面ミ	平安		422・444
389	脇	1 種IV/III	土	甕		9.4		欠	5/16	ナデ,工具ナデ	平安		429
390	脇	1 種V/III	土	甕		8.2		欠	1/4	工具ナデ,ハ	平安		445
391	脇	1 種IV/III	土	甕		7.0		欠	1/4	ハ,ナデ	平安		429
392	脇	1 種IV/III	土	小型甕		5.6		欠	3/16	ロク,カキメ,糸	平安		422
393	脇	1 種IV/III	土	小型甕	15.0			1/8	欠	ロク	平安	内外面におこげ・スス	424
394	脇	1 種IV/III	土	小型甕	16.6			3/16	欠	ロク,カキメ	平安		424
395	脇	1 種IV・V/III	土	盤A				欠	欠	ロク,透かし(単位不明)	平安		432・441
396	脇	1 種IV/III	土	甑		11.0		欠	1/4	工具ナデ,ケズリ	平安		424
397	脇	1 種	須	杯A	13.6	5.8	3.1	1/8	1/10	ロク,糸	平安		467
398	脇	1 種	土	椀		7.0		欠	1/2	ロク,糸,ツケ高台	平安		464
399	脇	1 種	須	鉢	15.6			1/16	欠	ロク,体部外面に2本沈線	平安	金属器模倣?	466
400	脇	II種IV・V/III	須	杯A		6.3		欠	1/3	ロク,糸	平安		441
401	脇	II種IV/III	軟	杯A	13.0			1/8	欠	ロク	平安		434
402	脇	II種IV/III	土	杯A	9.2	4.8	2.5	1/6	1/4	ロク,糸	平安		440
403	脇	II種IV/III	黒	杯A	13.6	5.6	3.9	1/8	5/6	ロク,内面ミ,糸	平安		432
404	脇	II種IV/III	黒	杯A		6.0		欠	1/4	ロク,内面ミ,糸	平安		432
405	脇	II種IV/III	土	椀	15.0			1/8	欠	ロク	平安		433
406	脇	II種IV/III	黒	椀	15.1	7.1	5.2	1/8	1/8	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		432
407	脇	II種IV/III	黒	椀		5.6		欠	完	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		434
408	脇	II種IV/III	灰	椀		6.7		欠	1/2	ロク,回ケ,糸,ツケ高台	平安		431
409	脇	II種IV/III	灰	段皿	11.7			1/4	欠	ロク	平安		431
410	脇	II種IV/III	土	盤B		6.1		欠	1/2	ロク,ツケ高台	平安		431
411	脇	II種IV/III	須	壺	17.0	—		1/15	—	ロク	平安		440
412	脇	II種IV/III	土	鉢	20.8	8.7	9.2	1/8	1/2	ロク,糸	平安		432
413	脇	II種IV/III	土	甕B	18.2			1/6	欠	口縁ヨコナデ・カキメ,胴部ハ	平安		432
414	脇	II種IV/III	土	甕B		8.2		欠	1/6	外面ハ,内面縦の長いナデ	平安		429
415	脇	II種IV/III	土	甕B	24.4			1/4	欠	口縁ヨコナデ・カキメ,胴部ハ・ロク	平安		432
416	脇	II種IV/III	土	甕B	23.5			1/3	欠	口縁ヨコナデ・カキメ,胴部ハ・ロク	平安	口押部面状	425・430・432
417	脇	II種IV/III	土	小型甕	13.6			1/6	欠	ロク	平安		434・437
418	脇	II種IV/III	土	円筒土器		9.6		欠	1/6	ハ,ケズリ	平安		441
419	脇	3区	黒	椀	13.2			1/5	欠	ロク,内面ミ	平安	混入品	323
420	C	1 種	土	杯A	13.2	7.4	3.8	1/6	1/3	ロク,糸	平安		512・513
421	C	1 種	黒	杯A		5.6		欠	1/2	ロク,内面ミ,糸	平安		506
422	C	1 種	黒	椀		6.2		欠	2/5	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		512
423	C	1 種	黒	椀		7.6		欠	1/5	ロク,内面ミ,糸,ツケ高台	平安		511
424	C	北壁	灰	椀		6.2		欠	1/4	ロク,回ケ,ツケ高台	平安	底面に朱?	518
425	C	1 種	灰	椀		8.4		欠	1/4	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		520
426	C	北壁	灰	長頸壺		10.4		欠	1/4	ロク,回ケ,ツケ高台	平安		518

(種別略記) 土:土師器 須:須恵器 黒:黒色土器A 軟:軟質須恵器 灰:灰釉陶器 緑:緑釉陶器
(成形・調整・紋様略記) ロク:ロクロナデ 糸:回転糸切り 回ケ:回転ヘラケズリ ハ:ハケメ タ:タタキ ミ:ヘラミガキ

第7表 土器一覧(6/6)

No.	地区	地点	器種	部位	成形・調整・紋様など	注記
427	BN	302住	壺	側部	縄紋単LR横,荒描横沈線	264
428	BN	302住	壺	側部	縄紋単LR横,荒描横沈線・山形沈線	264
429	BN	302住	壺	側部	荒描垂弧沈線	282
430	BN	302住	壺	側部	縄紋単LR横,荒描横沈線	264
431	BN	302住	壺	側部	縄紋単LR斜,荒描横沈線・山形沈線	264
432	BN	302住	壺	口縁	縄紋単LR横,櫛描横状	261
433	BN	302住	壺	口縁	縄紋単LR横地紋,荒描山形沈線	263
434	BN	302住	壺	口縁	口唇刻み後縄紋単LR横,櫛描雑状紋	262
435	BN	302住	壺	口縁	口唇縄紋単LR横,櫛描雑状紋	261
436	BN	302住	壺	口縁	口唇縄紋単LR横	262
437	BN	302住	壺	側部	櫛描縦状紋	262
438	BN	302住	壺	側部	櫛描縦羽状紋	262
439	BN	302住	壺	側部	櫛描縦羽状紋	262
440	BN	302住	壺	側部	櫛描波状紋	264
441	BN	302住	壺	側部	櫛描波状紋	263
442	BN	302住	鉢一胴	側部	櫛描状紋等間隔止・波状紋・縦羽状紋	259
443	BN	302住	壺	側部	櫛描波状紋	264
444	BR	306住	壺	側部	縄紋単RL横	310
445	BR	306住	壺	側部	荒描懸垂構帯紋・横沈線,櫛描横線	310
446	BR	306住	壺	側部	荒描懸垂構帯紋,櫛描縦線充填	310
447	BR	306住	壺	側部	縄紋単LR横,荒描横沈線・山形沈線,赤彩?	310
448	BR	306住	壺	側部	縄紋単LR横,荒描垂迷弧紋	310
449	BR	306住	壺	口縁	口唇縄紋単LR横	313
450	BR	306住	壺	口縁	口唇縄紋単LR横のち刻み,櫛描波状紋	310
451	BR	306住	壺	口縁	口唇縄紋単LR横	315
452	BR	306住	壺	口縁	口唇・口縁縄紋単LR横,荒描山形沈線	308
453	BR	306住	壺	口縁	口唇・口縁縄紋単RL斜,荒描山形(波状)沈線	310
454	BR	306住	壺	口縁	口唇縄紋単LR横,櫛描波状紋	310
455	BR	306住	壺	側部	櫛描斜条痕	312
456	BR	306住	壺	頸一胴	櫛描雑状紋・斜条痕	310
457	BR	306住	壺	側部	櫛描縦羽状紋	310
458	BR	306住	壺	側部	櫛描縦羽状紋	316
459	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	308
460	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	306
461	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	309
462	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	308
463	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	312
464	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	311
465	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	312
466	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	314
467	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	310
468	BR	306住	壺	側部	櫛描波状紋	315
469	A	上6	壺	口縁	口唇・口縁縄紋単RL横,荒描山形沈線,櫛描雑状紋	5
470	A	上6	壺	口縁	口唇縄紋(潰り不明)	6
471	A	上6	壺	側部	櫛描縦羽状紋	5
472	A	P3	壺	口～胴	口唇縄紋(潰り不明),櫛描斜条痕	21
473	A	P3~III層	壺	側部	櫛描斜条痕	242~021
474	A	VIc層	壺	側部	荒描横沈線,櫛刺突列点	204
475	A	VIc層	壺	側部	縄紋単LR横,荒描横沈線	208
476	A	VIc層	壺	頸～胴	櫛描斜条痕	204~207
477	A	VIc層	壺	側部	櫛描縦羽状紋	208
478	A	VIc層	壺	側部	櫛描縦羽状紋	204
479	A	VIc層	壺	側部	櫛描波状紋	204
480	A	VIIIf層	壺	側部	縄紋単LR横,荒描垂山形沈線	210
481	A	VIIIf~IIIa層	壺	側部	縄紋単LR横,荒描横沈線・結節(押引)沈線	242~203
482	A	VIIIf層	壺	頸部	櫛描横線	214
483	A	VIIIf層	壺	頸～胴	櫛描雑状紋・斜条痕	213
484	A	VIIIf層	壺	側部	櫛描縦羽状紋	214
485	A	VIIIf層	壺	側部	櫛描波状紋	212
486	A	IVf層	壺	口縁	縄紋単RL横地,櫛描波状紋,赤彩?	173
487	BR	I検	鉢?	口縁	口唇外面刻み	469
488	BR	VIIIf層	壺?	側部	太い条痕	461
489	BR	VIIIf層	壺	口縁	口唇縄紋単LR横,櫛描波状紋	461
490	BR	VIIIf層	壺	口縁	口唇刻みのち縄紋単LR横,櫛描波状紋	461
491	BR	VIIIf層	壺	側部	櫛描横羽状紋	461
492	BR	VIIIf層	壺	頸～胴	櫛描波状紋	461
493	BR	VIIIf層	鉢?	側部	密な斜条痕	461
494	BR	VIIIf層	壺	側部	荒描山形沈線懸垂,櫛描斜条痕	477
495	BR	VIIIf層	壺	側部	櫛描波状紋	476
496	BN	301竪	壺	側部	荒描懸垂・櫛描波状紋充填,縄単LR横地紋,荒描横線	247
497	BN	301竪	壺	口縁	口唇・口縁縄紋単RL横,荒描山形沈線	248
498	BN	±3	壺	側部	2本圏の櫛描による相対円弧	353
499	BN	±3	壺	口～胴	口唇縄単LR横,同縄地に荒描山形,櫛描雑状・波状	350
500	BN	±3	壺	口縁	口唇縄紋単LR横,櫛描波状紋	350
501	BN	±3	壺	側部	櫛描波状紋・直線垂下,円形浮紋	351
502	BR	300住	壺	頸～胴	櫛描波状紋・斜条痕	326

第８表　弥生土器拓影一覧

No.	地区	地点	種類	部位	大きさ(cm・g)				成形・調整・紋様など			色調		その他・備考	注記
					幅	長さ	厚さ	重量	凹面	凸面	縁辺	表面	胎土		
1	A	撹乱	平瓦	体部	4.1	4.6	1.7	50.1	布目	縄タタキ		橙	橙	第22図1	043
2	A	撹乱	平瓦	端部	4.6	3.7	2.1	48.6	布目	縄タタキ	面(ナデ)	橙～薄橙	薄橙	第22図2	098
3	A	IV層	平瓦	体部	2.3	2	1.6	14.1	布目	縄タタキ		暗灰白	橙		152
4	A	I検	平瓦	端部	2.3	2.6	1.4	14.7	布目	縄タタキ	面(ケズリ)	青灰	青灰		216
5	A	I検	平瓦	体部	4.5	5.1	1.7	66.6	布目	縄タタキ		暗灰	橙	第22図3	221
6	B東	303住	平瓦	端部	14.3	8.5	1.2	209.0	布目	平行タタキ	面(ケズリ)	薄橙褐	灰白	第22図4	285
7	B東	303住	平瓦	体部	3.7	3.0	2.1	33.5	布目	平行タタキ		薄橙褐	灰白		297
8	B東	IV層	平瓦	端部	6.0	12.7	1.9	185.9	布目	平行タタキ	面(ケズリ)	薄橙褐	灰白	第22図5	422
9	B東	IV層	平瓦	端部	7.0	7.0	1.9	75.3	布目	平行タタキ	面(ケズリ)	薄橙褐	灰白	第22図6	422
10	B東	IV層	平瓦	体部	4.5	5.7	1.8	46.8	布目	平行タタキ		黒灰	灰		431
11	B東	V層	平瓦	端部	5.0	6.6	1.8	64.3	布目	平行タタキ	面(ケズリ)	薄橙褐	灰白	第22図7	445
12	B東	V層	平瓦	体部	7.2	5.1	1.5	53.0	布目	平行タタキ		薄橙褐	灰白	第22図8	445

第９表　瓦一覧

弥生遺構出土品

302 住 (1 ～ 7)

306 住 (8 ～ 14)

土 6 (15)

弥生遺構外出土品

A 区包含層 (16 ～ 20)

B 区包含層 (21)

301 竪混入 (22・23)

土 3 混入 (24)

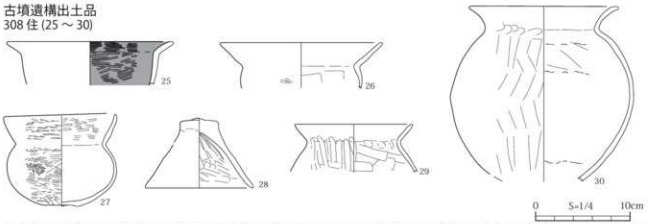
赤彩

0　S=1/4　10cm

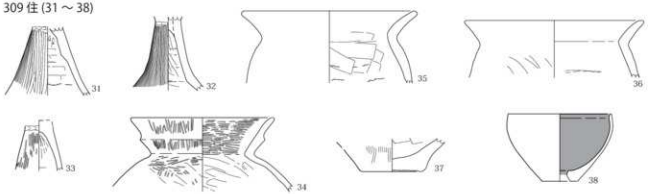
第 10 図　土器陶磁器実測図 (1)

古墳遺構出土品

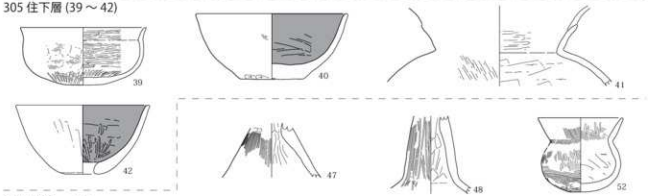
308 住 (25 ～ 30)



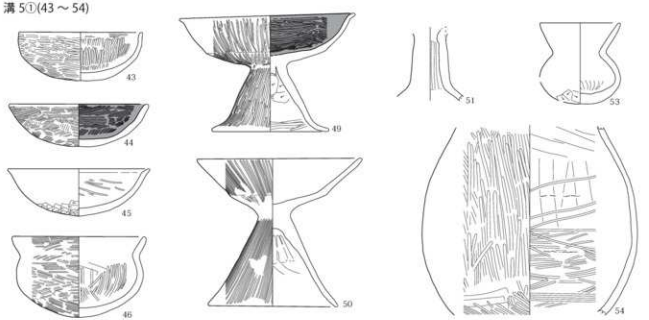
309 住 (31 ～ 38)



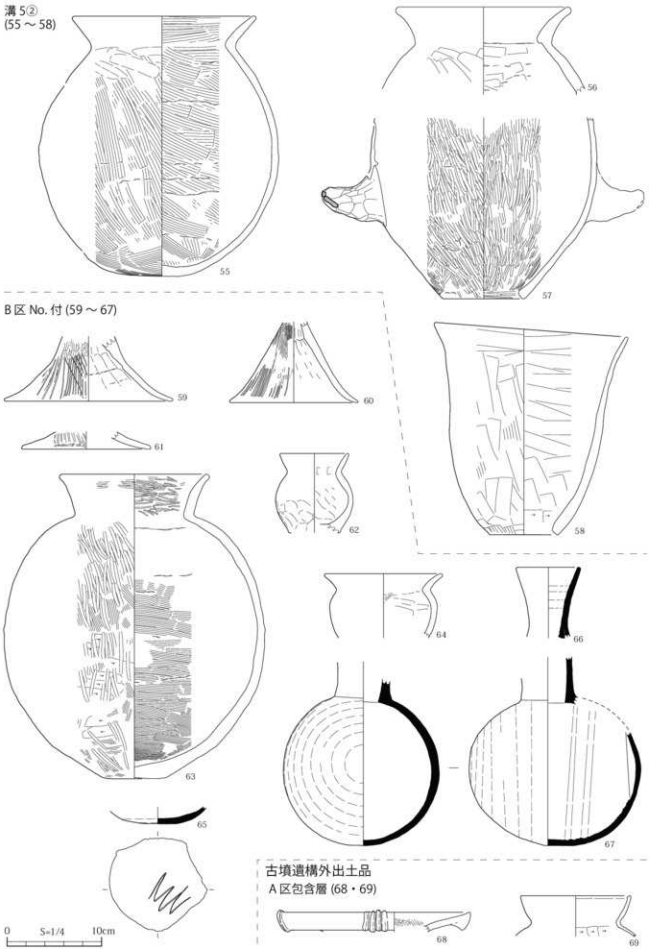
305 住下層 (39 ～ 42)



溝 5①(43 ～ 54)



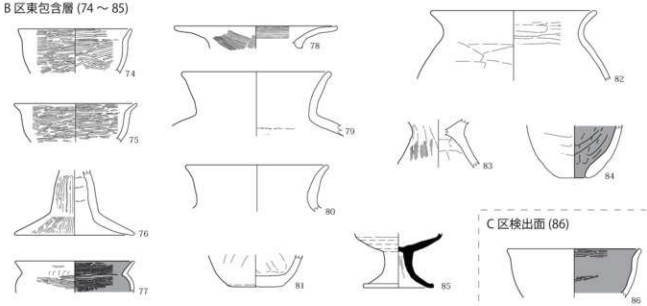
第 11 図　土器陶磁器実測図 (2)



第 12 図　土器陶磁器実測図 (3)

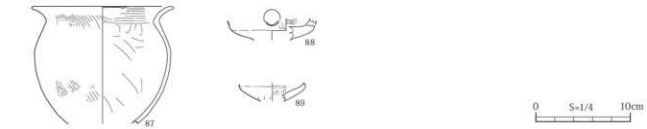
B 区西包含層 (70 ～ 73)

B 区東包含層 (74 ～ 85)



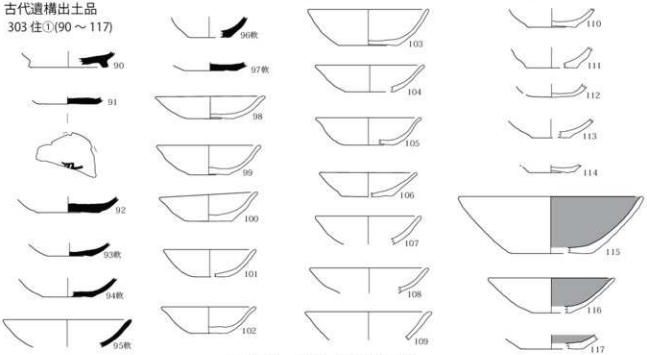
C 区検出面 (86)

他遺構混入 302 住 (87 ～ 89)



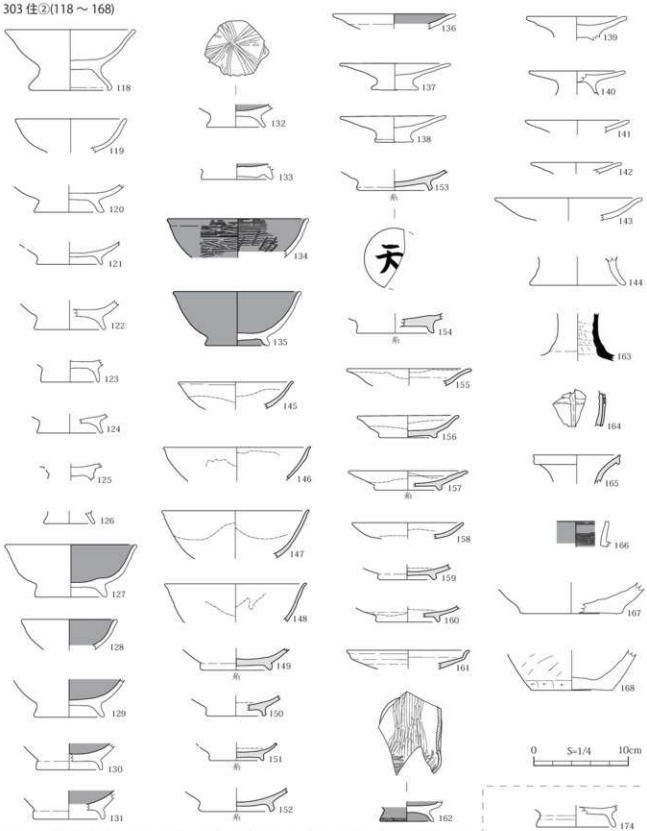
古代遺構出土品

303 住①(90 ～ 117)

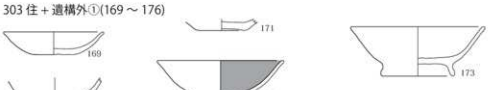


第 13 図　土器陶磁器実測図 (4)

303 住②(118 ～ 168)



303 住＋遺構外①(169 ～ 176)



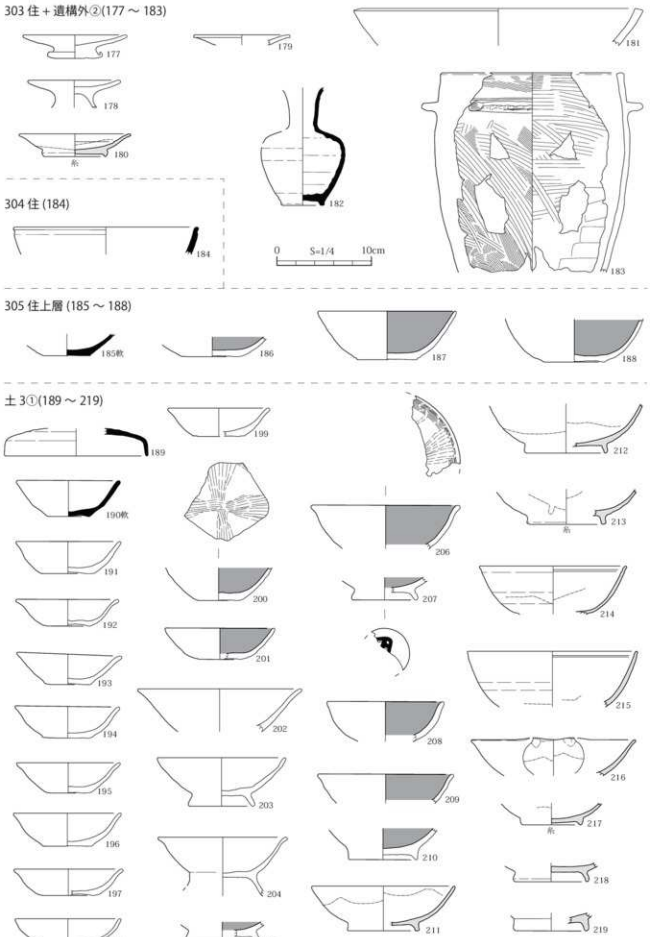
第 14 図　土器陶磁器実測図 (5)

303 住＋遺構外②(177 ～ 183)

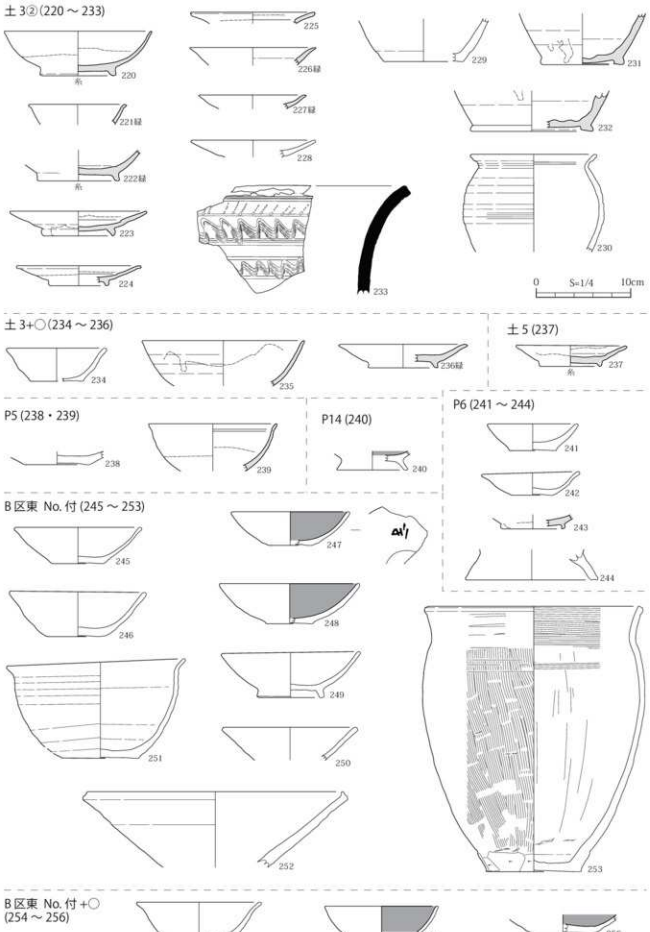
304 住 (184)

305 住上層 (185 ～ 188)

土 3①(189 ～ 219)

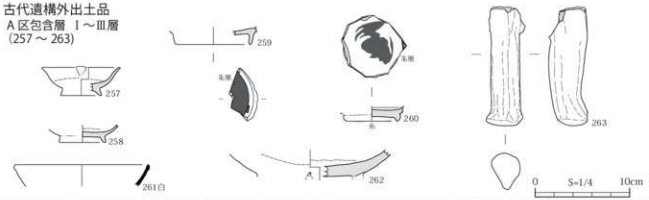


第 15 図　土器陶磁器実測図 (6)

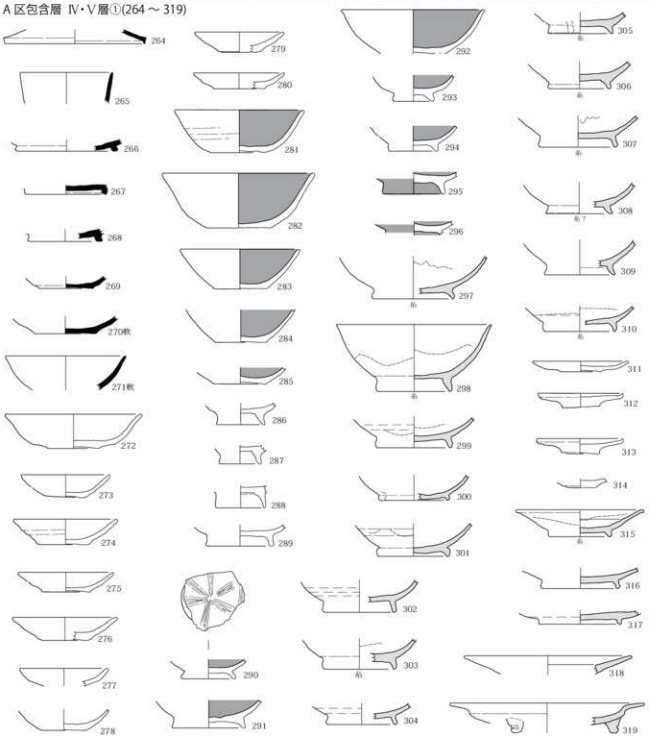


第 16 図　土器陶磁器実測図 (7)

古代遺構外出土品
A 区包含層 Ⅰ～Ⅲ層
(257 ～ 263)



A 区包含層 Ⅳ・Ⅴ層①(264 ～ 319)



第 17 図　土器陶磁器実測図 (8)

A 区包含層 Ⅳ・Ⅴ層②(320 ～ 337)

B 区西包含層 Ⅳ層 (338 ～ 343)

B 区西包含層 Ⅱ層 (344)

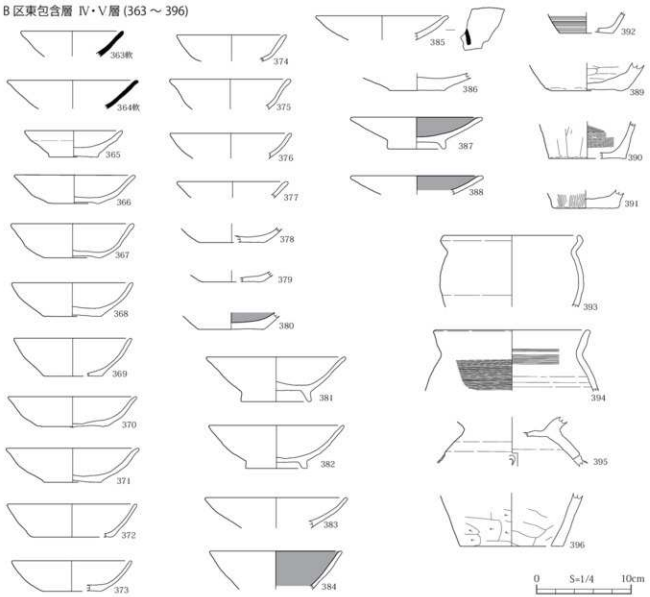
他遺構混入 301 竪 (345 ～ 359)

B 区東包含層 Ⅳ層 (360 ～ 362)

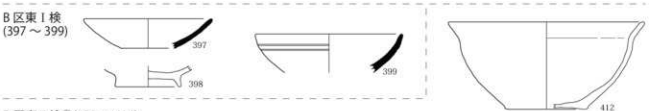
0 S=1/4 10cm

第 18 図　土器陶磁器実測図 (9)

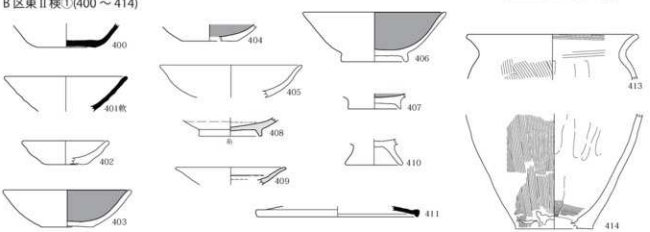
B 区東包含層 Ⅳ・Ⅴ層 (363 ～ 396)



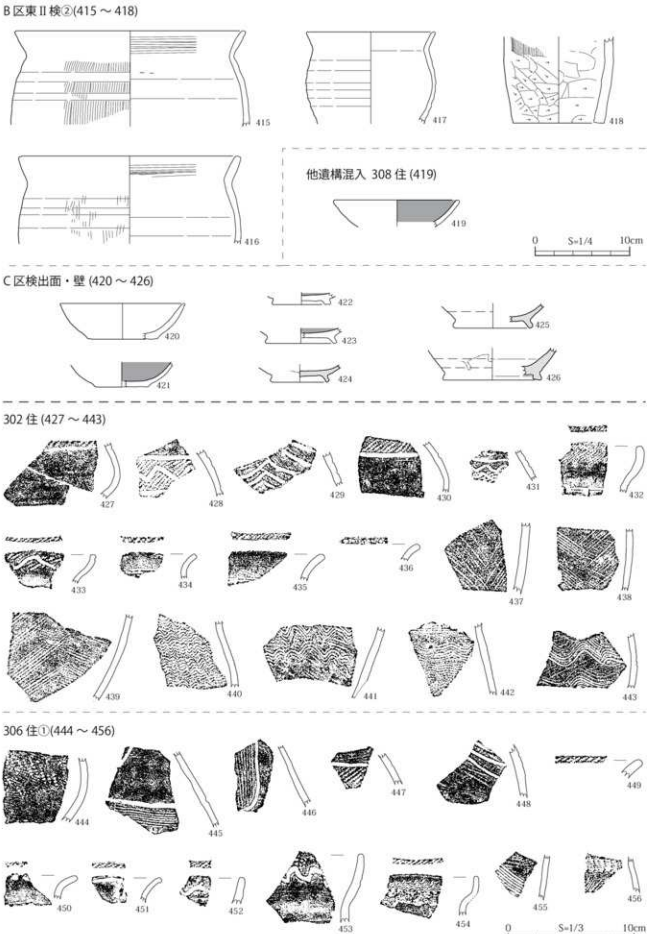
B 区東Ⅰ検
(397 ～ 399)



B 区東Ⅱ検①(400 ～ 414)

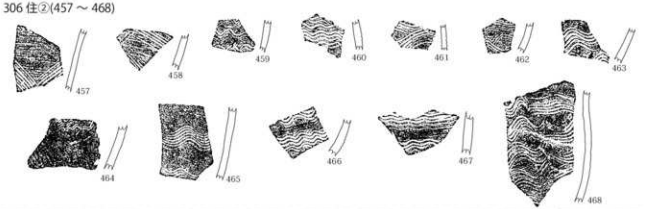


第 19 図　土器陶磁器実測図 (10)



第 20 図　土器陶磁器実測図 (11)・弥生土器拓影 (1)

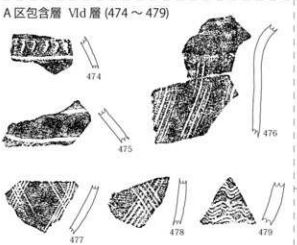
306 住②(457 ～ 468)



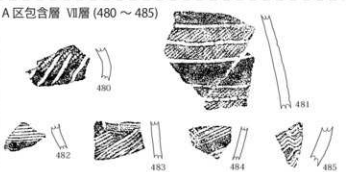
土 6 (469 ～ 471)

P3 (472・473)

A 区包含層 Ⅵd 層 (474 ～ 479)



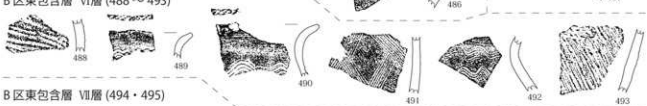
A 区包含層 Ⅶ層 (480 ～ 485)



A 区包含層混入 Ⅳ層 (486)

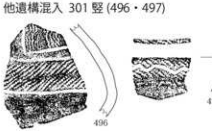
B 区東Ⅰ検 (487)

B 区東包含層 Ⅵ層 (488 ～ 493)



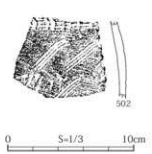
B 区東包含層 Ⅶ層 (494・495)

他遺構混入 301 竪 (496・497)

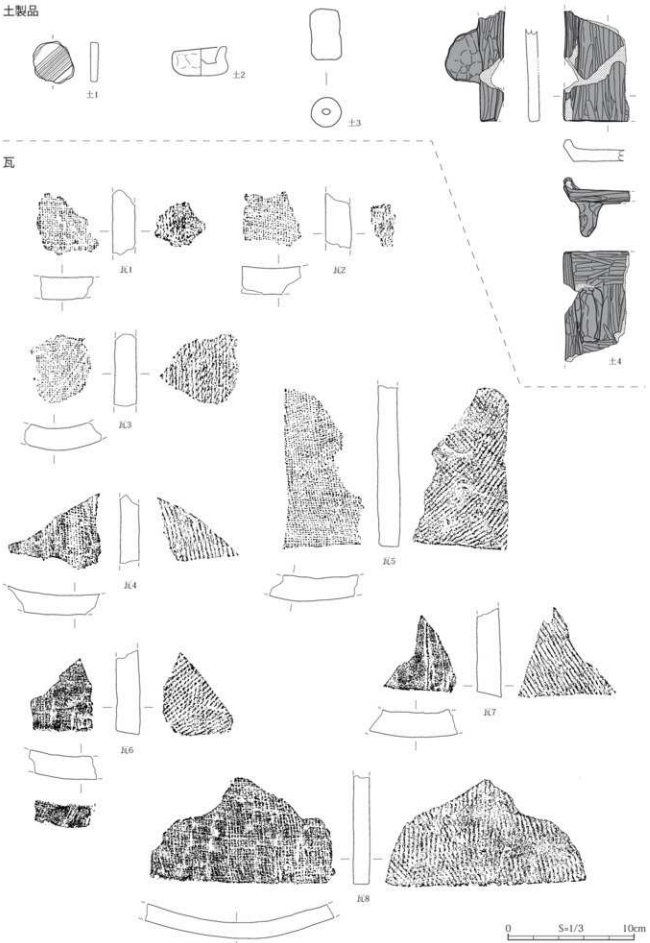


他遺構混入 土 3 (498 ～ 501)

他遺構混入 309 住 (502)



第 21 図　弥生土器拓影 (2)



第 22 図　土製品実測図・瓦拓影

3　石器・石製品（第23図、第10表）

今回の調査で、合計41点の石器・石製品が出土した。器種の内訳は、打製石鏃1点、石錐2点、磨製石鏃1点、大形刃器1点、磨製石斧1点、砥石11点、敲石1点、凹石2点、楔形石器2点、微細剥離ある剥片2点、石核3点、火打石1点、剥片12点、石板1点がある。このうち弥生・平安時代に帰属すると考えられ、遺存状態のよい定型石器・石製品を中心に13点を図示し、概要を述べる。それ以外のものは一覧表（第10表）を参照されたい。石器・石製品の帰属時期は共伴する土器に準じるものと考えられる。なお、実測図中における砥面範囲は、断面図に矢印を付し表現した。

打製石鏃（1）　黒曜石製の無茎凹基で、抉りは浅く、厚さは0.23㎝と薄手である。形状は縦長で、やや鋸歯状に加工されている。片脚部に欠損がみられるが、最大幅は脚部の下端ではなく胴部の下方にあると想定される。裏面よりも表面に細かい剥離が施されており、特に先端部は丁寧に加工され、若干丸みを帯びている。片脚部の破損部分には、打点を伴う剥離がみられるが、二次加工を施し再利用したとは考えにくい。破損時や廃棄時に、偶然剥離したと推測される。

石錐（2・3）　黒曜石製で、2は錐部の先端を、3は錐部全体を欠損している。2の平面形は棒状で、二次加工は錐部と基部に両面から行われているが、加工の量は少ない。錐部の両側縁には微細剥離痕があり、使用による刃こぼれと考えられる。3の形状は、基部の中央部が張り出してつまみ部を形成している。錐部は不明だが、基部には背面からの加工はわずかにしかみられない。腹面からの加工は頭部と両側縁に施され、特に頭部は剥離が顕著にみられる。2・3は、どちらも基部の細部調整はあまり行われておらず、厚みを持つ。

磨製石鏃（4）　チャート製の無茎凹基鏃の完形品である。穿孔は2ヵ所あり、1つは中軸線上のほぼ中央に、両面から穿孔し貫通している。もう1つはその下方に穿孔しているが、未貫通である。中部高地の磨製石鏃は、中央部下寄りに孔をもつ傾向があり、4もその位置に穿孔しようとしたが、何らかの事情により、片面から穿孔した状態で中止している。また、片側縁の一部には、面取りされた部分が残っており、刃付けの作業が不十分だったと考えられる。基部を形成する研磨は、両面から行われ、断面はV字状を呈している。なお、側縁の一部に剥離がみられるが、調整・加工の際ではなく使用時の剥離と推測される。

大形刃器（5）　頁岩製で板状の長方形を呈するが、刃部から側縁にかけて一部欠損している。剥離調整が短辺側より長辺側に細かく施され、断面形も身の薄い凸レンズ状をしており、打製石包丁の類である。刃部の調整は、主に腹面から細かい加工が施されている。背部は両面から加工されているが、細かい調整は少ない。刃部と欠損のない側縁に摩滅が顕著にみられるため、側縁も刃部調整をして使用した可能性がある。

磨製石斧（6）　蛇紋岩製の小形品で、刃部の大部分と片側縁を破損している。刃部の断面形は、片刃の弱凸強凸で扁平片刃石斧に分類される。残存する側縁や基部の一部に、成形時の剥離痕が残り、完全な研磨は行われていない。刃部と側縁の一部では使用による摩滅痕が観察される。なお、蛇紋岩は本遺跡周辺では採集できないため、原石～成品の段階のどこかで搬入されたものである。

砥石（7～11）　砥石は、合計11点出土し、弥生時代に属するものが2点、古墳時代に属するものが1点、古墳から平安時代に属するものが1点、平安時代以降に属するものが7点確認されている。石質から、仕上～中砥は5点、荒砥は6点に分類できる。図示した5点のうち、7・8・9は平安時代以降に属し、平面形・断面形が長方形の仕上砥である。肌理の細かい凝灰岩や頁岩を、四角柱状に整形加工し、使用している。砥面は平坦又は内湾しており、7・8には線条研磨痕が観察できる。10・11は、砂岩の自然礫を素材にし、荒砥として使用している。10は、平安時代に属し、砥面が1面だけのほぼ平坦な形状で、破損が大きく全形はうかがえない。中央部に研磨が集中し、縁辺部には一部自然面がみられる。11は、弥生時代の砥石で、手持ち砥石として、長側辺が砥面として特に使用されている。研磨は両面で行われ、側面と表裏面との間に面が形成されている。

敲石（12） 安山岩製で、下半部を欠損する握り槌状を呈する。端部に径 2.3cm、深さ 0.3cmに及ぶ強い敲打痕がみられ、石器の製作・加工に使用されたと考えられる。

凹石（13） 安山岩製の完形品で、円形の自然礫を素材にしている。表面に 1 ヵ所、ほぼ円形で径 6.74cm、深さ 2.12cmの大きな凹部を持っており、裏面には約 4.8cmの範囲に敲打痕がみられる。凹部は、成形時と使用時の敲打と研磨によって作られ、使用回数が重なるにつれ凹部は深くなっていった。敲打痕は、採集物（堅果類）の加工又は石器の製作によるものと推測される。

今回の調査で出土した石器・石製品では、弥生時代に属するものが多数確認できる。本遺跡の弥生時代の石器は、過去の調査では非実用的石器である装身具（勾玉・管玉など）が大量に出土している。しかし、今回の調査で出土した弥生時代の石器は、石核・剥片類を除けば、全て生産用具及び工具である。特に 11 は、本遺跡の過去調査で、同様の砥石が、磨製石鏃未成品と共伴しており、磨製石器製作用工具の可能性が高い。今回の調査でも、4 の磨製石鏃と同じ遺構から出土しており、磨製石器の製作に使用されていたと推測される。また、本遺跡の平安時代の石器・石製品では、鈴帯（巡方・丸鞆）が過去に出土している。しかし今回の調査では、平安時代に属するものは、石核・剥片を除けば、こちらも全て生産用具及び工具である。砥石は 6 点出土しており、7 には線条研磨痕がみられ、金属製品の研磨を行っていたと想定される。

ID	図No.	器種	出土場所 区1	区2	遺構	出土地点	石材	寸法 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	破損状況	備考
1	13	凹石	A	中	土 22		安山岩	16.65	15.33	9.81	2890.0	完形	平面形円形、断面形楕円形、敲部 1 面（φ 6.74cm・深さ 2.12cm）、敲打（裏面 1）
2		砥石	A	東	V 層上面	№ 2	頁岩	2.12	1.88	1.85	14.6	完形	立方体、砥面数 6、仕上砥、手持ち砥石
3		石板か	A	東	Ⅱ層		粘板岩	(4.66)	(2.88)	(0.43)	(6.4)	3/4 以上欠	
4		火打石か	A	東	Ⅱ層		チャート	3.07	2.98	2.07	18.4	完形	5 縁辺使用か
5		微細剥離ある剥片	A	東	Ⅱ層		黒曜石	2.56	2.07	0.81	4.5	完形	微細剥離 3 縁辺
6	1	打製石鏃	A	中	Ⅲ層		黒曜石	(2.50)	1.26	0.23	(0.7)	1/4 欠	無茎凹基鏃、片側部欠損、やや縦長気味
7	10	砥石	A	東	Ⅳ層		砂岩	(7.36)	(5.03)	(1.59)	(87.0)	3/4 以上欠	砥面数 1、荒砥
8		凹石	A	中	Ⅳ層		安山岩	11.13	9.38	7.92	1055.0	完形	平面形円形、断面形楕円形、敲部 1 面（φ 5.28cm・深さ 1.24cm）
9		砥石	A	西	Ⅳ層		砂岩	(4.23)	(3.90)	(0.83)	(23.1)	3/4 以上欠	砥面数 2、中～荒砥
10	6	磨製石斧	A	中	Ⅵ d 層		蛇紋岩	(9.19)	(5.61)	(1.28)	(91.4)	1/3 欠	扁平片刃石斧
11		剥片	A	中	Ⅵ d 層		黒曜石	2.80	1.72	0.81	3.1	完形	
12	5	大形刃器	A	中	Ⅵ層		頁岩	5.06	(7.88)	0.92	(56.9)	1/3 欠	平面形長方形、打製石包丁か
13		砥石	A	中	Ⅵ層		砂岩	(3.90)	2.63	(0.92)	(14.2)	1/3 欠	平面形長方形、断面形長方形、砥面数 1、中～荒砥
14		微細剥離ある剥片	A	中	Ⅵ層		黒曜石	2.44	1.49	0.53	1.1	完形	微細剥離 3 縁辺
15		剥片	A	中	Ⅵ層		黒曜石	2.24	1.91	0.82	3.2	完形	
16		剥片	A	中	Ⅵ層		黒曜石	1.59	1.12	0.51	0.6	完形	
17		剥片	A	中	Ⅵ層		黒曜石	2.61	2.18	0.74	2.7	完形	
18	7	砥石	B	西	301 竪	覆土内	凝灰岩	(7.37)	3.50	2.81	(91.2)	1/4 欠	平面形方形、断面形長方形、砥面数 4、仕上砥、線条研磨痕あり、被熱
19	9	砥石	B	西	301 竪	埋土	頁岩	13.48	3.26	(1.76)	(106.7)	1/3 欠	平面形長方形、断面形長方形、砥面数 2、仕上砥
20		石核	B	西	302 住	床面直上	黒曜石	2.61	1.76	0.87	3.7	完形	核素材
21		剥片	B	西	302 住	覆土内	黒曜石	1.96	1.53	0.63	1.2	完形	
22		剥片	B	西	302 住	覆土内	チャート	2.85	2.74	0.96	7.9	完形	
23		剥片	B	西	302 住	覆土内	緑色岩	6.30	4.96	0.74	19.2	完形	磨製石鏃の石材か
24		砥石	B	東	303 住	P2 覆土内	砂岩	(6.49)	(5.05)	0.70	(24.1)	1/3 欠	板状、砥面数 1、荒砥
25	11	砥石	B	東	306 住	3 層	砂岩	(8.89)	5.14	1.11	(78.6)	1/3 欠	板状、砥面数 2、荒砥
26	4	磨製石鏃	B	東	306 住	3 層	チャート か	2.10	1.84	0.21	1.1	完形	無茎凹基鏃、穿孔 2 ヵ所（φ 0.17cm・両面穿孔 / φ 0.14cm・未貫通深さ 0.06cm）
27		砥石か	B	東	308 住	床直上	頁岩	(8.97)	(1.90)	(0.58)	(11.1)	3/4 以上欠	砥面数 1、荒砥、被熱
28		剥片	B	西	土 3	覆土上層	黒曜石	1.98	1.70	0.81	1.8	完形	
29	2	石鏃	B	西	土 3	覆土内	黒曜石	(2.30)	1.14	0.77	(1.0)	1/4 欠	鏃部断面形三角形、つまみ部なし、鏃部先端欠
30	8	砥石	B	西	土 3	覆土内	凝灰岩	(9.03)	2.64	(2.61)	(88.1)	1/3 欠	平面形長方形、断面形長方形、砥面数 4、仕上砥、線条研磨痕あり
31	12	敲石	B	東	土 9		安山岩	(9.37)	(5.49)	(3.64)	(255.4)	1/2 欠	敲打痕 1 面
32	3	石鏃か	B	東	Ⅳ層		黒曜石	(2.16)	1.67	0.73	(2.8)	1/4 欠	鏃部欠
33		砥石	B	東	Ⅳ層		頁岩	17.81	4.86	2.05	192.7	完形	砥面数 1、仕上～中砥、転用品か
34		楔形石器	B	東	Ⅱ検		黒曜石	2.56	2.02	1.06	4.5	完形	上下端に打点
35		石核	B	西	Ⅳ層		黒曜石	3.07	2.28	1.83	15.4	完形	核素材、打面 3
36		剥片	B	西	Ⅴ層		黒曜石	3.33	1.72	1.01	3.9	完形	
37		楔形石器	A	中	Ⅵ d 層		黒曜石	2.32	1.46	0.82	2.9	完形	上下端に打点
38		剥片	A	中	Ⅵ d 層		黒曜石	2.04	1.23	0.49	0.8	完形	
39		剥片	A	中	Ⅵ d 層		黒曜石	1.79	1.37	0.32	0.4	完形	両極打撃による剥片
40		剥片	A	中	Ⅵ層		黒曜石	1.91	1.12	0.31	0.6	完形	両極打撃による剥片
41		石核	A	東	表土・撹乱		黒曜石	2.85	1.72	1.24	4.3	完形	核素材、打面 2、表面風化

※（ ）内数値は残存値を表す。
※ 1,200g 未満は 0.1g 単位。

第 10 表　石器一覧

第 23 図　石器・石製品実測図

4　金属製品（第 24 図、第 11 表、写真図版 14）

(1) 概要

金属製品は 51 点出土した。その内訳は、鉄製品 47 点、銅製品 2 点、銭貨 2 点である。その他、鉄滓が 1,112.0g 出土している。これらの出土地点・品種・寸法等については一覧表（第 11 表）を参照されたい。なお、一部の製品については銹化による損傷が著しく、計測ができなかった。

品種は、鉄製品が釘・刀子・鏃・紡錘車・その他不明品、銅製品が銭貨・煙管・その他不明品である。そのうち比較的残存状態が良好なもの、特徴的なものを中心に 19 点を図示し、写真掲載した（第 24 図、写真図版 14）。本文における遺物の記載にあたっては図番号を使用している。また、形状等についてはX線撮影を行っていないため、目視による現状を記載している。なお、本調査で得られた遺物のほとんどは銹化による膨張が著しく、全形をうかがえるものが少なかった。

(2) 鉄製品

釘（1 ～ 6）　12 点が出土し、6 点を図示している。10 点は断面が方形もしくは長方形の和釘、2 点は丸釘である。小松氏により頭部形状から釘の分類（小松 1989 文献 3、以下同様）が行われているが、銹化による膨張で形状は不明瞭なものが多く、分類が困難である。よって現状で推定可能な遺物のみについて述べたい。1 ～ 6 は脚部上端を叩きのばしてから曲げられており、断面が方形であるが、鏃の使用の有無が不明なためⅣ a 類もしくはⅤ a 類と推測される。

刀子（7 ～ 9）　5 点が出土し、身部と茎部が残る 3 点を図示している。小松氏による大きさの分類では、7・8 は中型、9 は小型にあたると考えられる。7・9 は関の有無が不明であるが、8 は刃側にわずかな膨らみをもち、棟関をもつ。

鏃（10 ～ 12）　5 点が出土し、3 点を図示している。小松氏により、形状の分類が行われているため、現状から分類を試みる。10 は欠損と銹化による膨張が著しいが、形状から判断するとⅦ b 類もしくはⅦ c 類の可能性が高い。11 は身部平面が長三角形で撥状を呈しているため、Ⅶ c 類と推定される。12 は頸部が欠けるが、身部平面が長三角形で逆刺をもつため、Ⅶ a 類と推定される。

紡錘車（13）　1 点が出土し、図示している。輪部の断面は上面のみ外側に膨らみ下面は平らな弓状である。小松氏による分類のうち、b 類に属すると推定される。

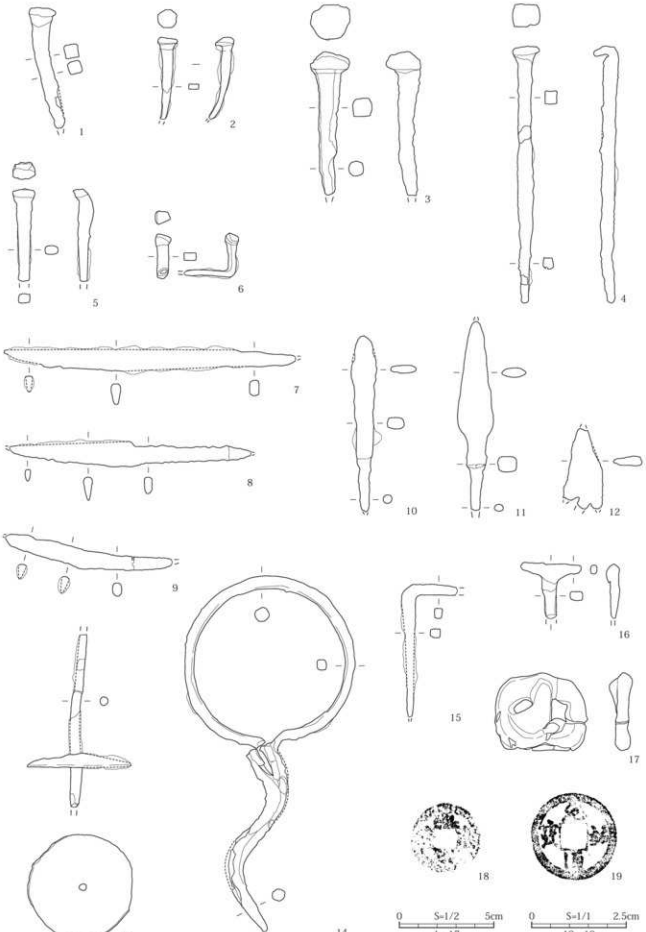
不明（14 ～ 17）　17 点が出土し、4 点を図示している。14 は環状に曲げられ、先端が尖る棒状の軸部を伴うが、環部から軸部につながる部分が銹化により割れている。15 は断面が長方形の棒状製品で、先端が尖り、L 字状に曲がる。16 は T 字状を呈し、形状から鈹具の刺金に似るが、T 字の縦軸が幅を減じずに欠けているため、その長短が不明である。17 は角丸長方形の枠の中央に棒状の仕切りのようなものが伸び、その先端が枠の上面に載っている。

(3) 銭貨

銅銭（18・19）　2 点が出土し、図示している。内訳は延喜通宝が 1 点、元祐通宝が 1 点である。18 は銹化により文字の摩耗が著しいが、遺物の大きさと、「延」の「えんにょう」部分が確認できることから延喜通宝と推測した。延喜通宝は延喜 7 年（907）11 月に日本で鋳造された銭貨で、皇朝十二銭の 11 番目である。県町遺跡で皇朝十二銭が出土した例は、平成 8 年に行われた第 11 次調査で隆平永宝が出土した例に次いで 2 例目である。また、市内で延喜通宝が出土した例は昭和 63 年の三間沢川左岸遺跡（5 点）、平成 7 年の川西開田遺跡（1 点）に次いで 7 例目である。19 の元祐通宝は初鋳 1086 年の宋銭である。

ID	図No.	調査区	検出面	遺構	出土地点	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	金属種別	備考
1		A 東	I	—	Ⅲ層	不明	76.8	23.2	12.2	32.4	Fe	断面方形の棒状製品／片側が膨らむ
2		A 東	I	—	Ⅲ層	不明	80.3	23.8	22.1	65.1	Fe	断面円形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
3		A 東	I	—	Ⅲ層	浄	—	—	—	141.0	Fe	
4	7	A 東	I	—	Ⅲ層	刀子	154.0	12.3	6.5	23.2	Fe	茎部わずかに欠
5		A 東	I	—	Ⅲ層　東部	浄	—	—	—	250.0	Fe	
6		A 東	I	—	Ⅲ層　東部	浄	—	—	—	96.1	Fe	
7		A 東	I	—	Ⅳ層　西部	浄	—	—	—	47.1	Fe	
8		A 東	I	—	Ⅳ層　西部	不明	36.2	5.6	5.0	1.6	Fe	棒状製品／銹化による膨張で断面不明
9		A 東	I	—	Ⅲ層　東部	浄	—	—	—	139.1	Fe	
10		A 東	I	—	Ⅱb層	煙管	59.3	10.7	10.3	6.0	Cu	吸口
11		A 中	I	—	Ⅳ層　東部	刀子	53.1	14.6	6.2	8.3	Fe	切先の一部か
12		A 中	I	—	Ⅳ層　東部	不明	66.8	9.9	9.0	10.7	Fe	棒状製品／銹化による膨張で断面不明
13	10	A 東	I	—	Ⅳ層	鏃	92.8	14.0	6.2	15.4	Fe	身部、茎部わずかに欠
14	8	A 東	I	—	Ⅳ層	刀子	125.8	13.6	5.2	14.9	Fe	身部、茎部わずかに欠
15	14	A 東	I	—	Ⅱb層	不明	198.0	90.1	7.6	61.8	Fe	断面円形の環状製品／棒状の軸部をもつ
16	11	A 中	—	—	西部	鏃	99.4	19.0	7.0	19.2	Fe	身部、茎部わずかに欠
17	13	A 中	I	—	Ⅳ層　東部	結縛車	90.5	57.4	56.0	51.8	Fe	結縛先端欠
18		A 中	I	—	Ⅳ層下部　西部　下部	刀子か	76.6	21.6	9.1	22.1	Fe	形状は刀子に似るが、銹化による膨張で刃部の有無が不明
19		A 東	I	検出面	—	不明	68.3	11.0	5.4	7.5	Fe	断面長方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
20	1	A 東	I	検出面	—	釘	63.9	13.2	11.6	14.4	Fe	脚部先端欠
21		B 西	I	—	Ⅳ層	浄	—	—	—	54.7	Fe	
22		B 西	I	301 竪	—	釘か	40.2	7.0	6.5	3.0	Fe	断面方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
23	19	B 西	I	301 竪	—	元祐通宝	23.4	23.0	1.1	3.5	Cu	完形／初鋳 1086 年
24	2	B 西	I	301 竪	—	釘	44.5	12.0	9.1	5.0	Fe	脚部先端欠
25	4	B 東(1)	I	303 住	東部	釘	134.5	13.3	13.2	27.5	Fe	完形／断面方形
26	18	B 東(2)	Ⅱ	—	Ⅴ層　上面	延喜通宝	19.6	19.0	1.9	1.6	Cu	わずかに欠／初鋳 907 年（醍醐天皇）
27		B 西	Ⅲ	302 住	—	浄	—	—	—	1.9	Fe	
28		B 東(1)	I	303 住	床直上	釘か	41.1	8.3	5.7	3.6	Fe	断面長方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
29		B 東(1)	I	303 住	南東部	浄	—	—	—	25.8	Fe	
30		B 東(1)	I	303 住	南東部	浄	—	—	—	21.7	Fe	
31		B 東(2)	I	303 住	—	鏃	51.8	15.7	5.2	6.4	Fe	茎部欠
32		B 東(2)	I	303 住	—	釘か	53.5	7.7	7.2	4.7	Fe	断面方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
33		B 東(1)	I	303 住		浄	—	—	—	13.7	Fe	
34		B 東(1)	I	303 住	北東部	浄	—	—	—	26.7	Fe	
35		B 東(1)	I	303 住	北東部	浄	—	—	—	60.8	Fe	
36		B 西	I	土 3	上層	不明	38.7	24.4	6.5	10.5	Fe	板状製品
37		B 西	I	土 3	上層	釘か	32.2	5.3	5.2	1.8	Fe	棒状製品／銹化による膨張で断面不明
38		B 西	I	土 3	上層	浄	—	—	—	13.2	Fe	
39		B 東(1)	I	—	Ⅳ層　中央部	浄	—	—	—	8.0	Fe	
40		B 東(1)	I	—	Ⅳ層　中央部	浄	—	—	—	2.0	Fe	
41		B 東	I	—	Ⅳ層　西部	浄	—	—	—	39.0	Fe	
42	3	B 東(1)	I	—	Ⅳ層　中央部	釘	75.8	21.9	18.5	21.4	Fe	脚部先端欠
43	15	B 東(1)	I・Ⅱ	—	Ⅳ層下部～Ⅴ層上面	不明	70.2	29.4	6.0	11.0	Fe	断面長方形の棒状製品／L 字状に曲がる
44	5	B 東(1)	I	303 住	床直上	釘	48.8	11.7	7.7	9.3	Fe	脚部欠
45		B 東(1)	I	303 住	床直上	不明	23.4	14.7	10.5	4.5	Cu	不整形の銅塊
46		B 東(1)	I	303 住	床直上	浄	—	—	—	40.4	Fe	
47		B 東(2)	Ⅱ	—	Ⅴ層　東部	釘	52.3	9.0	7.6	3.5	Fe	脚部先端欠／丸釘
48		B 東(2)	I・Ⅱ	—	Ⅳ層下部～Ⅴ層上面	釘か	41.0	9.2	6.6	4.8	Fe	断面長方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
49		B 西	I	301 竪	—	釘	—	—	—	4.3	Fe	銹化による損傷が著しく、計測不可／断面方形／頭部確認
50	17	B 西	I	301 竪	—	不明	49.0	41.1	12.8	40.3	Fe	銹化による損傷が著しい／角丸長方形の鉄製品
51		B 西	I	301 竪	—	鏃	84.8	24.7	9.5	22.8	Fe	茎部欠／身部刺創
52		B 西	I	301 竪	—	不明	18.5	6.3	5.6	0.8	Fe	棒状製品／銹化による膨張で断面不明
53		B 西	I	土 3	上層	浄	—	—	—	35.8	Fe	
54		B 西	I	土 3	—	釘	34.5	6.8	6.7	1.6	Fe	脚部先端欠
55		A 東	I	—	Ⅲ層	不明	17.8	12.2	7.0	2.2	Fe	板状製品
56	16	A 東	I	—	Ⅳ層	不明	29.9	34.0	7.2	6.0	Fe	T 字状製品
57		A 東	I	—	Ⅳ層	釘	62.3	9.0	8.7	8.5	Fe	完形／断面方形
58		A 東	I	—	Ⅳ層	不明	39.7	8.3	6.8	3.1	Fe	断面長方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
59		A 東	I	—	Ⅳ層	不明	42.7	6.6	3.1	2.4	Fe	棒状製品／断面は部位により長方形と方形で異なる
60	6	A 東	I	—	Ⅱ層　東部	釘	51.0	9.6	7.9	4.5	Fe	脚部先端わずかに欠／断面長方形／L 字形に曲がる
61	12	A 東	I	—	Ⅱb層	鏃	42.3	20.8	7.2	8.0	Fe	身部、茎部欠
62		A 東	I	—	Ⅱb層	不明	37.8	24.0	7.1	15.5	Fe	板状製品
63	9	A 中	I	—	Ⅳ層　東部	刀子	88.5	9.4	5.7	8.8	Fe	身部、茎部わずかに欠
64		A 中	I	—	Ⅳ層	釘か	29.6	8.8	7.9	2.7	Fe	断面方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
65		A 中	I	—	Ⅳ層	浄	—	—	—	2.1	Fe	
66		A 中	I・Ⅱ	—	Ⅳ層下部～Ⅴ層最上部	釘	62.5	11.1	9.1	9.7	Fe	脚部先端わずかに欠／断面方形
67		A 中	I	検出面	東部	浄	—	—	—	34.4	Fe	
68		A 中	I	検出面	—	刀子	93.9	11.6	8.2	17.7	Fe	切先、茎部欠
69		A 中	I	検出面		不明	52.6	8.3	7.6	5.8	Fe	棒状製品／銹化による膨張で断面不明
70		A 中	I	—	Ⅳ層	不明	49.2	17.1	8.6	11.6	Fe	断面方形の棒状製品／片側が膨らむ
71		A 中	Ⅱ	—	Ⅴa 層	浄	—	—	—	27.8	Fe	
72		A 西	I	検出面	西部	浄か	—	—	—	26.8	不明	
73		B 東(1)	I	303 住	南東部	浄	—	—	—	3.9	Fe	
74		C	—	壁面	—	釘	52.9	5.6	5.4	1.7	Fe	完形／丸釘

第 11 表　金属製品一覧



第 24 図　金属製品実測図・拓影

5　鍛冶遺物（第 11・12 表）

(1) 鉄滓

鉄滓は重量 1,112.0g が出土したが、出土箇所には偏りがみられる。最も多いものはＡ区東の東部Ⅲ層（346.1g）で、Ｂ区東⑴の 303 住（193.0g）、Ａ区東のⅢ層（141.0g）、Ａ区東の西部Ⅲ層（139.1g）と続く。それぞれの出土地点・重量等については一覧表（第 11 表）を参照されたい。

(2) 鍛冶関連微細遺物

今回の調査では、303 住の貼り床直下で炉跡を検出した。炉内埋土と炉西側床面直上土（貼り床最下部～その直下層最上部）の２種類の土を採取し、水洗と選別を行ったところ、鍛冶関連微細遺物（鍛造剥片、粒状滓、不定形極小滓、小鉄片）が確認された。今回得られた鍛冶関連微細遺物の数量・特徴等については一覧表（第 12 表）を参照されたい。

種類	採取土	重量(g)	点数	最大長(mm)	特徴
鍛造剥片	炉内埋土	0.4	―	5.0 ～ 0.5	非常に薄い極細片（推定 0.1m 以下）。わずかに青みがかった灰色を呈し、光沢をもつものもある。すべての個体が磁着する。
	炉西側床面直上土	0.1	―	3.0 ～ 0.5	
粒状滓	炉内埋土	1.3	23	8.0 ～ 0.5	球状ないし長球状を呈する。半球状部からバリ状部が伸びるもの、不整な球状が複数結合したようなもの等を含む。ほとんどの個体が磁着する。
	炉西側床面直上土	1.1	4	10.0 ～ 4.0	
不定形極小滓	炉内埋土	1.8	14	13.0 ～ 4.0	不整形で、球状・半球状部分がない。ほとんどの個体が磁着する。
	炉西側床面直上土	0.4	6	7.0 ～ 3.0	
小鉄片	炉西側床面直上土	0.2	1	12.0	厚さ 1mm程度。三角形状を呈する。磁着する。

第 12 表　鍛冶関連微細遺物一覧

6　その他の遺物（第 13 表）

骨類と炭化物がある。骨類は 303 住、土３と包含層からの出土だが土器の洗浄中に確認されたものが多く、出土状況が把握できているものは少ない。大型の歯は馬などの動物のものとみられる。炭化物は 303 住の鍛冶炉に関連する微細遺物の水洗選別中に確認した炭化種実である。形態は概ね長球状を呈し、相対的に短く両端が丸いものと、長く片方の先端が尖る形状の２種があるようにみえる。正式な鑑定は未了だが前者はコメ、後者はムギであろうか。鍛冶炉と直接の関係はないと考えるが、由来を検討する必要があろう。水洗では炭化草木の微細破片や正体不明の極微細炭化物も多く確認されたが、微量のため計量していない。

№	地区	地点・層位	種別	内容	重量(g)	その他・備考
1	Ａ	Ⅱ層	骨類	脊椎？１点	3.8	土器洗浄中に検出
2	Ａ	Ⅳ層	骨類	馬歯？１点（細片に破砕）	9.5	
3	Ａ	Ⅳ層	骨類	馬歯？１点（９片に破砕）	16.7	
4	Ａ	Ⅳ層	骨類	馬歯？１点	14.8	
5	Ｂ東	303 住カマド１	骨類	馬歯？１点	7.9	土器洗浄中に検出
6	Ｂ東	303 住	骨類	馬歯？１点、骨片４点、骨片細片９点	5.6	土器洗浄中に検出
7	Ｂ東	303 住	骨類	骨片（骨端）１点	1.5	土器洗浄中に検出。焼骨か？
8	Ｂ西	土３	骨類	骨片１点	1.1	土器洗浄中に検出
9	Ｂ西	Ⅳ層	骨類	馬歯？１点	49.2	
10	Ｂ東	Ⅳ層	骨類	馬骨？（20 点ほどの中小片に破砕）	60.1	焼骨
11	Ｂ東	Ⅴ層	骨類	骨片１点	0.2	土器洗浄中に検出
12	Ｂ東	303 住鍛冶炉	炭化物	種実 26 粒	0.1	概ね長球状を呈する。米と麦か？
13	Ｂ東	303 住鍛冶炉	炭化物	種実 46 粒	0.2	概ね長球状を呈する。米と麦か？

第 13 表　その他の遺物一覧

第Ⅳ章　総括

今回の調査では幅 7m ほどの道路拡幅部分という狭小な調査範囲から、弥生時代後期、古墳時代前・中期、平安時代、中世の遺構が重層的に検出され、遺構内だけでなく包含層から土器・陶磁器を中心に多量の遺物が出土した。これは本遺跡が長期にわたる集落址であることを、以前の調査成果と同様に確認できた内容であった。その中で特記すべきいくつかの点について触れ、総括としたい。

① 複数の遺構検出面の設定

これまでの県町遺跡の調査では、弥生時代から中世までの遺構が発見されているが、各時代の層位的な関係について明確になった調査地点は少ない。その点で今回は弥生中期後半、古墳前・中期、平安、中世（平安と中世は同一検出面）の 4 時期の遺構が確認され、しかも洪水層（FL 層）を挟んで、それぞれの時期の遺構掘り込み面レベルを推定できる基本層序を定めることができた（Ⅲ章 1 節 3）。広大な県町遺跡の範囲の中では地点によって層位と時期の関係は様々であろうが、今回はその典型例のひとつともいえ、今後の調査の指針になろう。

② 遺跡西端部の様相の確認

今回の調査対象地は東西に長く、西端部（A 区西小区）は遺跡範囲の西縁に近かったため、その一帯での遺跡の状況を確認することができた。A 区の遺構は、古代では点在した 2 基の土坑、弥生時代では土坑 1 基、ピット 2 基、溝 1 条のみであり、その分布はいずれも A 区中小区までであり、西小区では遺構を確認しなかった。西に向かって遺構密度は希薄となり、集落外に至るものと考えたい。集落外縁部のイメージとして普遍的な想定であろう。その一方で、A 区では重厚な遺物包含層が形成されており、古代の土器類が多量に出土した（A 区遺構外出土 127.0kg）。明確な遺構が少ないにもかかわらず多量の遺物を伴うという状況をどのように理解するかが、今後の課題のひとつといえる。

③ 古墳時代の遺構分布範囲

本遺跡では、古墳時代中期の遺構は限られた地点でのみ発見されており（5・17・20 次調査）、分布範囲の特定がひとつの課題であった。今回の調査では、東端部の B 区で確認した 308・309 住、溝 5 と、その出土土器は良好な資料となった。従来の想定エリアを南西方向に大きく広げるものとして注目される。さらに溝 5 は平面形が弧状を呈し、覆土からは、高杯・小型丸底土器などがある程度のまとまりを持って出土した。全体形が不明なため確実ではないが、小規模な古墳の周溝の底部である可能性もある。これについては今後検討をしていく必要がある。

④ 中世の遺構・遺物

本遺跡での中世の遺構・遺物の検出は古代に比べて極めて少なく、遺構は 12 次で竪穴状遺構・土坑、13 次で土坑、14 次で竪穴状遺構が確認されたのみで、遺物もこれらに伴った内耳土器、土師質土器、青磁、古瀬戸などの破片、宋銭 11 点に限られ、それぞれ 12 世紀後半～ 15 世紀の中で位置づけられていた。今回発見の 301 竪は希少な中世遺構の追加例となったが、明らかな帰属遺物は床面付近から出土した宋銭（元祐通宝）のみなので、これ以上の時期の絞り込みは難しい。それ以外で確認できる中世の遺物は 13 世紀とみられる土師質土器皿と青磁小片のみであった。

⑤ 遺構検出が困難な遺跡

今回の調査地は、時期の異なる遺構が複数の検出面に掘り込まれて存在しており、それらの間には洪水層（砂層・砂礫層）が発達し、わずかな距離を隔てて土質が異なるような安定しない検出面が続いた。本遺跡の過去の調査でも、例えば 12 次調査では弥生時代中期の遺構よりも平安時代の遺構がレベル的に低い部分から検出されるという、一見すると時代と層位が逆転するような現象もみられ、技術的に調査の難しい遺跡

といえる。今回は、さらに近世以降の開発による撹乱が多く、加えて特にB区では狭小な調査区を設定せざるを得なかったため、広い視野での遺構検出は困難を極めた。そのため、調査中での判断が難しく、遺物整理をしていく段階の中で最終的な見解が導き出された部分も少なからずあった。

おわりに

以上、今回の調査成果や課題を簡単にまとめてみたが、上記⑤のように遺構確認が難しい遺跡で、その実体をどこまで把握できたか心許ない部分も少なくない。その一方で①～④のような成果もあり、特に古墳時代の集落の確認は大きなものといえよう。今後も行われる本遺跡での調査にとって大いに参考になるものと思われる。

最後に、調査に際して多大なご協力をいただいた地元の皆様、長野県松本建設事務所の皆様、そしてコロナ禍の真夏という厳しい状況の中で作業に従事していただいた皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

参考文献

1　金関 恕、佐原 眞 編 1985『弥生文化の研究５道具と技術Ⅰ』雄山閣
2　原 明芳 1989「吉田川西遺跡にみられる食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２－吉田川西遺跡』長野県教育委員会、㈶長野県埋蔵文化財センター
3　小松 望 1989「金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２－吉田川西遺跡』長野県教育委員会、㈶長野県埋蔵文化財センター
4　小平和夫 1990「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－総論編』長野県教育委員会、㈶長野県埋蔵文化財センター
5　馬場伸一郎 2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 145 集
6　原 明芳 2017「佐久平の古代末期から中世」『長野県考古学会誌』153
7　松本市教育委員会 1981『松本市文化財調査報告№ 19 長野県松本市あがた遺跡発掘調査報告書』
8　松本市教育委員会 1990『松本市文化財調査報告№ 82 松本市県町遺跡－緊急発掘調査報告書－』
9　松本市教育委員会 1993『松本市文化財調査報告№ 108 松本市百瀬遺跡Ⅱ－緊急発掘調査報告書－』
10　松本市教育委員会 1997『松本市文化財調査報告№ 128 松本市県町遺跡Ⅺ－緊急発掘調査報告書－』
11　松本市教育委員会 2003『松本市文化財調査報告№ 165 松本市県町遺跡Ⅻ－緊急発掘調査報告書－』
12　松本市教育委員会 2009『松本市文化財調査報告№ 200 長野県松本市 県町遺跡－第 14 次発掘調査報告書－』
13　松本市教育委員会 2012『松本市文化財調査報告№ 209 長野県松本市 横田古屋敷遺跡－第１・２次発掘調査報告書－』
14　松本市教育委員会 2014『松本市文化財調査報告№ 213 長野県松本市 県町遺跡－第 15 次発掘調査報告書－』
15　松本市教育委員会 2014『松本市文化財調査報告№ 214 長野県松本市 新井遺跡－第２次発掘調査報告書－』
16　松本市教育委員会 2017『長野県松本市 県町遺跡－第 16・17 次発掘調査概要報告書－』
17　松本市教育委員会 2017『松本市文化財調査報告№ 226 長野県松本市 三間沢川左岸遺跡－発掘調査報告書－』

※各章・節の原稿作成にあたり参考にした主な文献番号は以下のとおり。

Ⅱ・Ⅳ章：7・8・10 ～ 12・14・16、Ⅲ章３節１：2・4 ～ 6、同３：1・9・13・15・17、同４：3

写真図版 1

昭和 23 年撮影　県町遺跡一帯の航空写真、 左上は女鳥羽川、下は薄川、今回調査地はほぼ中央部

平成 23 年撮影　同上、各次調査地の正確な位置は第 2 図 (5 頁) 参照

調査区全景航空写真　A 区 (西から)　奥はあがたの森 (旧制松高)

調査区全景航空写真　B 区 (上が西)

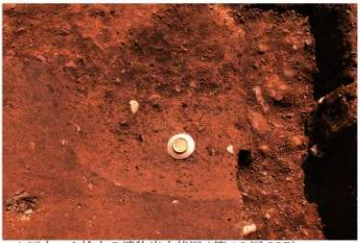
調査開始　A 区 (東から)

A 区中　Ⅰ検検出状況 (東から)

A 区東　Ⅰ検検出作業 (東から)

A 区中　Ⅰ検完掘状況 (近世～近代土坑)

A 区中　Ⅰ検検出状況 (東から)



A 区中　Ⅰ検土 5 遺物出土状況 (第 16 図 237)

A 区東　Ⅰ検遺物出土状況 (包含層遺物)

A 区中 (部分)　Ⅲ検完掘状況 (東から)

A 区中　Ⅲ検完掘状況・手前は薄川氾濫による FL 層 (東から)

A 区中　Ⅲ検土 6 遺物出土状況 (第 10 図 15)

A 区中　Ⅲ検土 6 完掘状況

A 区西　Ⅰ検検出状況 (東から)

A 区西　Ⅲ検検出状況 (東から)

B 区西　1・Ⅲ検完掘状況　手前から土 3(古代)・301 竪 (中世)・302 住 (弥生)　東から

B 区西　Ⅲ検 302 住完掘状況 (東半部)

B 区西　Ⅲ検 302 住東半部遺物出土状況 (第 10 図 5)

B 区西　Ⅲ検 302 住完掘状況 (西半部)

B 区西　Ⅲ検 302 住検出状況 (西半部)

B 区西　Ⅰ検 301 竪穴掘状況　6 個の礎石がある (北から)

B 区西　Ⅰ検 301 竪礎石除去後 (南から)

B 区西　Ⅰ検 301 竪銭貨 (元祐通宝) 出土状況

B 区西　Ⅰ検土 3 完掘状況 (西から)

B 区西　Ⅰ検土 3 緑釉等出土状況 (西から)

B 区東 (1)　Ⅰ検完掘状況 (東から)

B 区東 (1)　Ⅰ検 303 住完掘状況 (東から)

B 区東 (1)　Ⅰ検 303 住鍛冶炉

B 区東 (1)　Ⅰ検 303 住カマド 1

B 区東 (1)　Ⅰ検 303 住カマド 2

B 区東 (1)　Ⅱ検溝 5 遺物・礫出土状況 (東から)

B 区東 (1)　Ⅱ検溝 5 完掘状況 (東から)

B 区東 (1)　Ⅱ検溝 5 遺物出土状況詳細 1(第 11 図 50・51・53)

B 区東 (1)　Ⅱ検溝 5 遺物出土状況詳細 2 (第 11 図 49)

B 区東 (1)　Ⅱ検溝 5 遺物出土状況詳細 3(第 11 図 52)

B 区東 (2)　Ⅱ検完掘状況 (航空写真)

B 区東 (2)　Ⅱ検 308 住完掘状況 (東から)

B 区東 (2)　Ⅱ検 308 住炉完掘状況

B 区東 (2)　Ⅱ検遺物出土状況 (第 11 図 30)

B 区東 (2)　Ⅲ検完掘状況 (西から)

B 区東 (2)　Ⅲ検完掘状況 (東から)

B 区東 (2)　Ⅲ検 306 住完掘状況 (東から)

B 区東 (2)　Ⅲ検 306 住遺物出土状況 (第 10 図 12)

B 区東 (2)　Ⅲ検調査区北壁の地震による地割れライン

B 区東 (2)　Ⅲ検 P20 完掘状況

C区　Ⅰ検完掘状況 (西から)

C区　Ⅰ検 305 住遺物出土状況 (南から)

C区　Ⅰ検 305 住完掘状況 (南から)

C区　Ⅰ検 305 住遺物出土状況 (土師器甕ほか)

C区　Ⅰ検下 FL 層堆積確認状況 (南から)

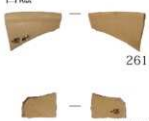
緑釉陶器 (A 区出土)

緑釉陶器 (B 区出土①)

緑釉陶器 (B 区出土②)

風字硯 (土製品 土 4)

白磁



(写真掲載のみ)

黒数字…実測図番号
青数字…緑釉表記載の番号

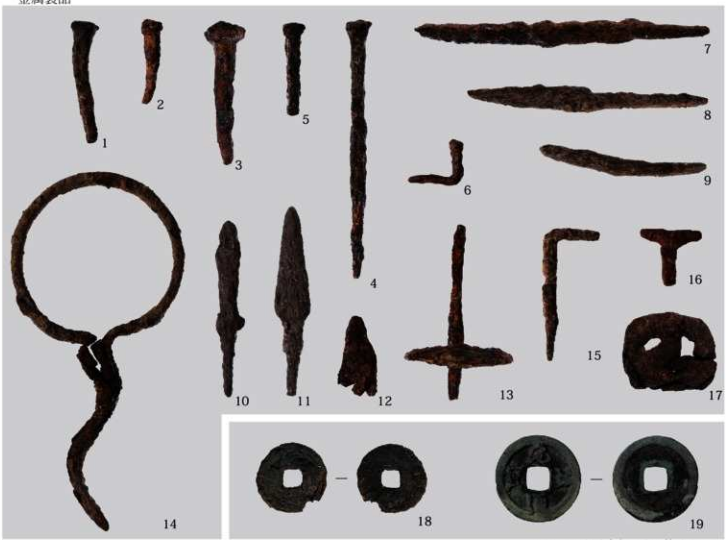
約 S=2/5 にて掲載

55・57・58・63は約S=1/5、その他は約S=1/4

石器

1 ～ 4 は原寸大、その他は S=2/5

金属製品



18・19 は原寸大、その他は S=1/2

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし　あがたまちいせき　だい21じほっくつちょうさほうこくしょ
書　名	長野県松本市　県町遺跡　第21次発掘調査報告書
副書名	
巻　次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№ 245
編著者名	伊藤誠之介、澤柳秀利、白鳥文彦、直井雅尚、吉澤せり子
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620　長野県松本市丸の内3番7号　TEL0263-34-3000（代） （記録・資料保管：松本市考古博物館　〒390-0823　松本市大字中山3738-1　TEL0263-86-4710）
発行年月日	2022（令和4）年3月18日（令和3年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あがたまち 県町	ながのけんまつもとし 長野県松本市 あがたいっちょうめ 県一丁目	20202	161	36度 13分 53秒	137度 58分 50秒	20200509 ～ 20201031 20210701 ～ 20210806	1028㎡	県道松本駅北小松線改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
県町	集落跡	弥生	竪穴建物　2棟 （302・306住） 溝　1本 土坑　1基 ピット　9基	弥生土器、土製円盤 磨製石鏃・打製石鏃	・中期後半の集落を調査
		古墳	竪穴建物　3棟 （305・308・309住） 溝　1本 土坑　1基 ピット　3基	土師器、須恵器、土錘、 ミニチュア土器	・中期の集落を調査 ・溝から土器がまとまって出土
		平安	竪穴建物　2棟 （303・304住） 土坑　5基 ピット　9基 焼土集中　1基	〔土器・陶磁器〕 土師器・黒色土器・須恵器・ 軟質須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器・白磁 〔土製品〕 羽口・風字硯 〔金属製品〕 鏃・刀子・釘・紡錘車・銭貨 〔石器・石製品〕 砥石	・集落の一部を調査 ・竪穴内から鍛冶炉を検出 ・緑釉陶器が出土 ・延喜通宝が出土
		中世以降	竪穴建物　1棟 （301竪）	土師質土器、陶磁器、銭貨	

要　約	・県町遺跡の第21次調査で、県道改良事業に伴う緊急発掘として実施。A～Cの3地区で最大3枚の遺構検出面を確認。Ⅰ検は中世と平安、Ⅱ検は古墳前～中期、Ⅲ検では弥生中期後半の集落跡を調査した。遺構は各時代とも竪穴建物を主体とし、古墳中期には環状の溝が伴う。303住（平安）の床下からは鍛冶炉が検出された。遺物は各時代の土器が多量に出土し、弥生時代では石器類、平安時代では多数の緑釉陶器と銭貨（延喜通宝）がみられた。

松本市文化財調査報告 № 245
長野県松本市

県町遺跡

－第21次発掘調査報告書－

発行日　令和4年3月18日
発　行　松本市教育委員会
〒390-8620 松本市丸の内3番7号
印　刷　精美堂印刷株式会社